
二世帯同居・この10年

定点調査で振り返る同居意識と実態の変容

調査報告書

旭化成ホームズ株式会社
二世帯住宅研究所

はじめに

親子同居は日本人の家族生活のあり方としては大変長い歴史をもっています。しかし、その居住形態をみると戦後においても、親子二世帯の居住スペースが分離されないままの「べったり同居」が大多数を占めていました。そのため、暮らしのうえでも多分に伝統的な家父長制の名残が影を落とし、嫁姑間のいざこざも絶えなかったようです。こうした同居生活に対しては、親の高齢化や大都市の住宅難から同居を望む若い人たちの中にも不安や懸念を抱く人たちが多く、親子二世帯が対等な立場でお互いのプライバシーを尊重しながら、快適な同居生活を楽しめる住宅を求める声が広く存在しました。

旭化成ではこうした生活者の声を汲んで、昭和48年（1973年）から「二世帯住宅」の研究を始め、昭和50年（1975年）に業界で初めて二世帯住宅を発表しました。以来30年が経過しましたが、この間、当社では「二世帯住宅研究所」を設立し、各種の生活者調査、シンポジウム・セミナー、機関誌の発行等の活動を行ないながら、二世帯住宅とその住まい方について地道に研究を重ねてきました。当社がこれまでに提案してきた中には、同居生活の基本的な心構えや準備を定めた「親子同居の7原則」、同居相手による暮らし方の違いをまとめた「息子夫婦同居・娘夫婦同居、8つの工夫」など、今日の親子同居の規範となる考え方も少なくありません。また二世帯住宅という住まい方の概念も、日本独自の住文化として広く日本の社会に浸透してきていると思われま

しかし、親子の望ましい居住関係についての志向は、時代とともに移り変わるものです。特に住まいの問題は、経済、社会、文化、生活、福祉など多岐にわたる社会動向や社会政策と密接にかかわっています。とりわけ今日の都市型住宅では、人口の大都市集中や地価の動向、あるいは本格的な少子・高齢社会の到来、女性の社会進出、単身家族の増加などにみられる家族の変化や多様化は見逃せない要因となるでしょう。さらに、家族に対する人々の意識がどのように変わっていくかは、より一層重要な要因となると思われま

当社は、こうした観点から今後とも生活者に対する調査を行ないながら、家族や社会の変化と生活ニーズを踏まえて、二世帯住宅を一層充実、発展させていきたいと考えています。

今回は、二世帯住宅入居者における同居の意識変化をみるために、平成6年（1994年）、平成9年（1997年）、平成13年（2001年）と平成17年（2005年）の10年を超えて実施してきたヘーベルハウス二世帯住宅入居者を対象とした定点アンケート調査により、二世帯住宅の変容についての分析を行ないました。

アンケートに回答していただいた多数の方々にお礼を申し上げますとともに、家族と住まいのあり方を考える資料として、この調査結果をご利用いただけたら幸いです。

2005年11月

旭化成ホームズ株式会社
二世帯住宅研究所

目次

■はじめに	1
■調査概要	4
■回答者属性	5
■調査要約・考察	9
●同居の理由	11
1. 三大同居理由は「親の老後」「家事・育児協力」「三世代で楽しく」	11
2. 社会的・経済的要因は減少	11
3. 子世帯から見て二世帯同居は親の老後の備え、でも親は現在健康	11
4. 「家事・育児協力」が増加	13
●建物の分離と満足度	14
二世帯住宅の定義はキッチンが2つ	14
5. 日常分離型が増え、同居のための家としての満足度が上昇	15
●同居生活の期待と実感	20
6. 同居三大メリットは「急病の時心強い」、「子供の世話」、「安心して旅行や外出」	20
7. 娘夫婦同居は親世帯を頼り、特に家事協力がメリット	23
8. 分離度による同居のメリットへの影響	24
●同居生活の不安と不満	26
9. 最初は不安でも同居すれば減る	26
10. 分離度が高いほど子世帯の不満は少ない	29
●生活の分離の意識	31
11. 日常生活が分離志向なら二世帯型、融合志向なら単世帯型	31
12. 建物分離度と生活志向が一致し、同居満足度が上昇	36
●同居の提案者	38
13. 子世帯主導の家づくり傾向が強まる	38

●世帯間交流の頻度	40
14. 日常分離でも交流は盛んな状態を維持	40
15. 交流の満足度は上昇	42
●育児の協力	46
16. 活発な孫の行き来が子世帯をサポート	46
17. 娘夫婦同居、フルタイム共働き世帯の孫は親世帯が頼り	48
●家事の協力	54
18. 娘夫婦同居は日常分離の裏で家事協力	54
19. 共用部の掃除は親世帯を頼り、洗濯、ゴミ出しは独立に	60
●介護の協力	66
20. 子世帯の役割は世話・介護から精神的なサポートへ移行	66
21. 介護はサービス利用で、相続は均等という考え方が親子共浸透	70
●家族の変化への対応	76
22. 家族の変化への対応を考え、高齢化にも備えている	76
23. 貸しやすい完全分離型(内部行き来不可)の3割が賃貸を意識	80

調査概要

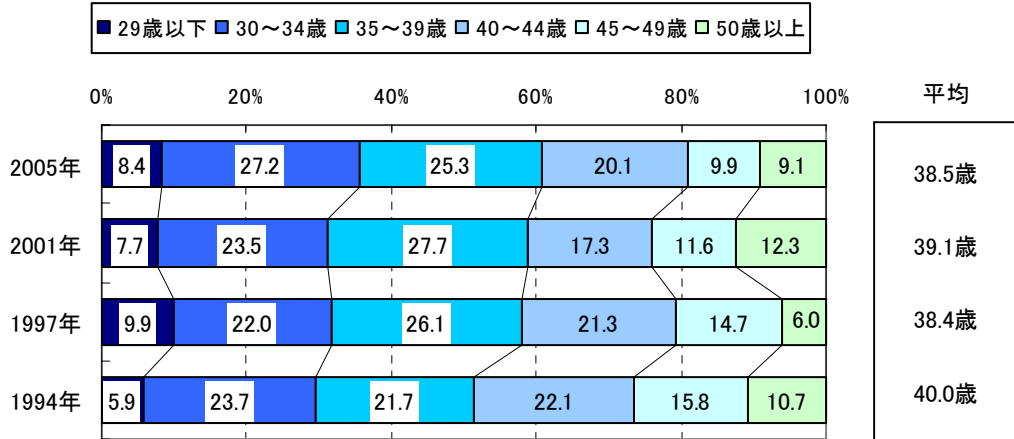
1. 調査名称 二世帯同居・この10年 定点調査で振り返る同居意識と実態の変容
2. 調査目的 二世帯同居における意識と実態の変化を定点調査によって把握し10年間の変化を明らかにする。
3. 調査対象
- 1994年調査
東京、愛知、大阪に居住する二世帯住宅居住者のうち、
入居1年目の子世帯の妻及び親世帯の妻
 - 1997年調査
東京、愛知、大阪に居住する二世帯住宅居住者のうち、
入居1年目の子世帯の妻及び親世帯の妻
 - 2001年調査
東京、愛知、大阪に居住する二世帯住宅居住者のうち、
入居1年目の子世帯の妻及び親世帯の妻
 - 2005年調査
東京、愛知、大阪に居住する二世帯住宅居住者のうち、
入居1年目の子世帯の妻及び親世帯の妻
※今回調査では調査対象の二世帯型（キッチンが2つ以上で二世帯同居）との
比較のため単世帯型（キッチンが1つで二世帯同居）も同時に調査を行った
4. 調査期間
- 1994年調査
1994年7月1日～7月19日
 - 1997年調査
1997年7月16日～8月20日
 - 2001年調査
2001年10月23日～11月20日
 - 2005年調査
2005年8月25日～9月21日
5. 調査方法 往復郵送法
6. サンプル
- 1994年調査
有効回答609名（配布数1,776名、回収率34.3%）
 - 1997年調査
有効回答838名（配布数2,272名、回収率36.9%）
 - 2001年調査
有効回答836名（配布数1,744名、回収率47.9%）
 - 2005年調査
有効回答822名（配布数2,058名、回収率39.9%）

回答者属性

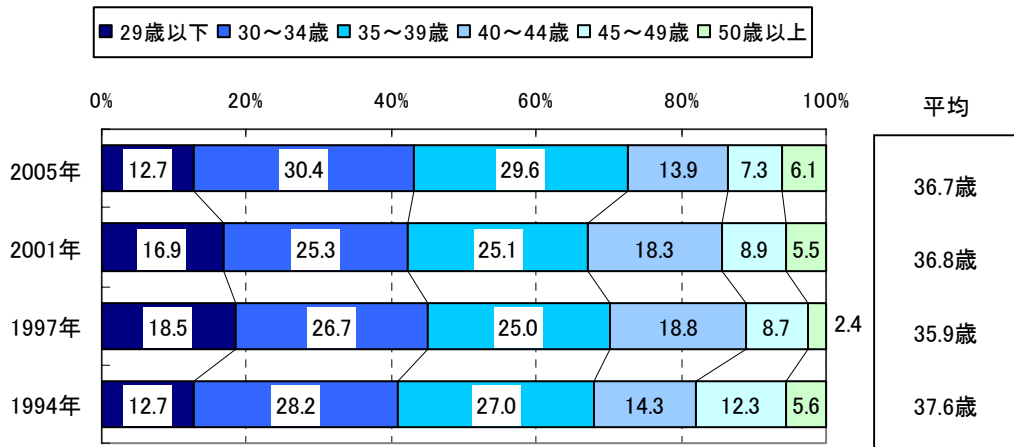
1. 世帯の特性

(1) 子世帯夫婦の年齢

●子世帯夫

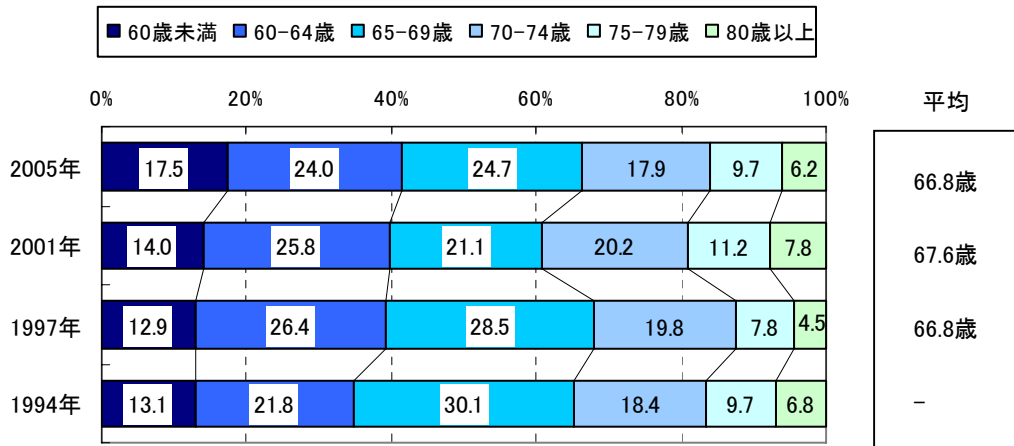


●子世帯妻

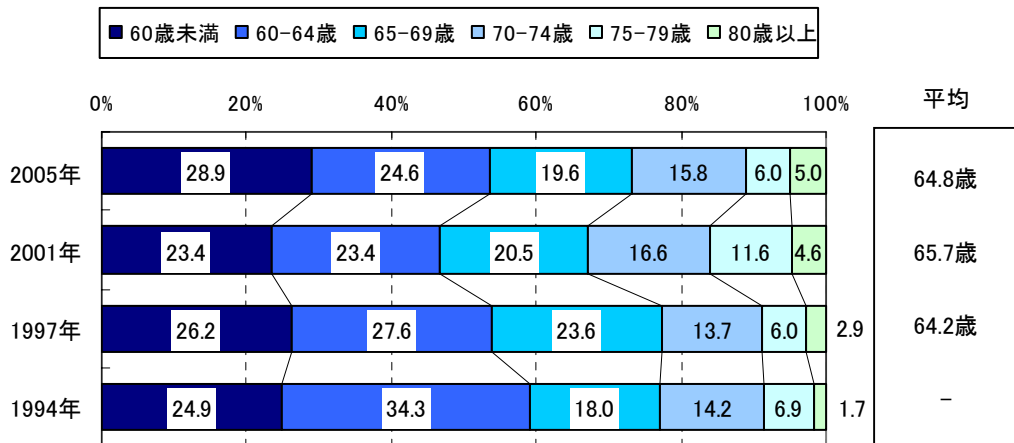


(2) 親世帯夫婦の年齢

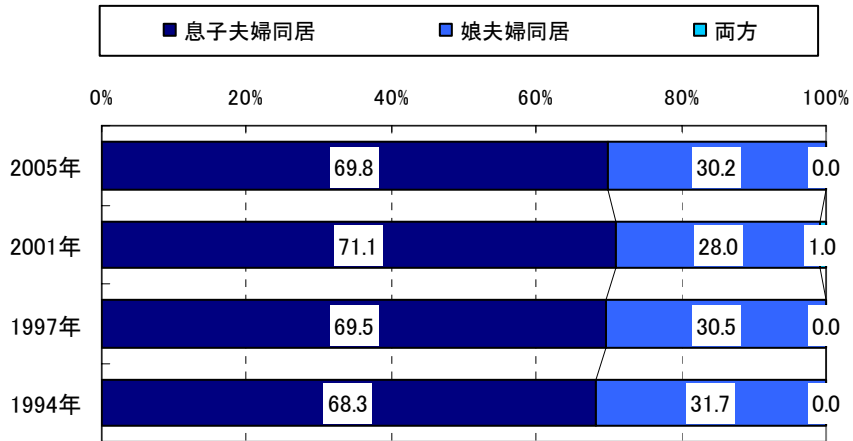
●親世帯夫



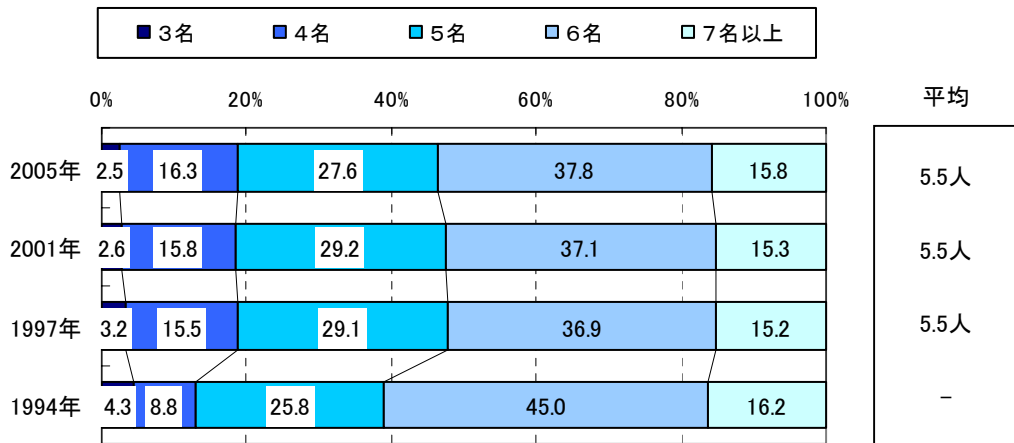
●親世帯妻



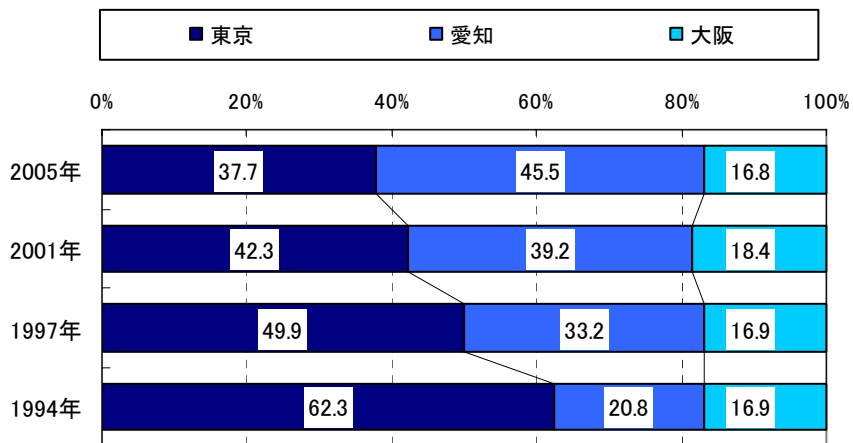
(3) 同居形態



(4) 同居家族人数

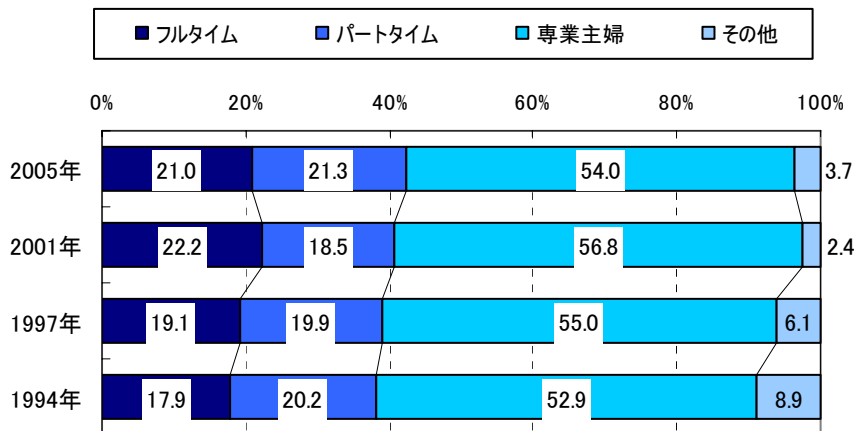


(5) 居住地



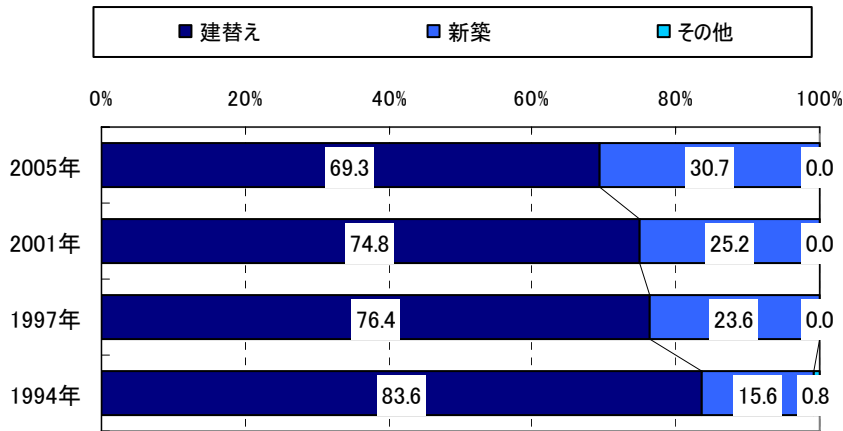
(6) 職業

● 子世帯妻

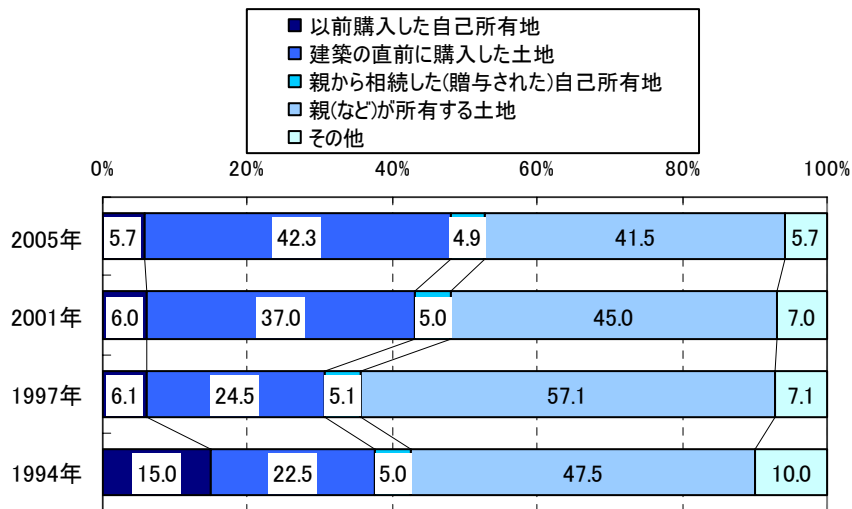


2. 住宅の特性

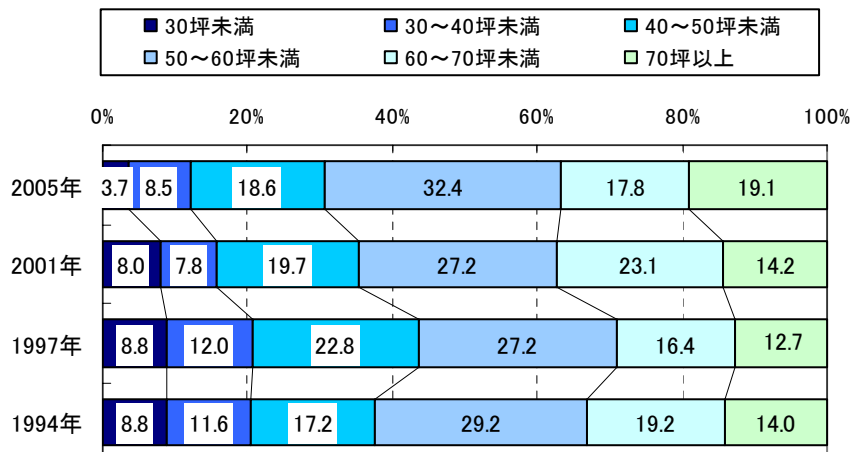
(1) 新築/建替え



(2) 新築時の土地の取得状況



(3) 住居面積 (延床)



調査要約・考察

1. 社会的・経済的な制約が減り、家族の積極的な協力を期待し同居

同居理由として、「親の老後を考え」「家事・育児で協力」「三世代で楽しく」の3つが上位を占めました。

94年に第2位（49.8%）であった「独自に家を持つことが困難」は減少し今回第4位（31.2%）となりました。同時に「親子が同居するのが当然」「親の資産の継承を考えて」も減っており、社会的・経済的に同居しなければならないケースは少なくなったと思われます。代わって「家事・育児で協力しあえる」が大きく伸びて第2位（94年32.5%→今回46.6%）となりました。この志向はフルタイムの共働き子世帯や20代の子世帯に多く、同居満足度が「大変満足」の人に多いという特徴があり、多忙な子世帯とサポートする親世帯の組合せが二世帯同居ライフスタイルの一つの典型的パターンと言えそうです。同居生活の期待においても「子供の世話」（94年33.2%→05年46.0%）、「家事に協力」（94年20.9%→05年25.2%）が増加傾向であり、住んでみての実感でも「子供の世話」49.6%、「家事に協力」33.4%がそれぞれ期待を上回るなど、これを裏付ける結果が出ています。

「親の老後を考え」は10年間常に子世帯同居理由の第1位（94年65.8%→05年56.3%）を保っていますが、「高齢化・病弱化」（94年30.5%→05年23.0%）と共に減少しています。同居への期待では「急病の時心強い」が親世帯で87.5%を占めますが、実際住んでみての実感では12.9ポイント下がるなど、「老後を考え」は将来を見越した備えの性格が強く、現在それほど健康状態が深刻ではないことをうかがわせる結果となっています。

2. 子世帯主導で分離度の高い二世帯住宅を目指す

同居を望んだ提案者が子世帯であるケースが増加（子世帯回答97年36.1%→05年40.6%、親世帯回答97年63.2%→05年66.5%）していますが、同時に親世帯での「自分が望んだ」も増える傾向（97年30.5%→05年35.5%）があります。また分離型志向が強い子世帯妻が二世帯を提案するケースが多くかつ増えて（94年64.7%→05年75.3%）おり、子世帯主導で親世帯と協調しながら二世帯住宅を造っている像が浮かびます。

建物分離度では「台所・浴室・玄関が独立、内部行き来可」が94年の25.1%から36.0%に増加しています。希望の分離状態ではこの型がトップ（子世帯49.8%親世帯47.6%）であり、理想に近づいたと言えます。この背景として、建替えでなく新築が増えて（94年15.6%→05年30.7%）いることが挙げられます。床面積40坪未満のものが減少（計94年20.4%→05年12.2%）したことと合わせて考えると、土地が狭い場合は建替えにこだわらず、分離型を造るための広さが確保された土地を探すケースが増えたものと推測されます。その結果、各世帯のスペースが狭いという広さの不満、片方の世帯の日照が確保できないといった環境の不満が減少し、特に子世帯では「大変満足」が大幅に上昇（94年16.5%→05年32.3%）し、分離度の高いものほど「大変満足」が多い、という結果に結びついています。

調査要約・考察

3. 日常生活は自立しつつ、孫は頻繁に世帯間を行き来

親子同居のあり方の希望を尋ねると、キッチンが独立の二世帯は「日常生活は全て別だが交流盛ん」が最も多く57.4%となり、10年間でほぼ一定しています。実際の交流頻度は行き来一日一回以上が8割と活発な交流状態を示しています。10年間で分離度は高くなって来ていますが、交流頻度はあまり減っておらず、交流頻度満足度については親世帯が94年22.8%→05年35.6%に、子世帯は94年21.5%→05年29.9%にそれぞれ上昇しています。

育児協力については孫が「日常的にいつも世話になっている」が55.9%で94年の33.8%から大幅に伸びています。子世帯妻がフルタイムの場合、孫が「日常的に世話になっている」は70.5%とより高くなり、「不在時の世話」「食事の世話」「送り迎え」の率も他に比べ高くなっています。これらの項目は分離度の影響をあまり受けておらず、日常生活の分離が必ずしも孫の行き来を妨げていないことを示しています。孫は交流を「大変好んでいる」が94年59.5%→05年68.8%と増えていて、孫の教育上での対立は「全くない」が97年43.1%→05年46.0%と若干好転しています。

一方で家事協力については、10年間で目立った変化は少なく、分離度が高く、キッチンが独立している場合は食事も別々が多く、家事も基本的には分離されています。その中で娘夫婦同居の場合は、息子夫婦同居に比べ、家事協力を場合に依りて行うことが多い傾向が見られます。

介護協力については、同居家族が世話や介護をする、という意識は減り、実質的な介護はプロのサービスを想定するように変化し、同居家族の役割としては急な病気の時や精神的な安心感に移行してきています。要介護、入院もしくは生活に支障のある健康状態の家族がいる率は合せて16.1%であり、大多数はまだ元気なのですが、老後に備えて二世帯に、という考えは依然強いものがあります。

同居の理由

1. 三大同居理由は「親の老後」「家事・育児協力」「三世代で楽しく」

二世帯同居を始めたきっかけとしては、「親の老後を考えて」、「家事・育児等で協力しあえる」、「親子孫の三世代で楽しく暮らしたい」が三大理由として挙げられます。10年間の変化を見てみると、

「親の老後」は若干減少傾向が見られるものの、4回の調査全てで第1位であり、今回も56.3%と唯一半数以上の人々が挙げた同居のきっかけとなっています。

「家事・育児協力」は94年には32.5%（第4位）から、今回46.6%（第2位）まで上昇してきています。

「親子孫で楽しく暮らしたいから」は94年は46.7%、今回は44.0%と常に上位を保っています。一方で、94年に49.8%（第2位）であった「独自に家を持つことが困難」は今回31.2%（第4位）に減少しました。

親世帯の回答では同じ3つが上位を占めるものの、「自分たちの老後を考え」の減少が著しく第3位に後退し、「親子孫の三世代で楽しく」が第1位となっています。

2. 社会的・経済的要因は減少

子世帯の「親子が同居するのが当然」は94年の21.6%から、今回12.7%となっており、社会的な規範から同居するケースは減少してきたことがわかります。今回若干数字が上がったのは、比較的この回答が多い愛知県のサンプルの比率が今回高いことが影響しています。親世帯についても同様に減少して今回19.5%となっています。

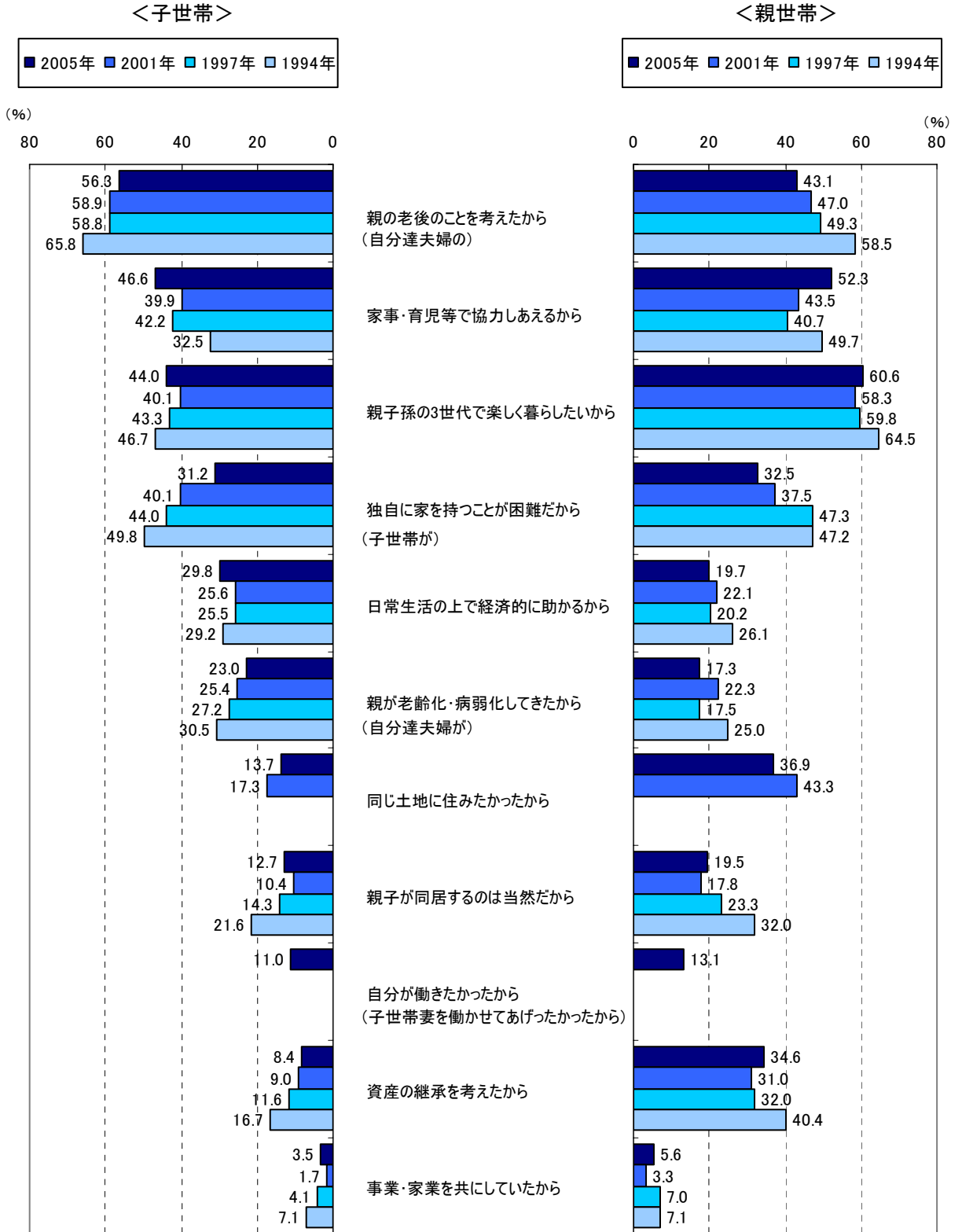
これは同居するのが当然、という社会的背景がなくなってきたことを示していると言えるでしょう。

「独自に家を持つことが困難」「親の資産の継承を考えて」も同様に下がってきています。土地価格が落ち着いてきて、別の場所に建てるのが選択肢の範囲に入っていながら、二世帯同居を選択するケースが増えていることを示唆しています。

3. 子世帯から見て二世帯同居は親の老後の備え、でも親は現在健康

「親の老後」が第1位を保っている中で、「親が老齢化、病弱化してきたから」は着実に減少しており、親世帯においては「自分たち夫婦の老後を考え」、「自分たちが老齢化、病弱化してきたから」共に減少傾向にあります。親世帯が元気なうちに将来の安心のために子世帯が二世帯同居を始めている傾向が強くなってきていることがうかがえます。

□同居の理由



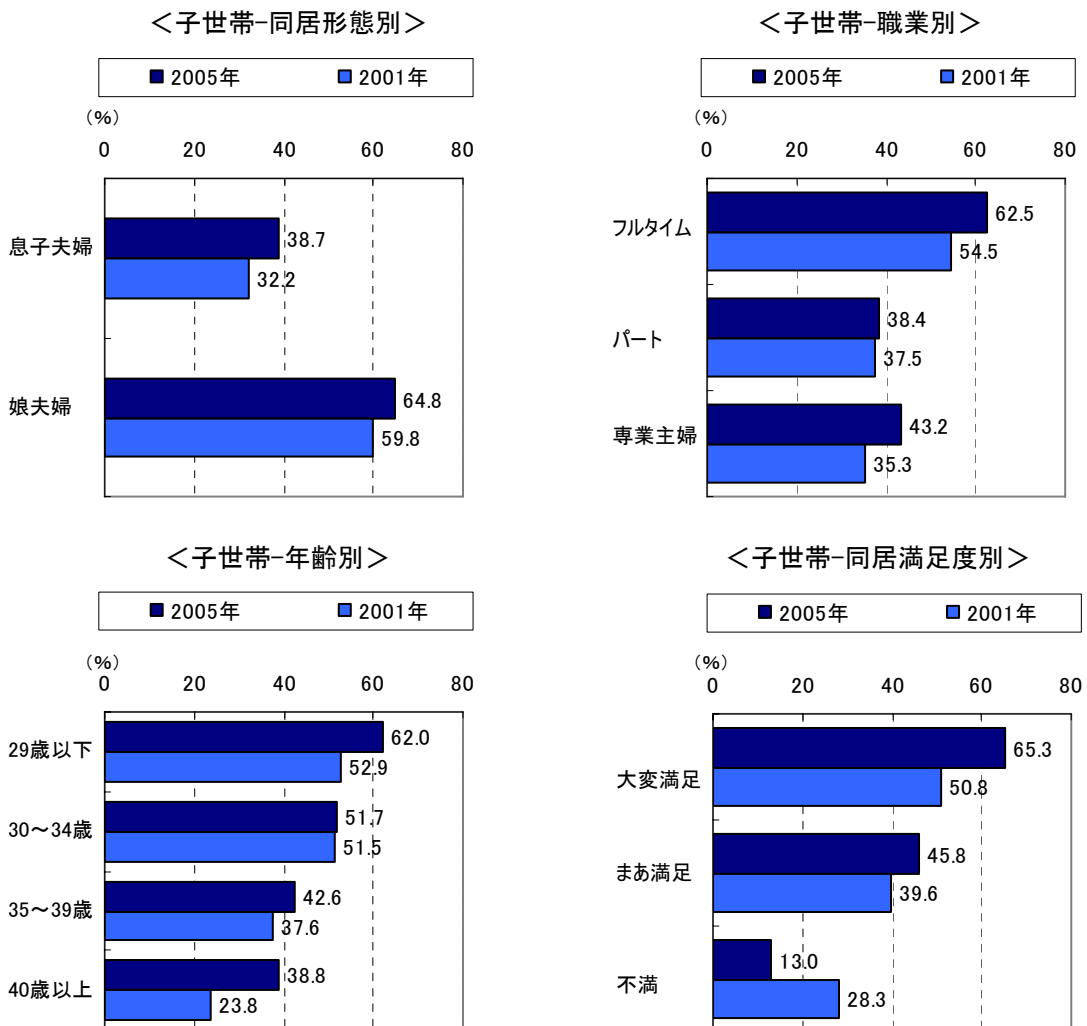
4. 「家事・育児協力」が増加

「家事・育児協力」は、息子夫婦38.7%に対し、娘夫婦が64.8%と26ポイントの差がついており、子世帯の妻が実の娘である娘夫婦同居が家事・育児の協力を志向しています。就業形態別ではフルタイム（62.5%）がパートタイム、専業主婦に比べ大幅に多く、前回2001年からの増加も顕著であることがわかります。子世帯の共働きを親世帯のサポートで継続しよう、という枠組みが垣間見えます。

また年齢別の分析では若いほど家事協力志向は強く、29歳以下のグループでは「家事・育児協力しあえるから」は62%に達しています。また、2001年の結果では家事育児協力志向が低かった40代の増加率が大きいことも注目されます。

また、この項目は同居満足度との関係も深く、「大変満足」の人の65.3%がこの項目を同居の理由に挙げているのに対し、「不満」の人は13%です。

□同居の理由：「家事・育児等で協力しあえるから」



建物の分離と満足度

二世帯住宅の定義はキッチンが2つ

「二世帯住宅」を本報告書では「キッチンが両世帯にあるもの」と定義し、親子孫の3世代住宅であってもキッチンが一つのは「単世帯」と呼ぶことにします。キッチン、浴室、玄関の共用性と、内部行き来の可不可により、建物分離度を以下の区分に分けて分類し、分析をします。また、分離度別の分析単世帯型（キッチンが1つのもの）に3世代以上で居住している世帯のデータを合せて表示しています。

建物分離度のタイプ分け

名称	二世帯/単世帯	二世帯住宅					単世帯	
	日常生活	完全分離型	部分共用型		融合型			
建物	キッチン	独立			共用+サブキッチン		共用	
					親カ ^o	子カ ^o		
	浴室	独立		共用				
	玄関	独立		共用				
	内部行き来	不可	可					
		1	2	3	4	5	6	7

建物分離度の区分

- 1：台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり、内部で行き来できない
- 2：台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり、内部で行き来できる
- 3：台所、浴室は各世帯に1つずつあるが、玄関は共用である
- 4：台所は各世帯に1つずつあるが、浴室、玄関は共用である
- 5 + 6：主な台所が共用で、他にサブキッチンがある
- 7：（台所、浴室、玄関が全て共用の）単世帯型

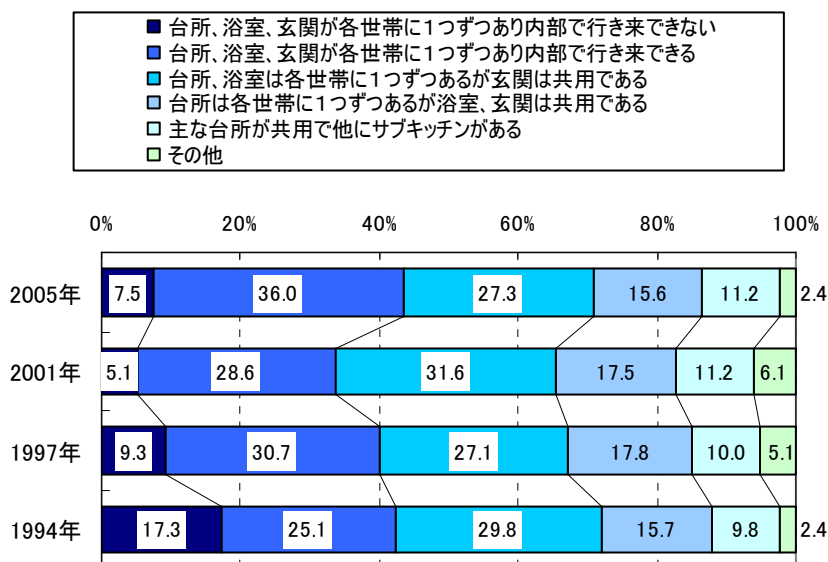
建物の分離と満足度

5. 日常分離型が増え、同居のための家としての満足度が上昇

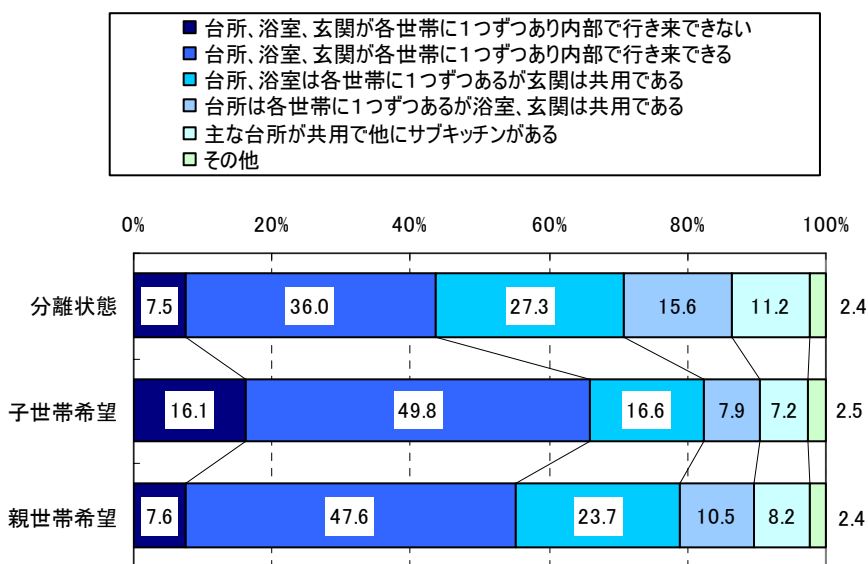
住宅の分離状態は「台所・浴室・玄関が独立、内部行き来可」のものが増加しています。実際に暮らしてみてもの分離状態の希望と比較すると、親子両世帯共通の傾向として、この「台所・浴室・玄関が分離、内部行き来可」のタイプに希望が集中し、全体に分離度の高い方へシフトすることが見て取れます。

□建物の分離と満足度：分離状態の現状と希望

<現状>



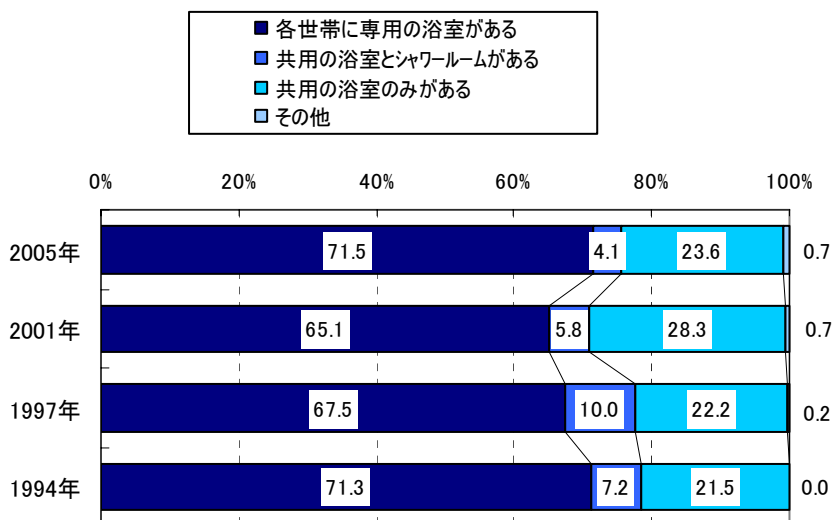
<希望>



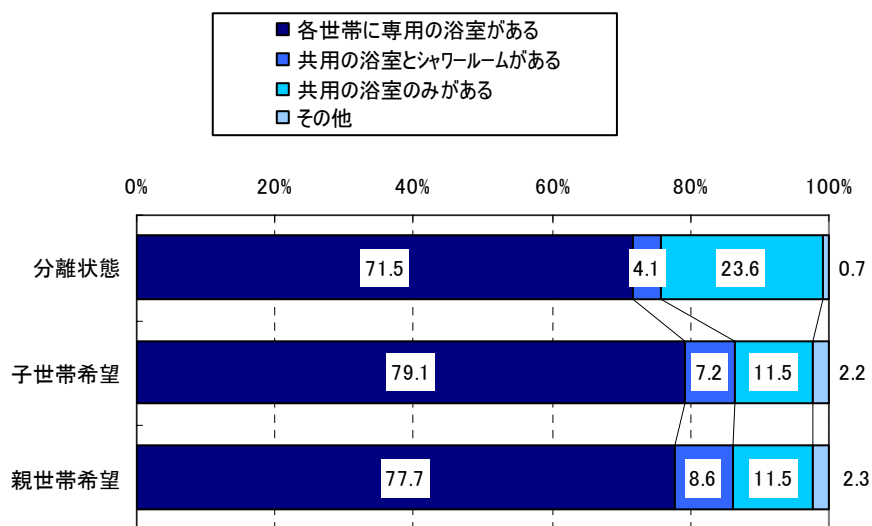
浴室については約7割が各世帯独立して設置しており、実際に暮らしてみてもの希望と比較すると、約1割が「共用浴室のみ」から「世帯で専用の浴室」を持つ希望にシフトしています。

□建物の分離と満足度：浴室の現状と希望

<現状>



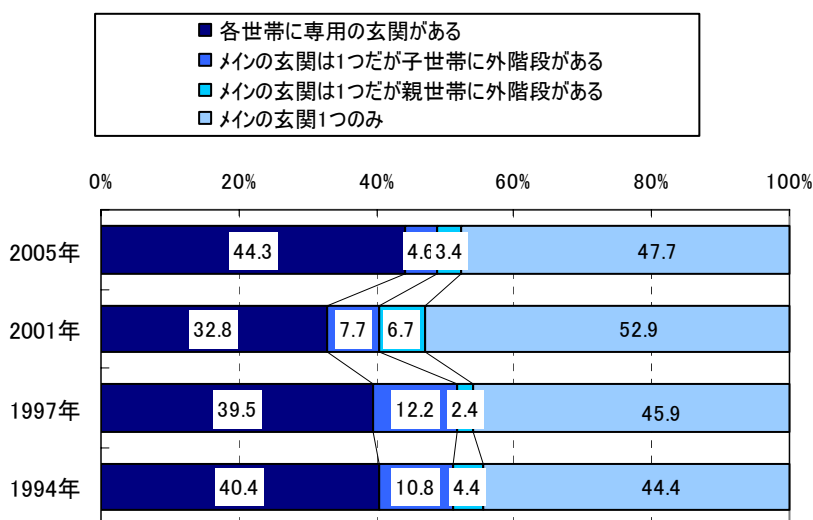
<希望>



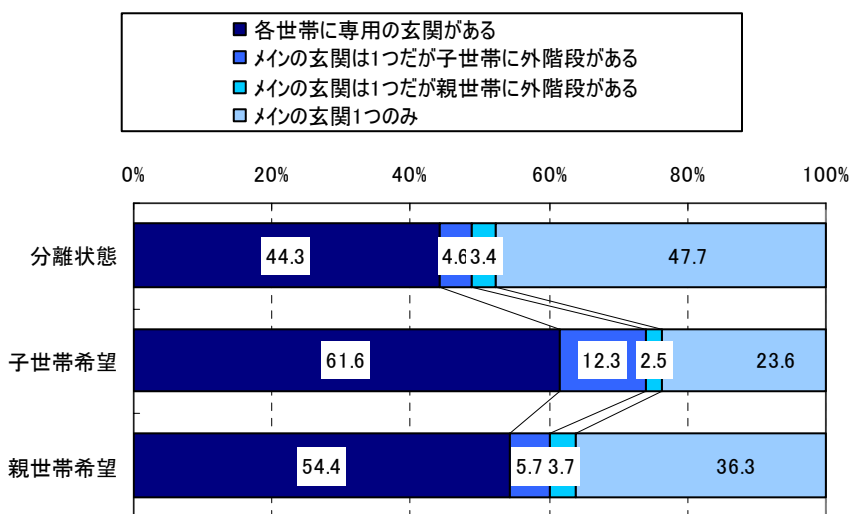
玄関については44.3%が「各世帯に専用」に設置しており、「メインの玄関が共用で1つのみ」のケースが47.7%と大きく分かれています。実際に暮らしてみてもの希望と比較すると、「各世帯に専用」の玄関を持つ希望に親、子双方共大きくシフトしています。10年間の変化としては外階段を持つケースが減少していることもこの傾向に拍車をかけているようです。

□建物の分離と満足度：玄関の現状と希望

<現状>



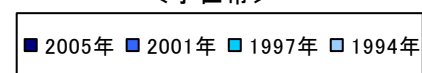
<希望>



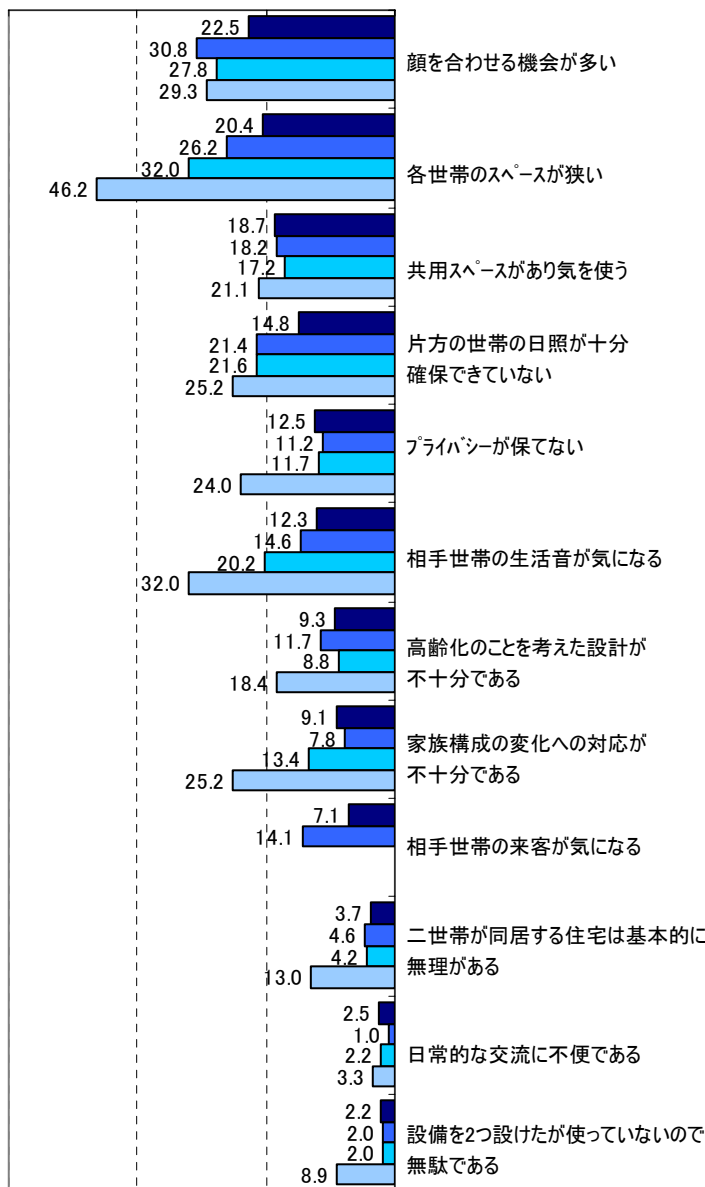
同居する建物としての不満を尋ねると、「顔を合わせる機会が多い」「共用スペースがあり気を使う」といった独立性不足の不満が上位を占めるのに対し、「日常的な交流に不便」「設備を2つ設けたが無駄」といった不満は少なく、より分離度を高めた方が満足度が上がることを示唆しています。

10年間の変化を見てみると、「各世帯のスペースが狭い」という広さの不満、「片方の世帯の日照が確保できない」といった環境の不満が大きく減少しています。延床面積で40坪以下の二世帯が大きく減ったこと、二世帯住宅に合った土地を探して直前に購入するケースが増えたことが寄与しているものと思われます。更に「家族構成への変化が不十分」なものが減り、「顔を合わせる機会が多い」「共用スペースがあり気を使う」といった独立性不足の不満もやや減っています。

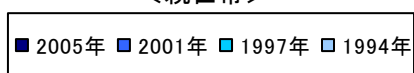
□建物の分離と満足度：同居する建物の不満
 <子世帯>



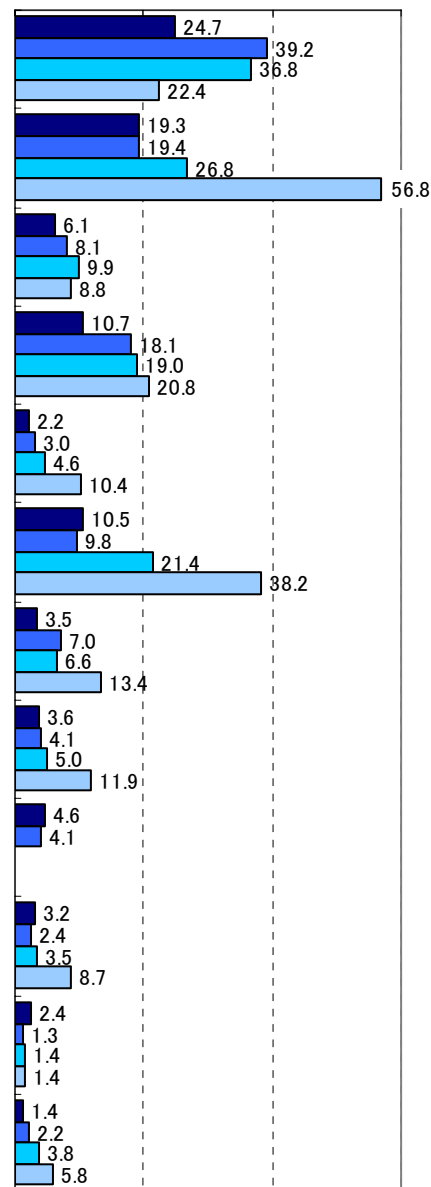
(%)
 60 40 20 0



<親世帯>



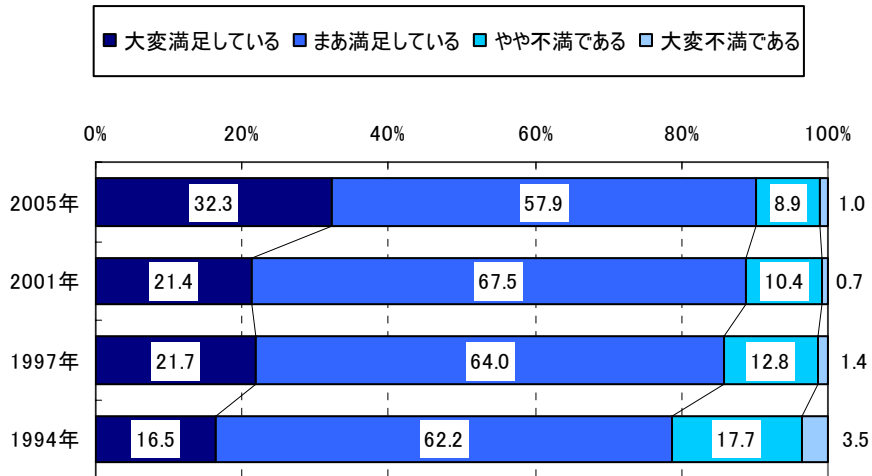
(%)
 0 20 40 60



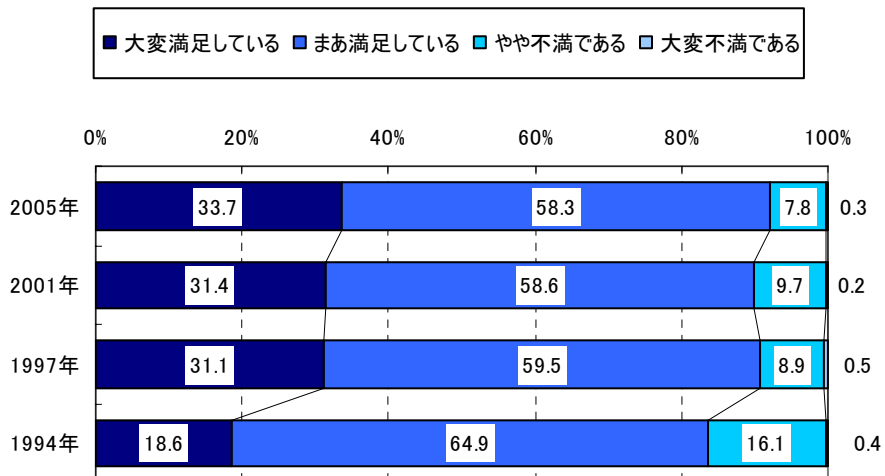
この結果、同居する家としての満足度は「大変満足」が増え、特に子世帯においてそれが顕著です。

□建物の分離と満足度：同居するための家としての満足度

<子世帯>



<親世帯>



同居生活の期待と実感

6. 同居三大メリットは「急病の時心強い」、「子供の世話」、「安心して旅行や外出」

子世帯においては「同居に期待していたこと」（以下「期待」）「実際に同居してみて良かったこと」（同「実感」）共に、「急病の時心強い」、「子供の世話」、「安心して旅行や外出」の順となりました。

「急病の時心強い」は今回子世帯の74.6%、親世帯の87.5%が「期待」として回答し、10年間4回の調査で変わらず常に1位を保っています。「実感」では子世帯で2.9ポイント、親世帯で12.9ポイント下がっており、病気の心配は将来の話であって、現在は健康不安が深刻ではないことをうかがわせる結果となっています。親世帯の「老後の世話をしてもらえる」という期待も10年間で大幅に減少し、更に実感は期待より8.6ポイント低くなっています。

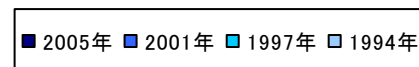
子世帯における「子供の世話」、親世帯における「孫の世話」は10年前と比べ増加傾向にあり、「実感」は「期待」を若干上回る傾向があります。これは前出の同居の理由の「家事・育児協力」の増加に連動していると思われます。子世帯側では「子供の世話」が「子供の精神的成長に役立つ」より19.8ポイント高いのに比べ、親世帯側では逆に「孫の世話」より「孫の成長に協力できる」が8.2ポイント高く、子世帯が「世話」を、親世帯が「成長」をメリットと考える傾向が強いことがわかります。

「安心して旅行や外出」は昨今の防犯上の不安の高まりにも関わらず、特に親世帯で高い水準を保っており、「実感」が「期待」を上回ります。他世帯の存在が防犯上の不安を減じていることが推測されます。

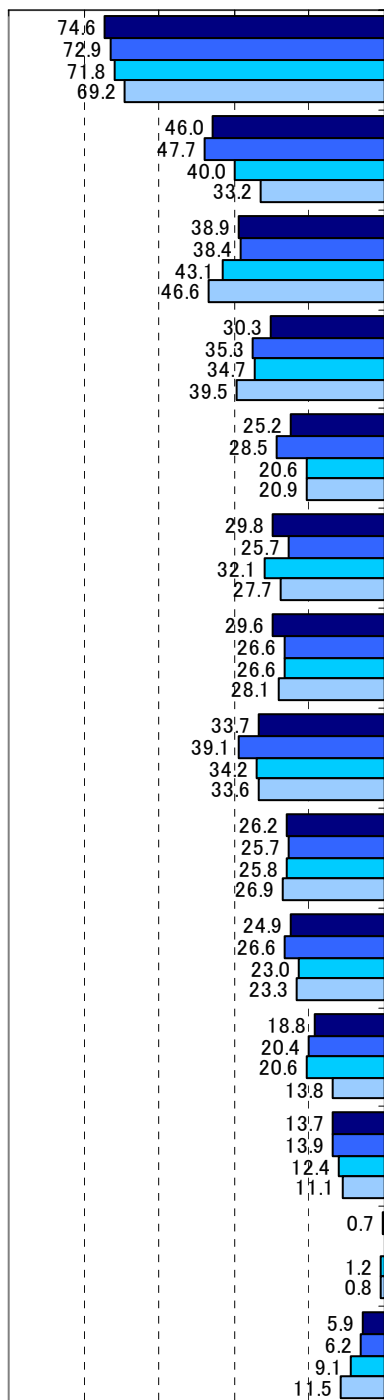
中位の項目の中では、子世帯では「家事に協力」が増加してきていることが注目されます。親世帯では「快適な住まいや環境が得られる」という期待が増加し、実際にほぼ期待通りとなっていることがわかります。

□同居生活の期待と実感

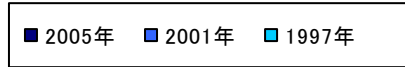
<子世帯-期待>



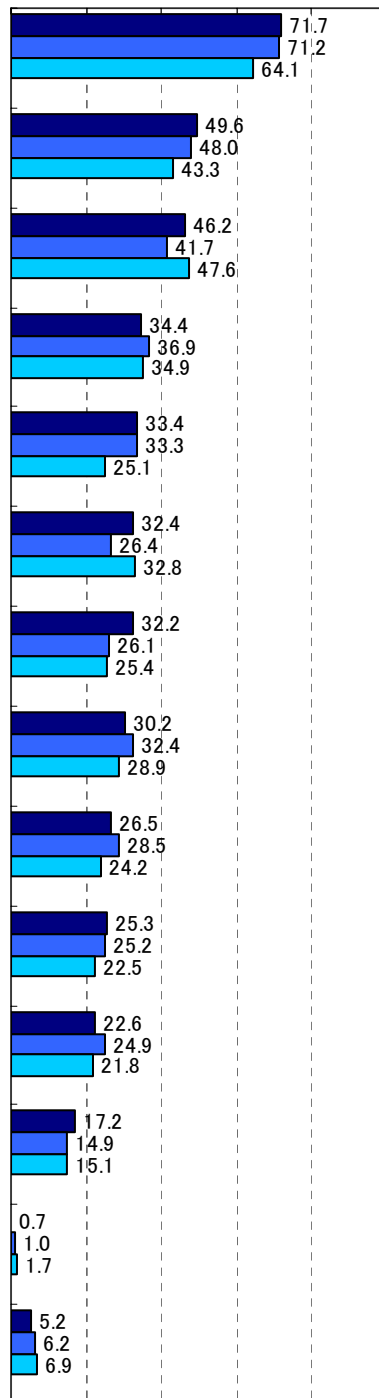
(%)
100 80 60 40 20 0



<子世帯-実感>

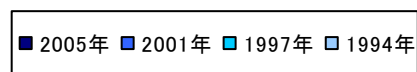


(%)
0 20 40 60 80 100



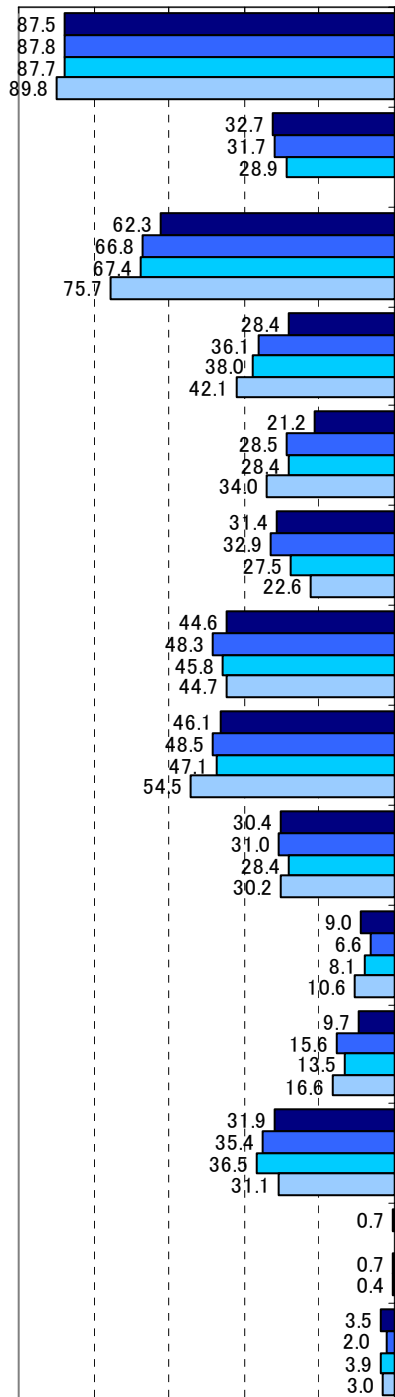
□同居生活の期待と実感

<親世帯-期待>

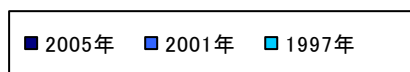


(%)

100 80 60 40 20 0

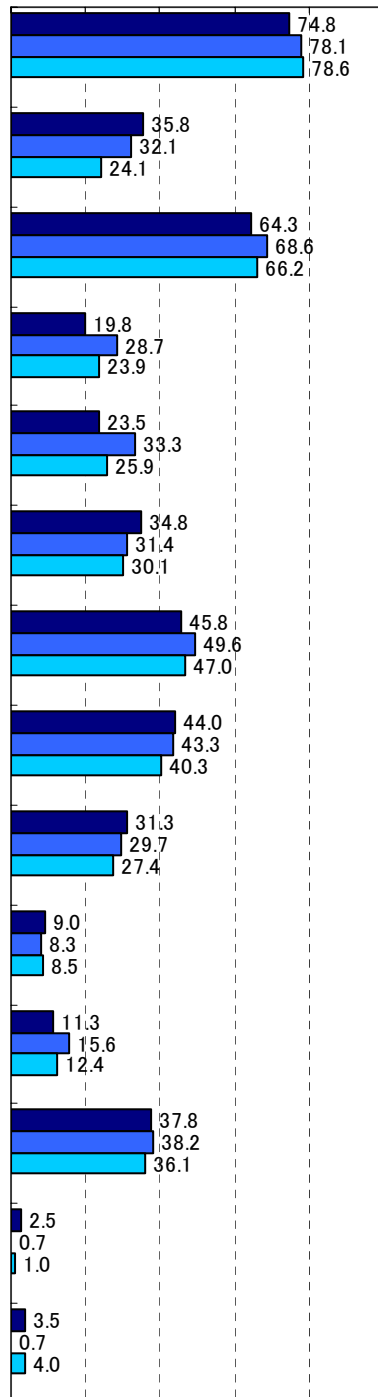


<親世帯-実感>



(%)

0 20 40 60 80 100

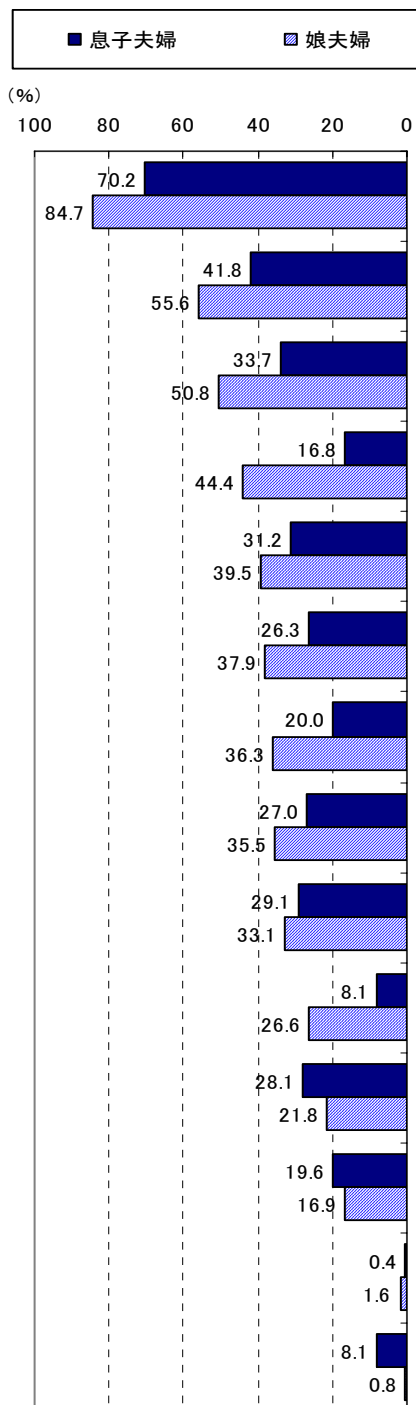


7. 娘夫婦同居は親世帯を頼り、特に家事協力がメリット

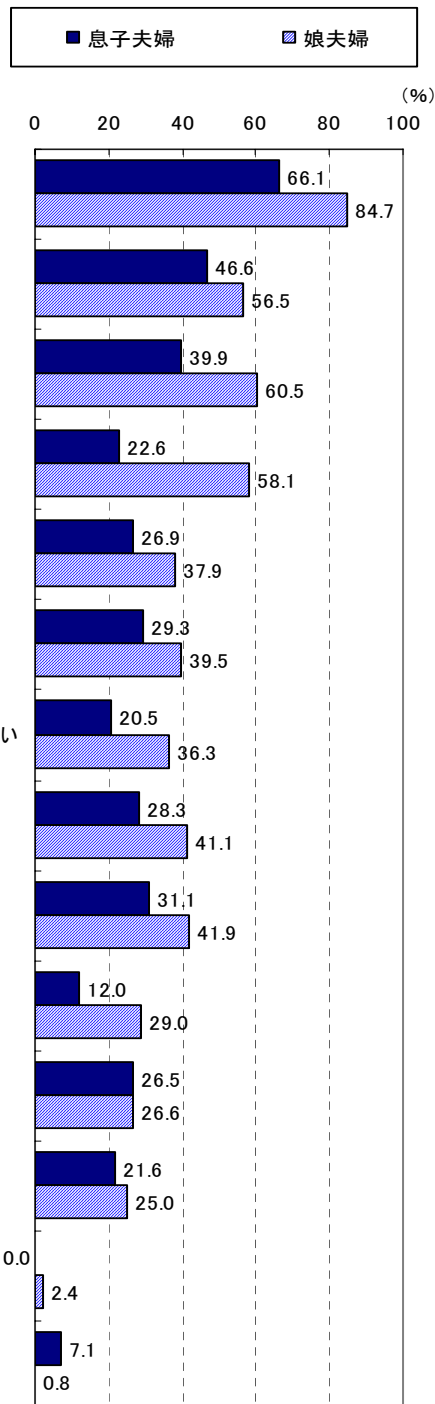
息子夫婦同居、娘夫婦同居別に分析してみると、多くの項目で娘夫婦同居の方が、息子夫婦同居よりメリットを感じる率が高くなります。特に「安心して旅行や外出」、「家事に協力」に関しては娘夫婦同居の方が大幅に高くなっています。

□同居生活の期待と実感

<子世帯-同居形態別-期待>



<子世帯-同居形態別-実感>



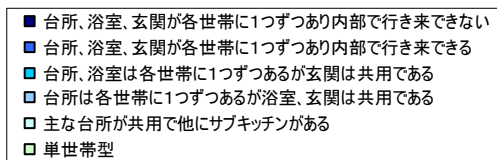
8. 分離度による同居のメリットへの影響

住宅設計における世帯の分離度別に分析してみると、「急病の時心強い」と「子供の世話」は分離度の影響をほとんど受けておらず、完全分離であっても同じ建物内にいることのメリットは変わらないことがわかります。

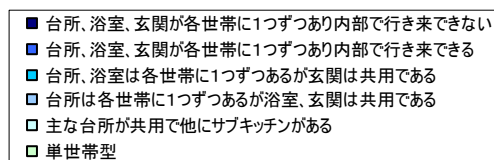
「安心して旅行や外出」は、キッチン、浴室を独立させた分離度が高いグループにおいてメリットと感ずる率が高くなります。分離度の高いグループは両世帯一緒に外出する機会が比較的少なく、外出時に片方の世帯が在室している可能性が高いためと考えられます。

□同居生活の期待と実感：「自分や家族の急病の時など心強い」「子供の世話をしてもらえる」「安心して旅行や外出ができる」

＜子世帯-分離度別-期待＞



＜子世帯-分離度別-実感＞

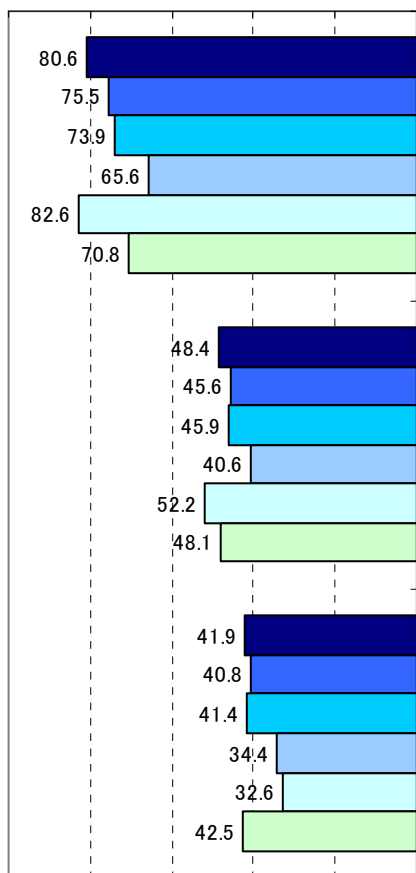


(%)

(%)

100 80 60 40 20 0

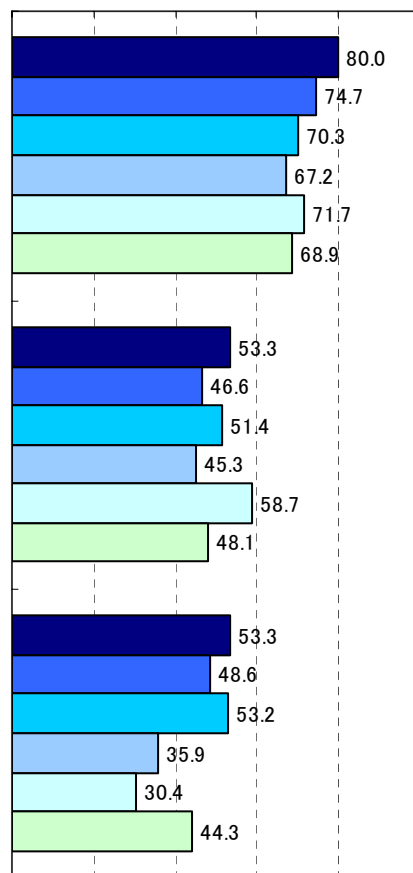
0 20 40 60 80 100



自分や家族の急病の時など心強い

子供の世話をしてもらえる

安心して旅行や外出ができる



「家事の協力」については、融合度が高い方が高く、キッチン、浴室など共用部分が増えるため当然の結果と考えられます。

一方「文化・生活の知恵の吸収」については、分離度が高い方が高い傾向にあり、世帯の分離がこのような交流を妨げてはならず、日常生活の分離度が高い方が古いこと、新しいことを困った時に聞くといったメリットを感じやすいのではないかと推測されます。

□同居生活の期待と実感：「家事に協力してもらえる」
「伝統的な文化や習慣、生活の知恵を吸収できる」

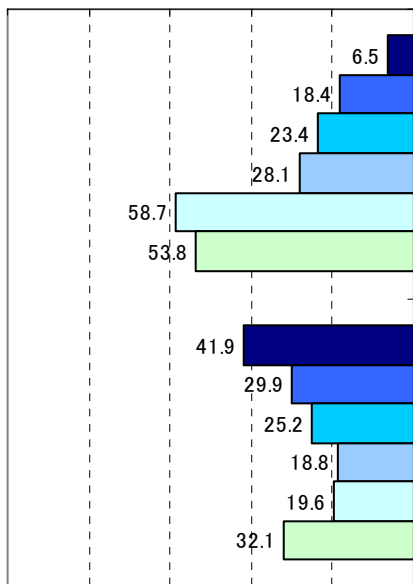
<子世帯-分離度別-期待>

- 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できない
- 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できる
- 台所、浴室は各世帯に1つずつあるが玄関は共用である
- 台所は各世帯に1つずつあるが浴室、玄関は共用である
- 主な台所が共用で他にサブキッチンがある
- 単世帯型

<子世帯-分離度別-実感>

- 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できない
- 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できる
- 台所、浴室は各世帯に1つずつあるが玄関は共用である
- 台所は各世帯に1つずつあるが浴室、玄関は共用である
- 主な台所が共用で他にサブキッチンがある
- 単世帯型

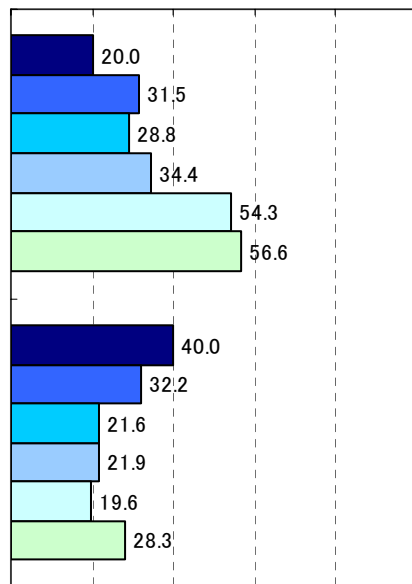
(%)
100 80 60 40 20 0



家事に協力してもらえる

伝統的な文化や習慣、生活の知恵を吸収できる

(%)
0 20 40 60 80 100



同居生活の不安と不満

9. 最初は不安でも同居すれば減る

子世帯の同居生活の不満は「日常的な気遣い」(32.6%)「生活時間の違い」(27.2%)「友人・親戚との交流に気遣い」(23.9%)「生活の干渉」(23.7%)の順に高く、「生活全般の価値観」(19.6%)がこれらに次いで多くなっています。

親世帯の場合は「友人・親戚との交流に気遣い」「生活の干渉」が少ないほかは同じ3つの要因が「生活時間の違い」(21.7%)「日常的な気遣い」(14.1%)「生活全般の価値観」(12.2%)の順で挙がっています。

同居する前に不安に感じていたことと比較すると、全体に各項目のスコアが低下し、「特になし」が増えて、思ったほどではなかった、という傾向が読み取れます。中でも「生活時間の違い」「生活の干渉」「食事の好み」は低下が大きくなっています。

10年間の変化はそれほど大きくはなく、「日常的な気遣い」「生活全般の価値観」の2項目で若干低下している傾向が見られる程度です。

□同居生活の不安と不満

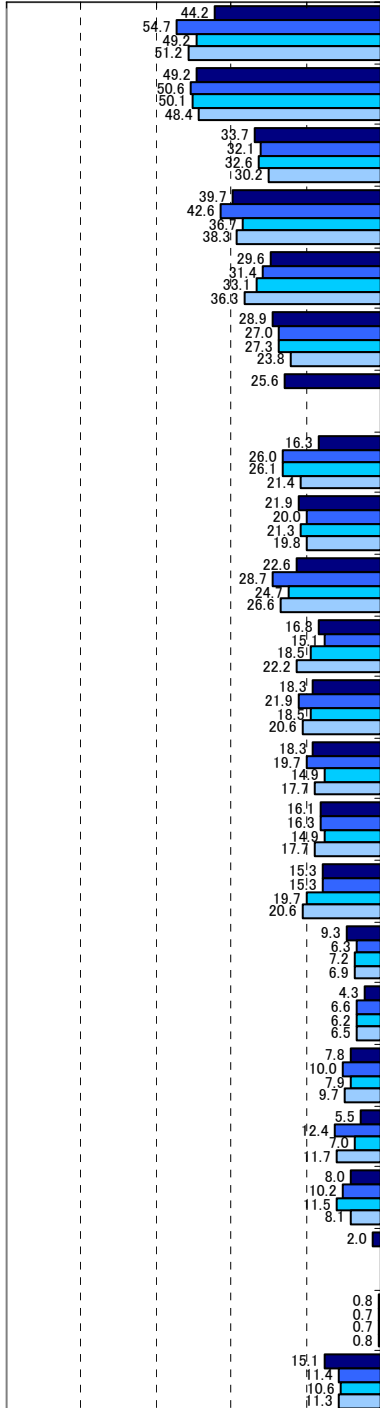
<子世帯-不安>

<子世帯-不満>

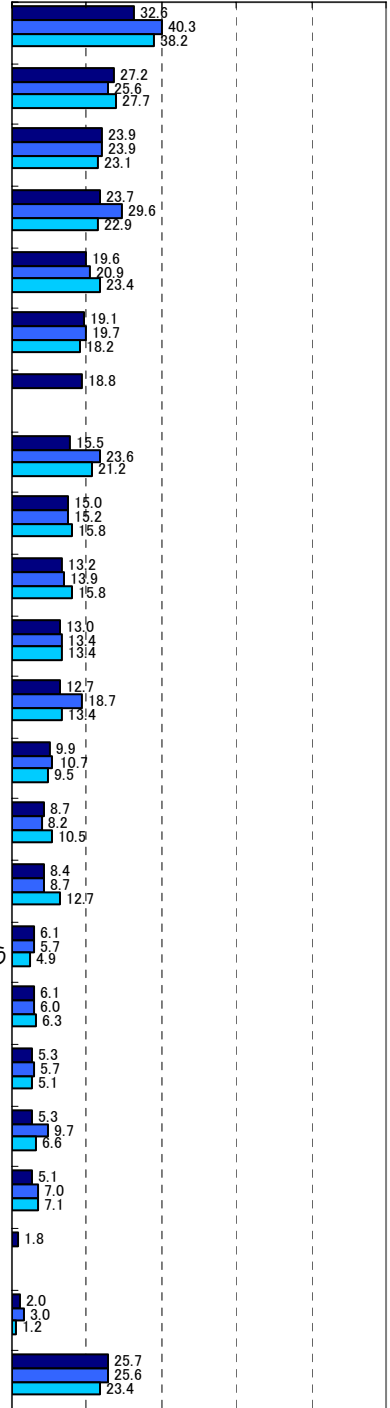


(%)
100 80 60 40 20 0

(%)
0 20 40 60 80 100

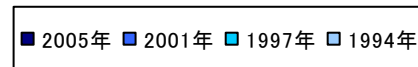


- 日常的に気遣いが増える
- 生活時間やリズムが違う
- 友人や自分の親戚との交流に気がつかう
- 生活の干渉を受けやすい
- 生活全般に対する価値観が違う
- 世帯間のプライバシーが確保できない
- 自分が夜遅く帰りにくなる
- 外出やレジャーが自由に楽しみにくい
- 子供の教育やしつけの考え方が違う
- 食事の好みなどが違う
- 相手世帯の来客に気を遣う
- 自分の一人の時間が持たにくい
- 家事のやり方が合わない
- 親戚や近所付き合いが多くなる
- ご主人と親の板挟みになる
- 言葉遣いや礼儀作法などの考え方が違う
- 経済的な負担が重くなる
- 親世帯の世話で負担が重くなる
- 家事の負担が重くなる
- 親子間に遠慮がなくなり甘えが生じる
- 自分が仕事をしにくくなる
- その他
- 特にない

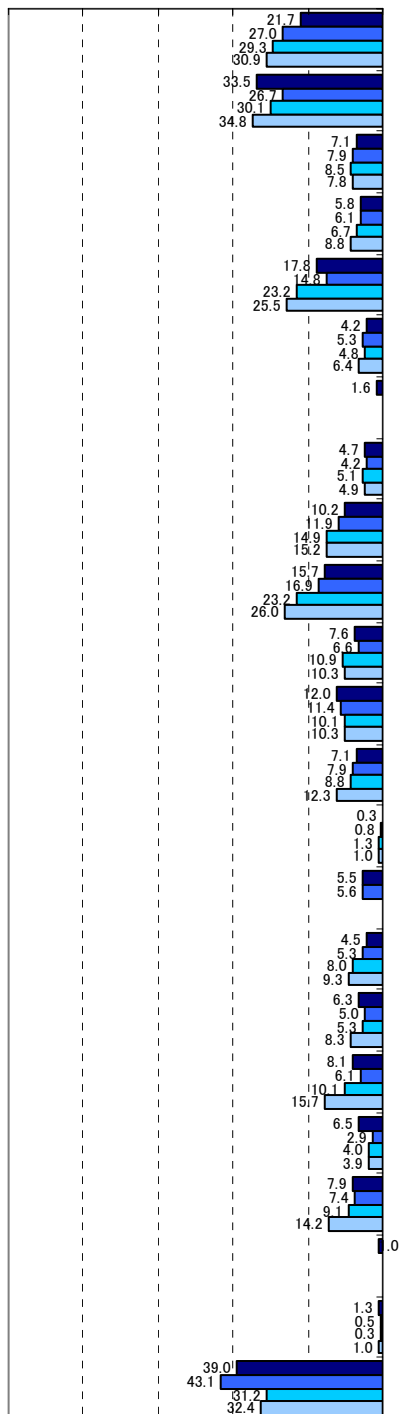


□同居生活の不安と不満

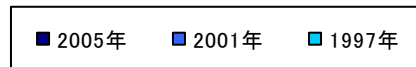
＜親世帯-不安＞



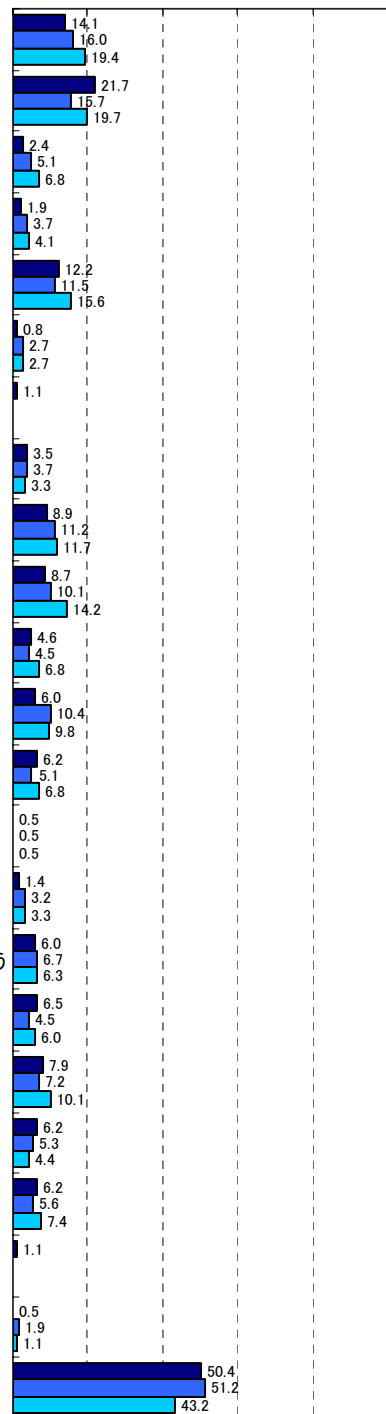
(%)
100 80 60 40 20 0



＜親世帯-不満＞



(%)
0 20 40 60 80 100



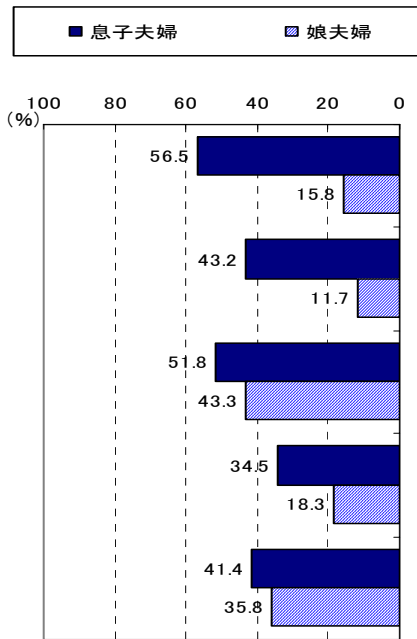
10. 分離度が高いほど子世帯の不満は少ない

息子夫婦同居、娘夫婦同居の不満を比較してみると、「日常的な気遣い」「友人・親戚との交流に気遣い」「生活全般の価値観」の3項目では息子夫婦同居が大幅に多く、「生活の干渉」では娘夫婦同居が多いという結果となりました。

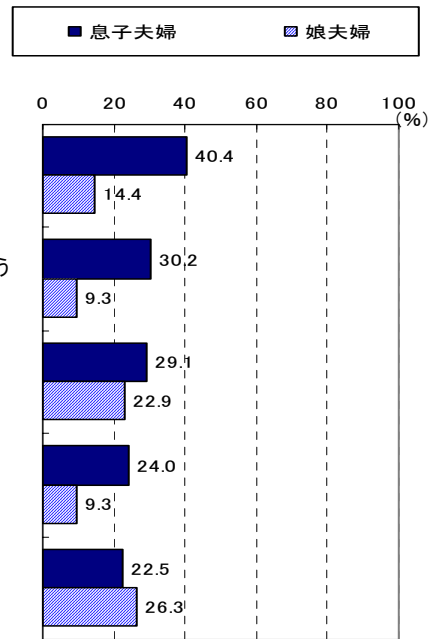
「生活時間の違い」は息子夫婦の方が若干多いのですが、娘夫婦同居においても不満の第2位です。

□同居生活の不安と不満：「日常的に気遣いが増える」「友人や自分の親戚との交流に気をつかう」「生活全般に対する価値観が違う」「生活時間やリズムが違う」「生活の干渉を受けやすい」

＜子世帯-同居形態別-不安＞



＜子世帯-同居形態別-不満＞



建物分離度による差を比較してみると、「日常的な気遣い」「生活の干渉」では完全分離で行き来できないものほど不満が少なく、「生活時間の違い」では浴室を共有すると不満が高まる傾向にあります。「自分が夜遅く帰りにくくなる」はキッチンが分離、玄関共有のタイプに多く、キッチン、玄関共分離のタイプや主キッチンがひとつで日常生活が融合しているタイプには少ない傾向があります。

分離度が下がると不満が増えるものとしては、他に「外出やレジャーが自由に楽しみにくい」「食事の好み」「家事のやり方が合わない」があり、単世帯型に多い不満としては「自分の一人の時間が持てない」「相手世帯の来客に気を使う」があります。

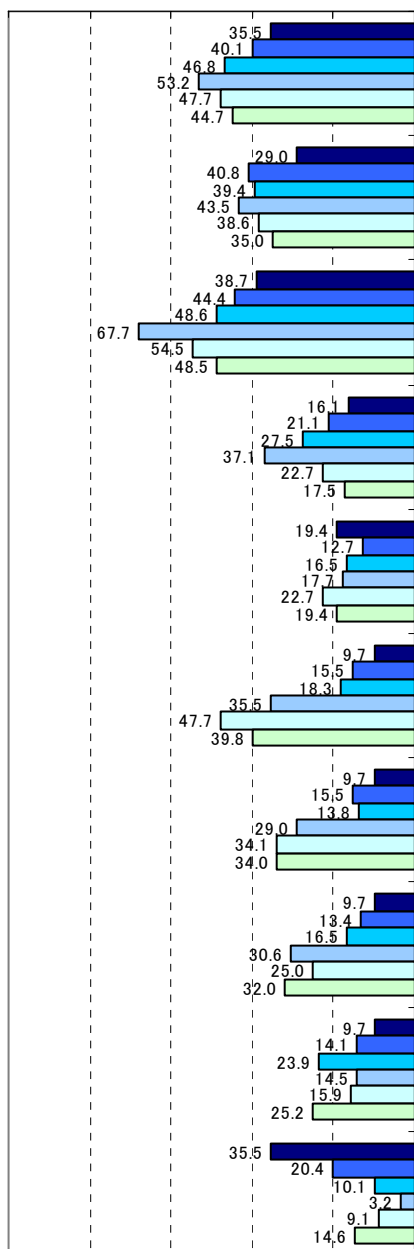
結果的に不満が「特にない」のはキッチン分離タイプでは建物分離度が高いほど多くなっています。特に浴室、玄関を共有するタイプは主キッチンが一つのタイプより不満が多い、という結果になっています。

□同居生活の不安と不満：「日常的に気遣いが増える」「友人や自分の親戚との交流に気をつかう」「生活全般に対する価値観が違う」「生活時間やリズムが違う」「生活の干渉を受けやすい」

<子世帯-分離度別-不安>

- 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できない
- 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できる
- 台所、浴室は各世帯に1つずつあるが玄関は共用である
- 台所は各世帯に1つずつあるが浴室、玄関は共用である
- 主な台所が共用で他にサブキッチンがある
- 単世帯型

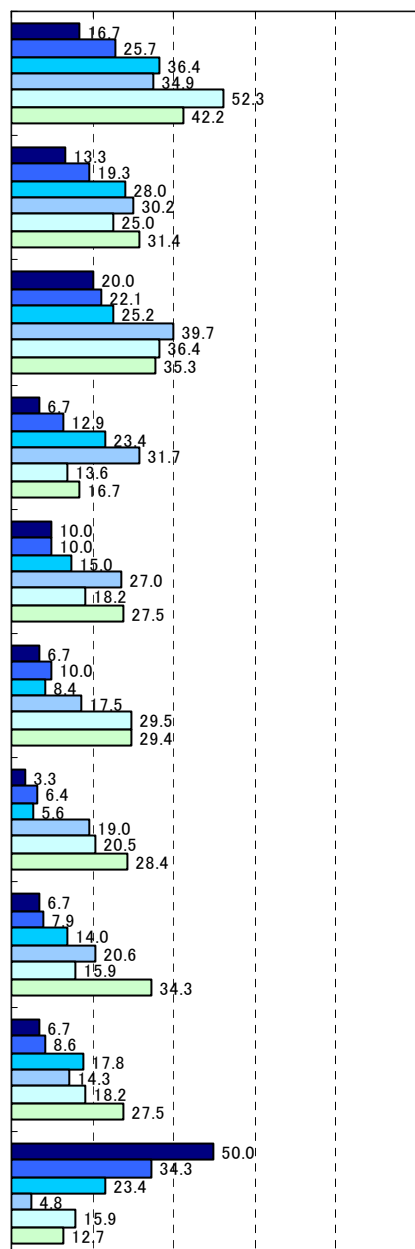
(%)
100 80 60 40 20 0



<子世帯-分離度別-不満>

- 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できない
- 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できる
- 台所、浴室は各世帯に1つずつあるが玄関は共用である
- 台所は各世帯に1つずつあるが浴室、玄関は共用である
- 主な台所が共用で他にサブキッチンがある
- 単世帯型

(%)
0 20 40 60 80 100



生活の分離の意識

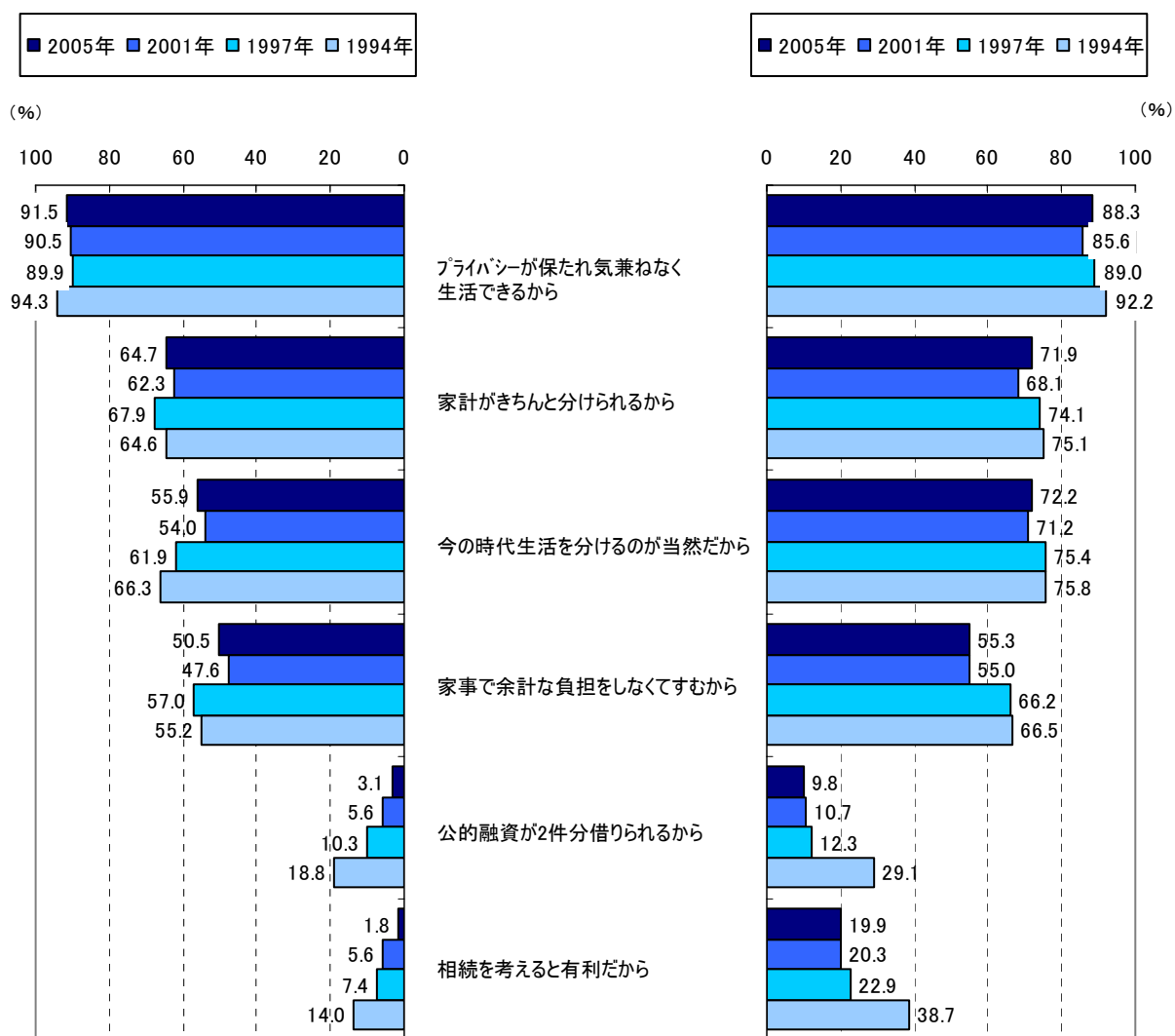
1.1. 日常生活が分離志向なら二世帯型、融合志向なら単世帯型

親子両世帯の生活を分離した二世帯住宅という形態を選んだ理由については、基本的に日常生活、家計の分離を志向した回答が上位を占めます。親子両世帯共に「プライバシーが保たれる」が最も多く、「家計がきっちり分けられる」「今の時代生活を分けるのが当然」がこれに次いでいます。この3項目についてはこの10年で大きな変化はありません。ここでも、経済的な要因である「公的融資が2件分借りられる」や「相続を考えると有利」は大きく減少しています。

□生活の分離の意識

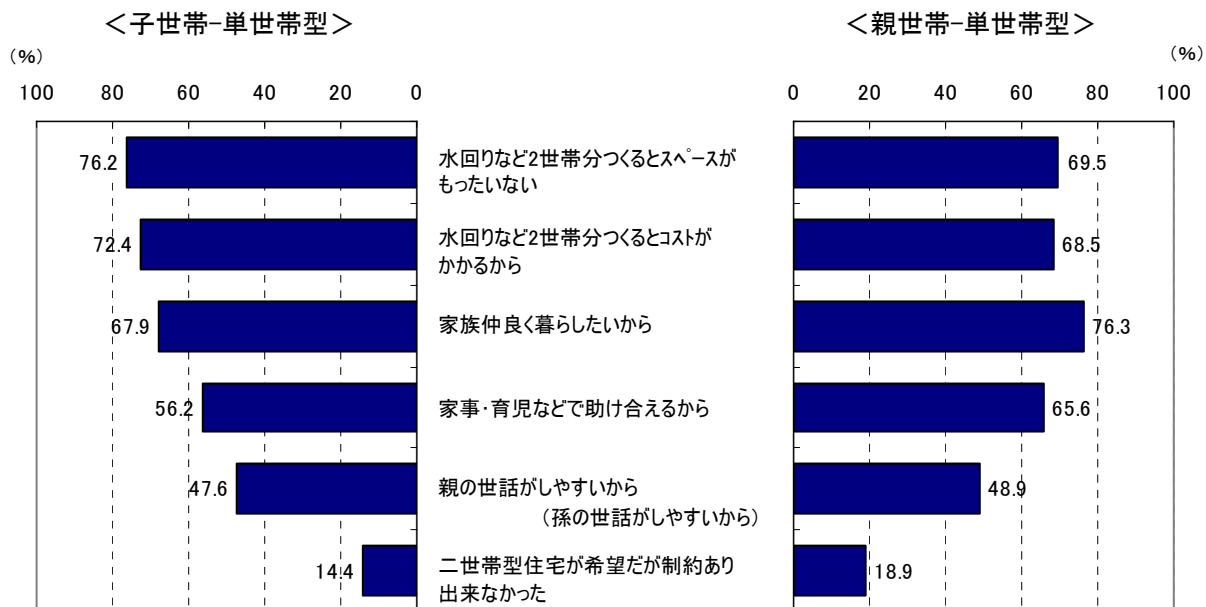
<子世帯>

<親世帯>



一方、生活を分離しない単世帯型を選んだ理由としては、「スペースがもったいない」「コストがかかる」といった、必要性を感じていないとする回答が上位を占め、「家族仲良く暮らしたい」「家事育児で助け合える」「親・孫の世話がしやすい」といった日常生活融合を志向した答えがこれらに続きます。

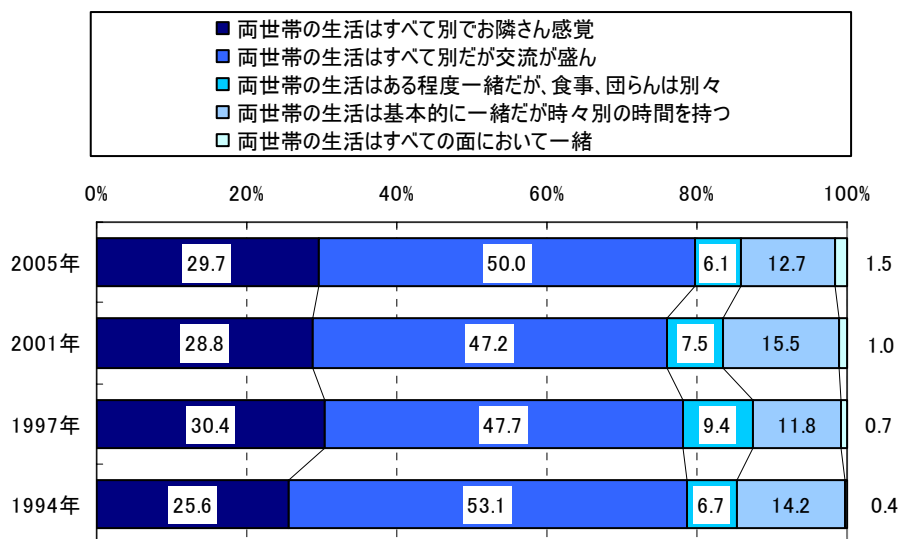
□生活の分離の意識



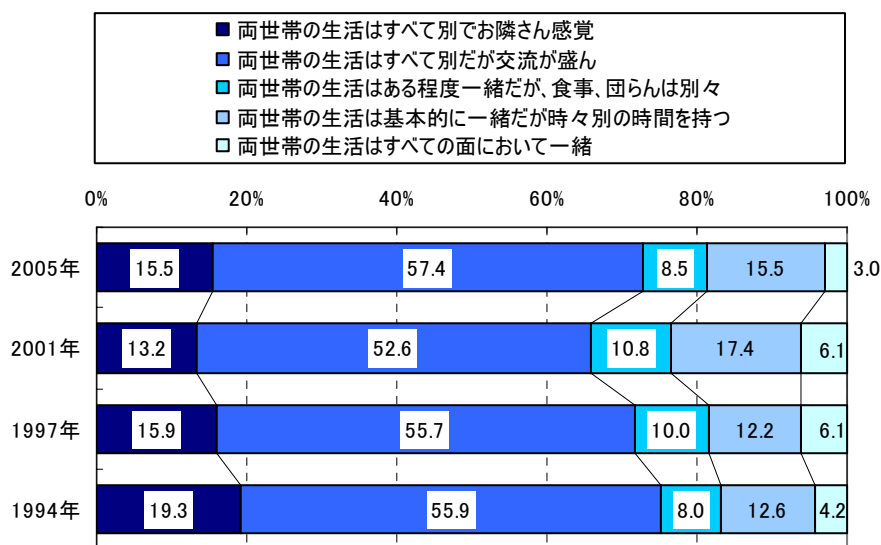
親子同居の生活のあり方の希望を尋ねたところ、全体としてはここ10年の変化は少ないのですが、分離度による差をみると、親子両世帯に共通して、主キッチンが2つある生活分離型の場合は「両世帯の生活は全て別だが交流が盛ん」が理想であり、片方がサブキッチンのもの、キッチンが一つの単世帯型の場合は「両世帯の生活は基本的に一緒に時々別の時間を持つ」と大きく分かれています。

□生活の分離の意識：同居生活のあり方の希望

<子世帯>

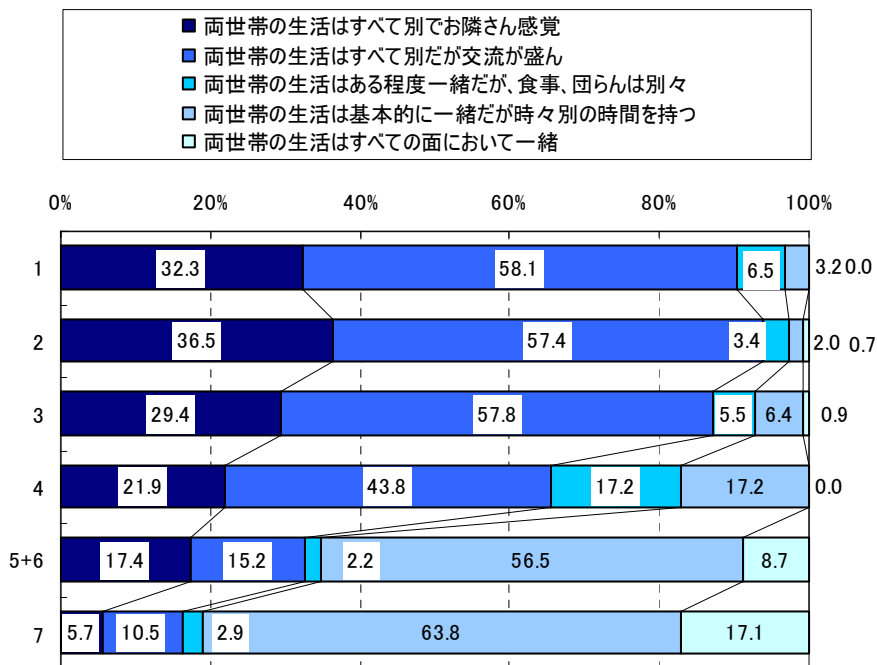


<親世帯>

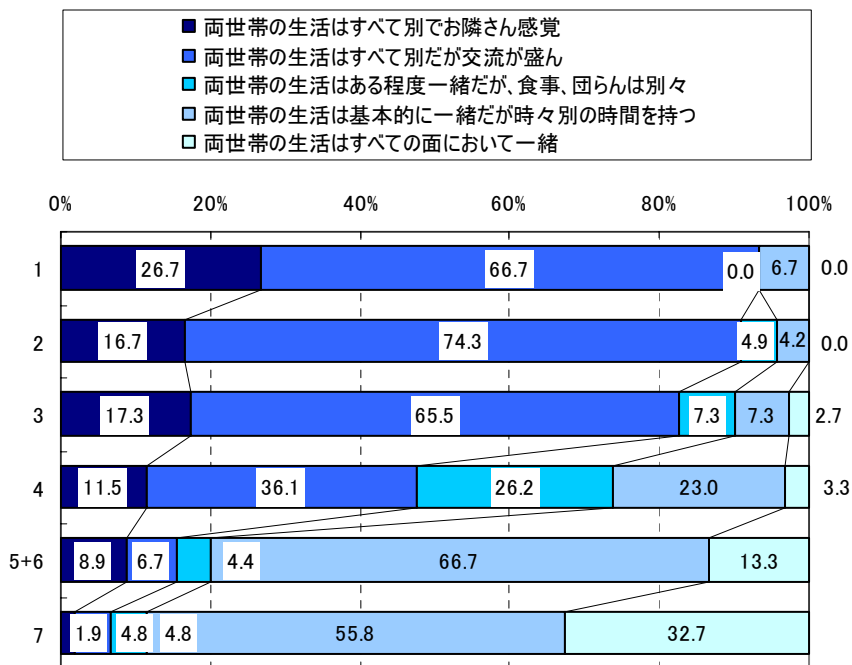


□生活の分離の意識：同居生活のあり方の希望

<子世帯-分離度別>



<親世帯-分離度別>



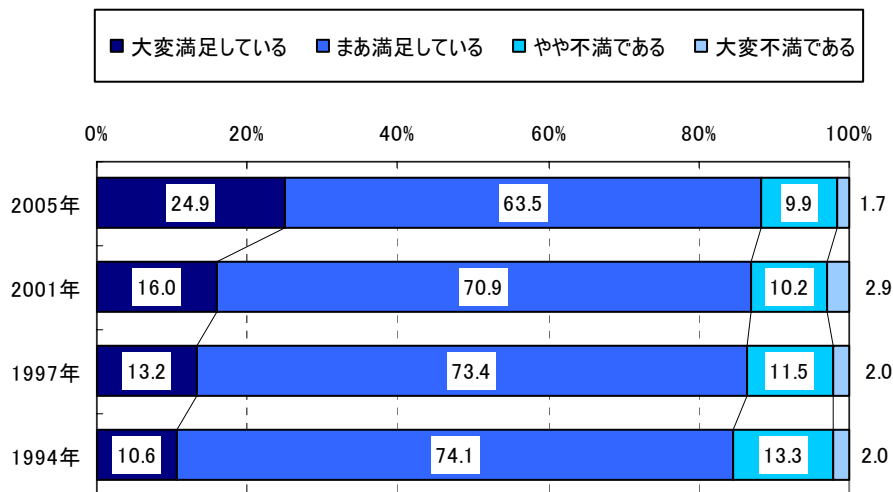
- 1. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できない
- 2. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できる
- 3. 台所、浴室は各世帯に1つずつあるが玄関は共用である
- 4. 台所は各世帯に1つずつあるが浴室、玄関は共用である
- 5+6. 主な台所が共用で他にサブキッチンがある
- 7. 単世帯型

12. 建物分離度と生活志向が一致し、同居満足度が上昇

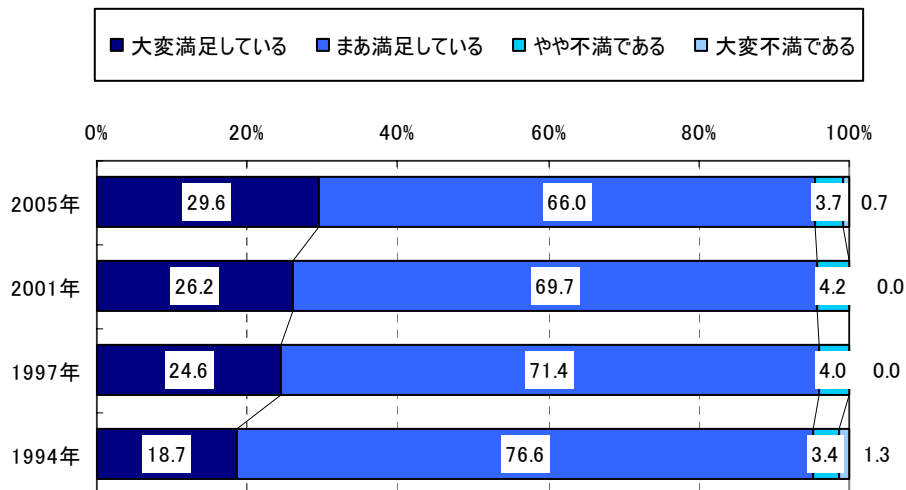
子世帯の同居満足度は、この10年で「大変満足」が特に子世帯で顕著に増えています。これは実際の建物分離度と同居生活の希望が一致してきた結果と考えられます。分離度別の分析では、分離度が高いほど「大変満足」が多い傾向にあり、「やや不満+不満」で見ると完全分離行き来可のタイプが不満が最も少ないという形になっています。親世帯については分離度が高いほど満足度が高い、という結果です。同居生活の不満では共用スペースを持つことによる不満が多い傾向にあり、この結果分離度の低いものについては同居満足率が少し低くなる、ということが考えられます。

□生活の分離の意識：実際の同居生活の満足度

<子世帯>

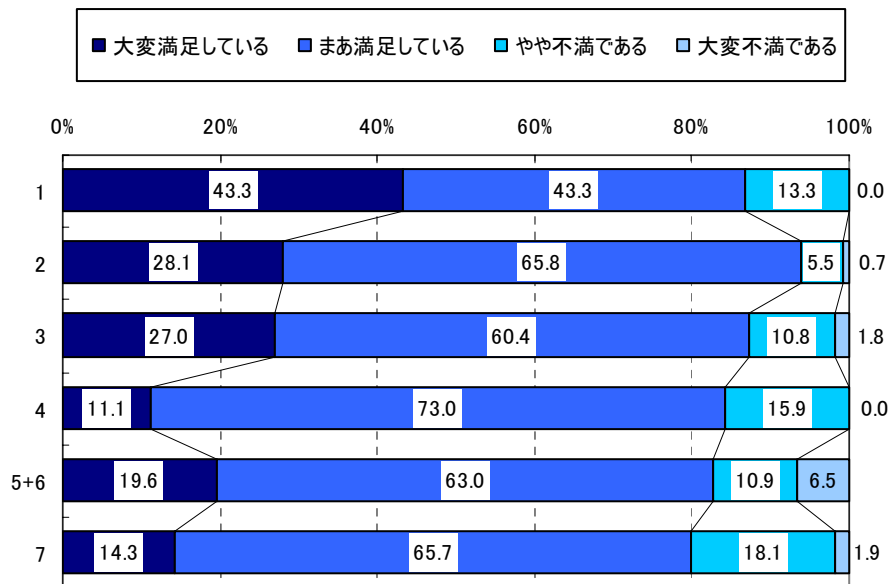


<親世帯>

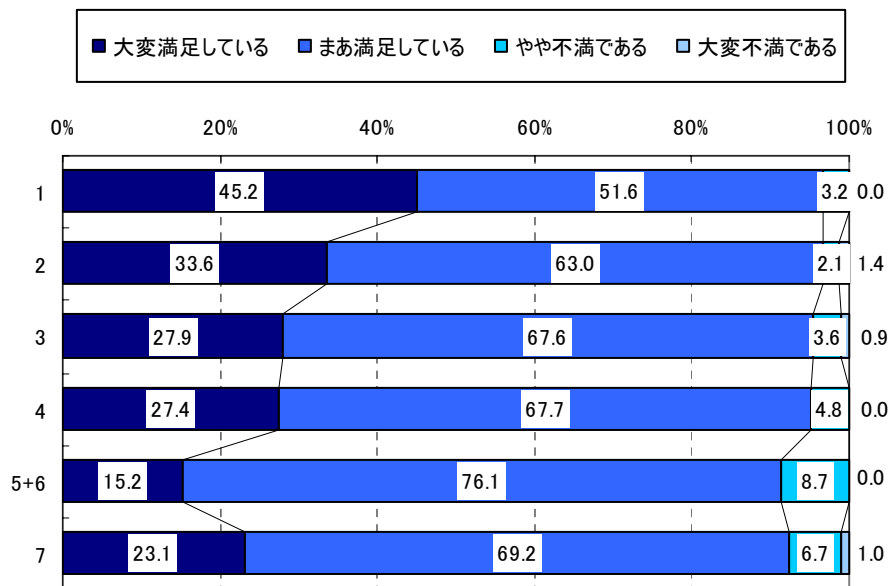


□生活の分離の意識：実際の同居生活の満足度

<子世帯-分離度別>



<親世帯-分離度別>



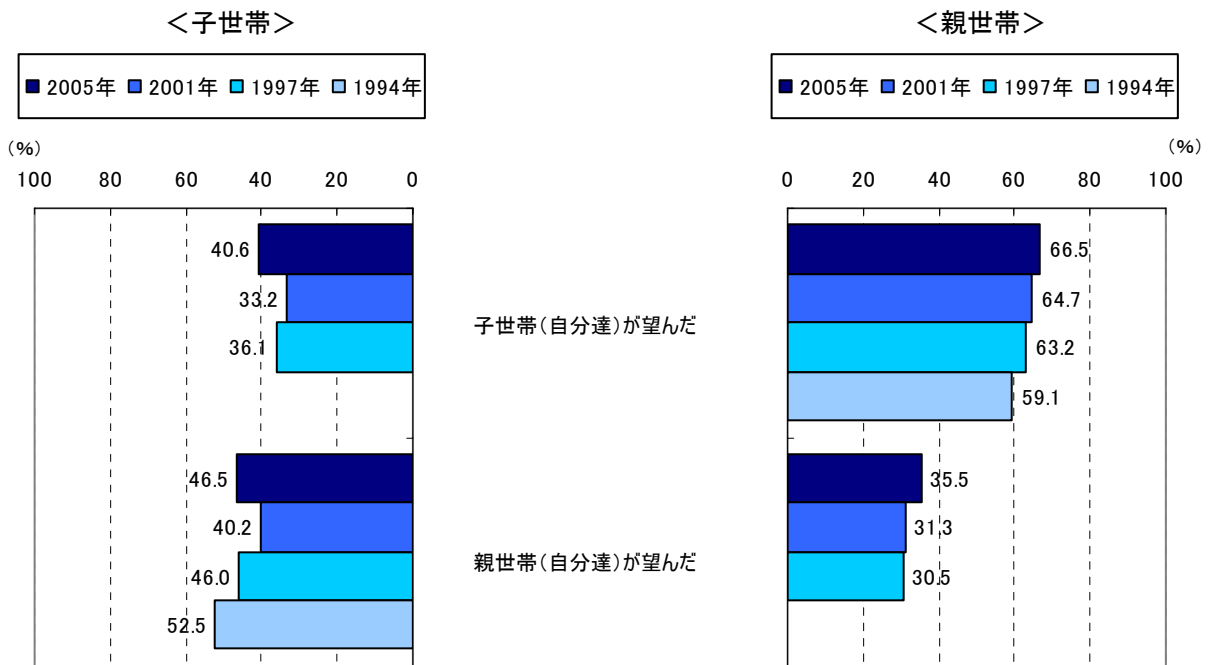
- 1. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できない
- 2. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できる
- 3. 台所、浴室は各世帯に1つずつあるが玄関は共用である
- 4. 台所は各世帯に1つずつあるが浴室、玄関は共用である
- 5+6. 主な台所が共用で他にサブキッチンがある
- 7. 単世帯型

同居の提案者

1.3. 子世帯主導の家づくり傾向が強まる

同居を始めたきっかけを尋ねる質問で、子世帯は「親世帯が望んだ」が多く、親世帯は「子世帯が望んだ」が多いというように、お互いに相手の世帯を立てる興味深い傾向があります。その中でも「子世帯が望んだ」は親世帯、子世帯共に増加傾向にあります。親世帯が自分で望んだ、とする回答も同時に増えています。

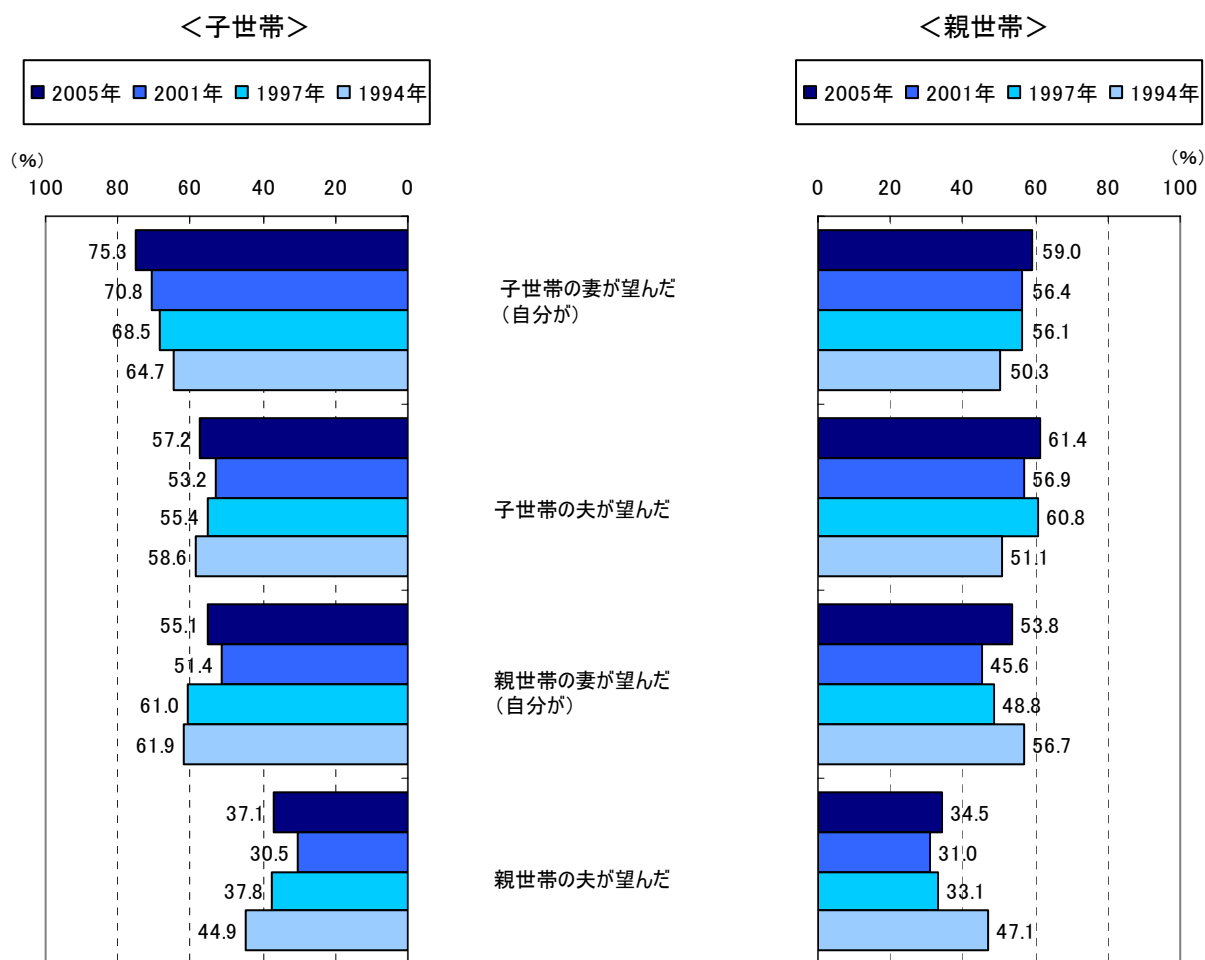
□同居の提案者：「子世帯が望んだ」「親世帯が望んだ」



日常生活を分離する二世帯住宅を望んだ人を尋ねる質問を見てみると、子世帯には「子世帯妻が望んだ」の増加傾向が見え、親世帯では「子世帯妻が望んだ」「子世帯夫が望んだ」双方が増える傾向が見て取れます。「親世帯が望んだ」場合は双方の世帯の回答で減っています。想像ですが子世帯妻が主導権を取りながら、夫を通じて親世帯との意見調整を図った結果、元々できれば同居したいと思っていた親世帯の賛同も得られる、というパターンが増えたのではないのでしょうか。

社会的、経済的な同居理由が減ったことと合せ総合的に見ると、子世帯の発言力が増えてきていると感じられます。特に子世帯妻が主導して家の設計を決めていく傾向が強まったことで分離度が理想に近づき、その結果子世帯の満足度が特に上昇する、という結果につながったのでしょうか。

□同居の提案者：「子世帯の夫が望んだ」「子世帯の妻が望んだ」
「親世帯の夫が望んだ」「親世帯の妻が望んだ」



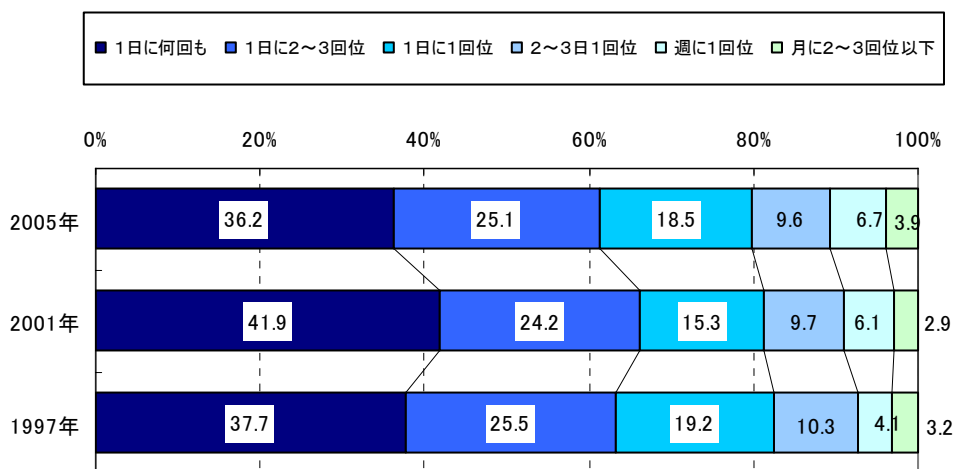
世帯間交流の頻度

1 4. 日常分離でも交流は盛んな状態を維持

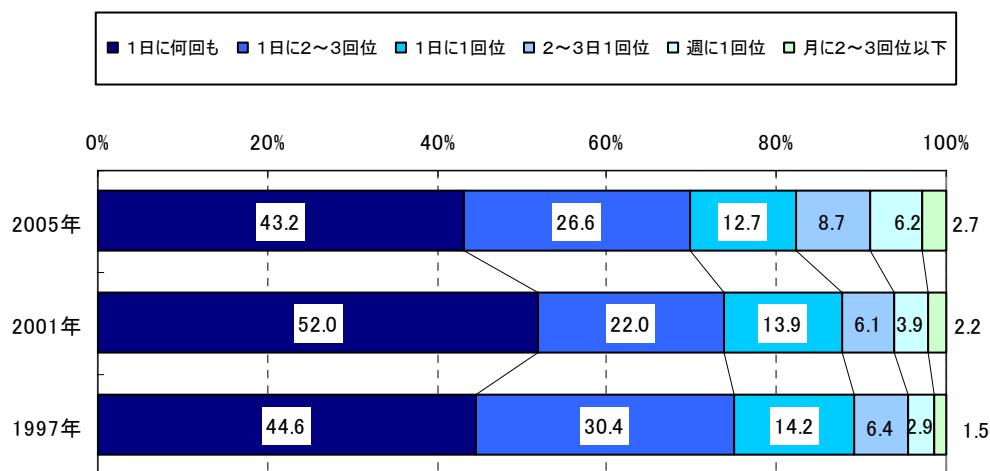
親世帯、子世帯との行き来頻度は、1日一回以上が約8割を占め、活発な交流状態が想像されます。1997年の第二回調査から質問をしていますが、わずかながら一日一回以上の交流頻度が減り、代わって週1回の頻度が増える傾向にあるようです。

□世帯交流の頻度

<子世帯>



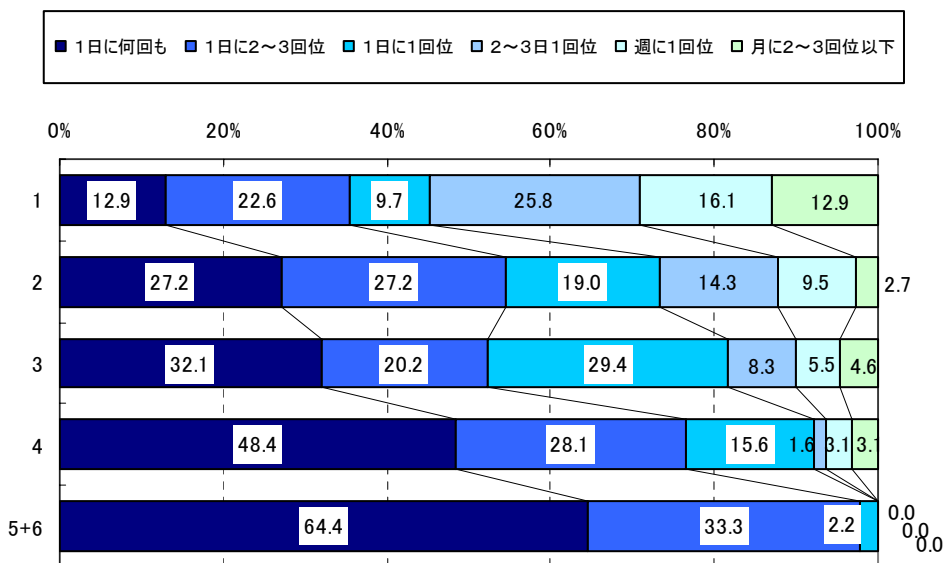
<親世帯>



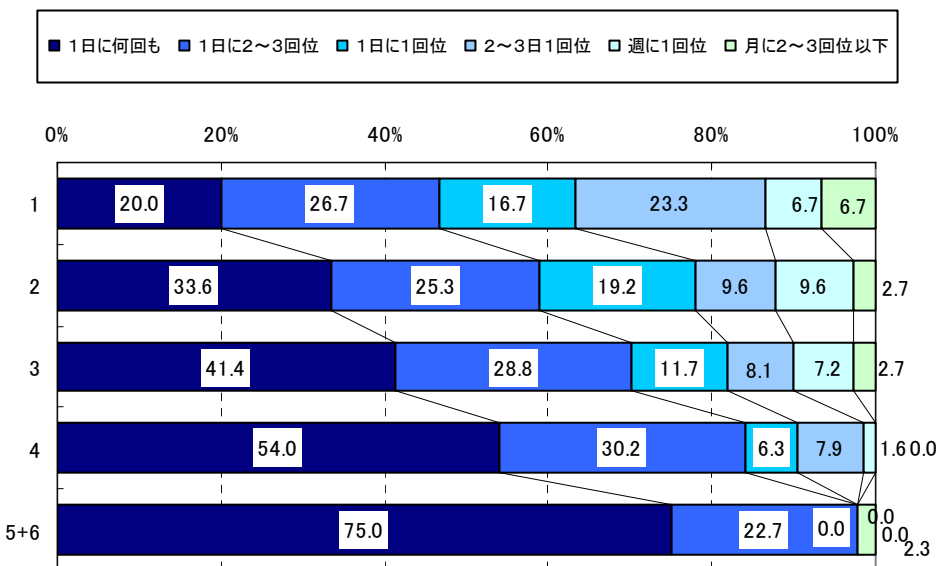
建物分離度別に見ると、当然ながら建物分離度が高いタイプにおいては交流頻度も下がるものの、最も分離度の高い内部で行き来ができないタイプでも、一日一回以上の頻度は親世帯で63.3%、子世帯で45.2%あり、完全分離で行き来可のタイプでは親世帯で78.1%子世帯で73.5%に上がります。日常生活の分離度を高めることが必ずしも交流を阻害していないことがわかります。

□世帯交流の頻度

<子世帯-分離度別>



<親世帯-分離度別>

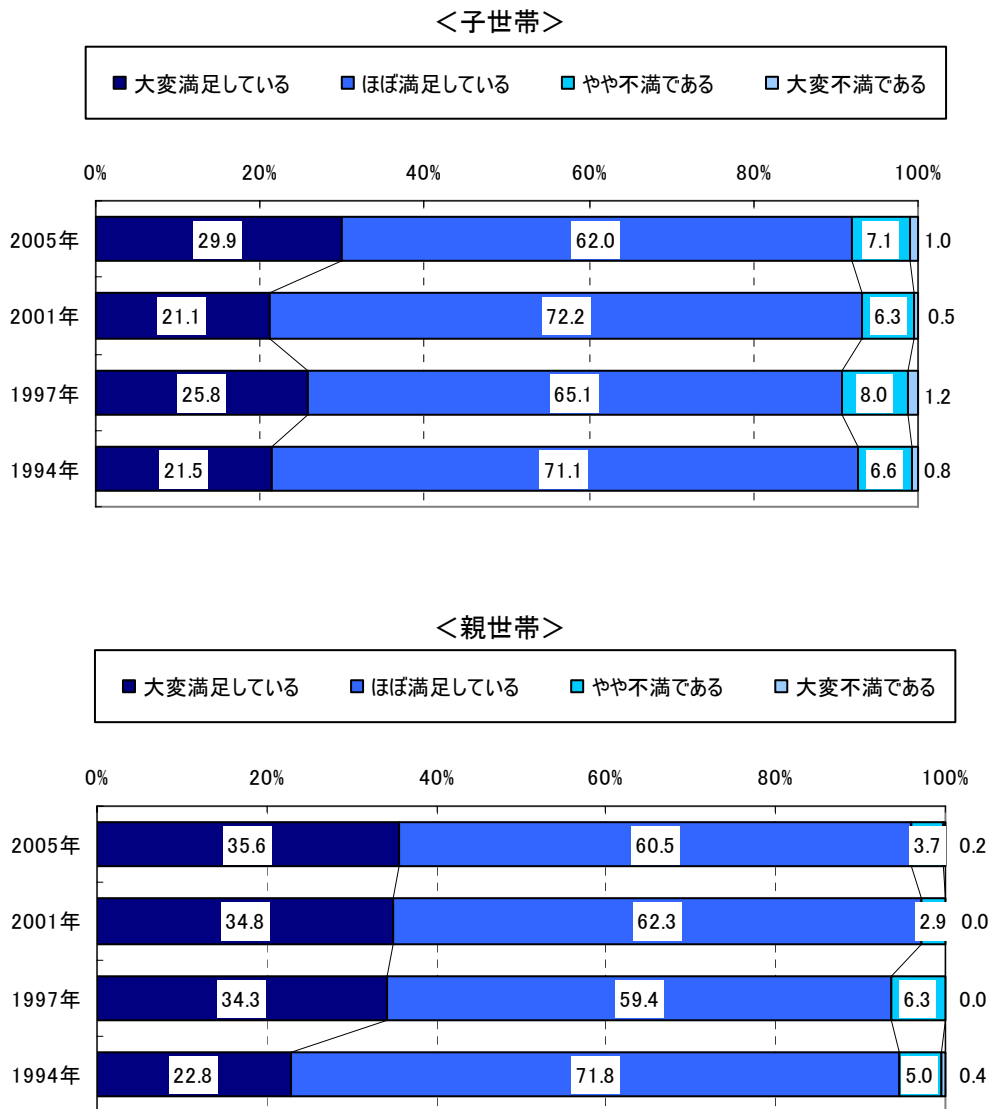


- 1. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できない
- 2. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できる
- 3. 台所、浴室は各世帯に1つずつあるが玄関は共用である
- 4. 台所は各世帯に1つずつあるが浴室、玄関は共用である
- 5+6. 主な台所が共用で他にサブキッチンがある

15. 交流の満足度は上昇

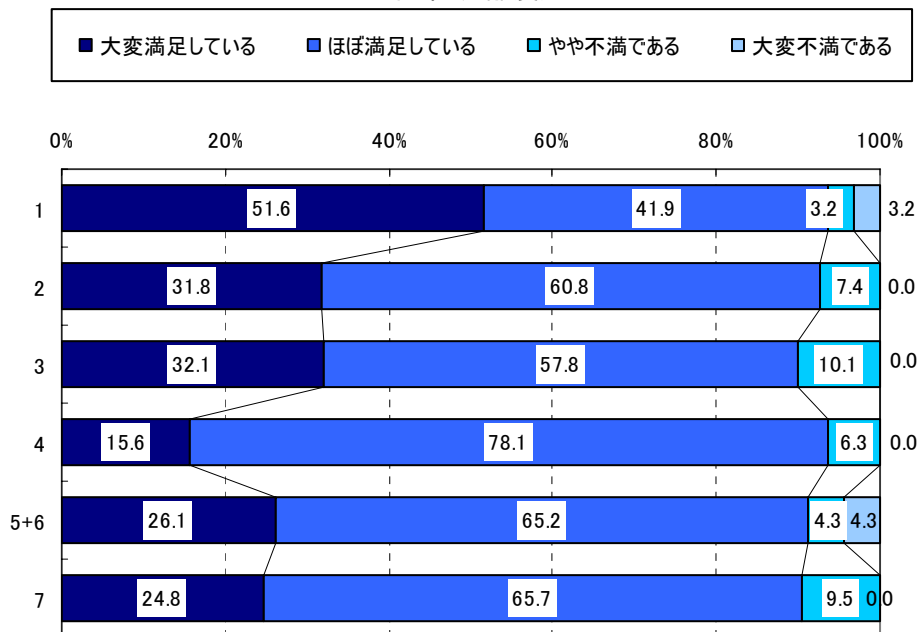
親世帯、子世帯との行き来頻度が増えていないにもかかわらず、交流頻度の満足度はやや増えています。分離度の高いタイプほど「大変満足」の比率が高い傾向が見られます。

□世帯交流の頻度：交流頻度の満足度

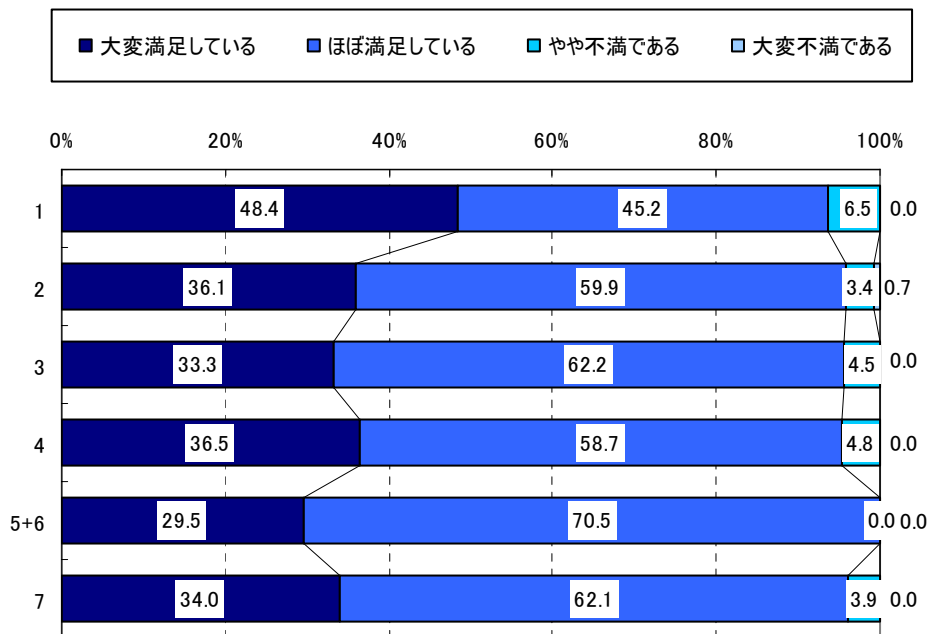


□世帯交流の頻度：交流頻度の満足度

<子世帯-分離度別>



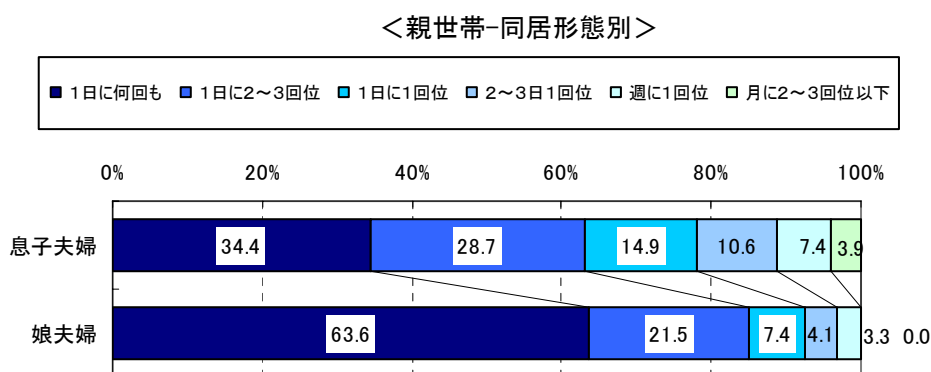
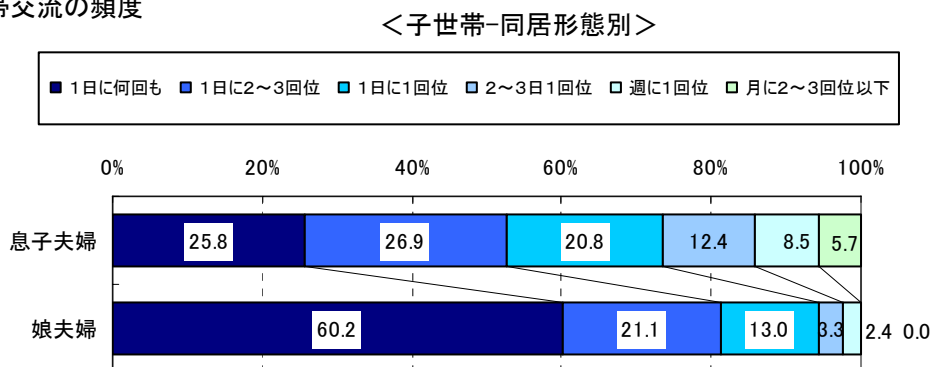
<親世帯-分離度別>



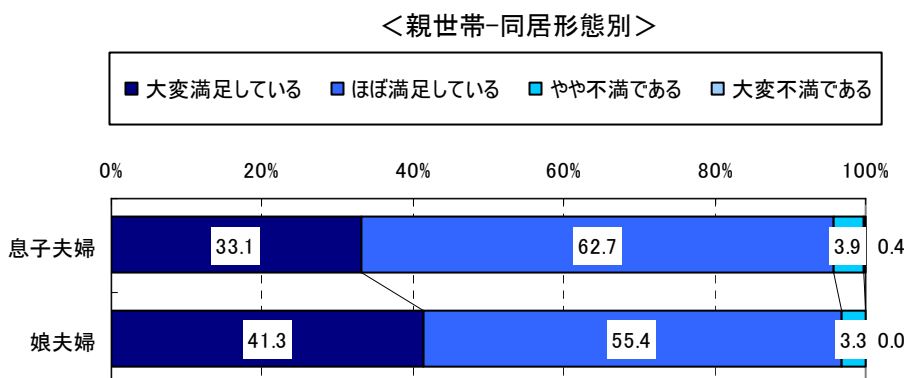
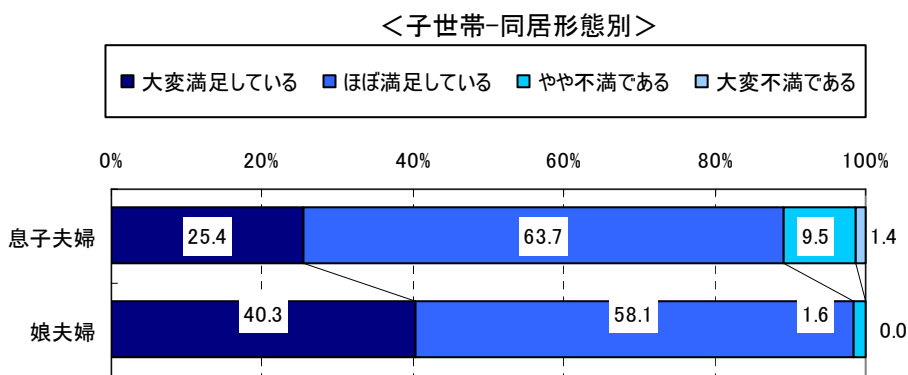
- 1. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できない
- 2. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できる
- 3. 台所、浴室は各世帯に1つずつあるが玄関は共用である
- 4. 台所は各世帯に1つずつあるが浴室、玄関は共用である
- 5+6. 主な台所が共用で他にサブキッチンがある
- 7. 単世帯型

息子夫婦同居、娘夫婦同居で比較すると、娘夫婦同居の方が交流頻度が高く、交流満足度も高い傾向があります。

□世帯交流の頻度



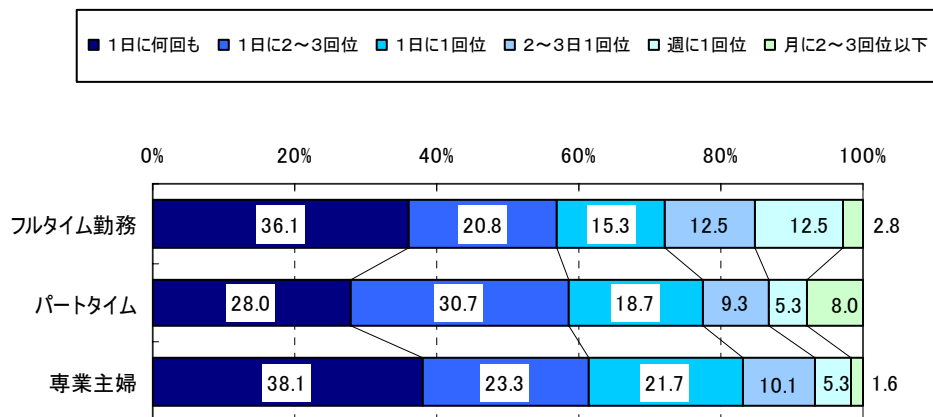
□世帯交流の頻度：交流頻度の満足度



また、子世帯妻の就業形態で比較すると、フルタイム勤務の人の交流頻度はパートタイム、専業主婦に比べて低くなるものの、満足度では逆に高くなる傾向があります。

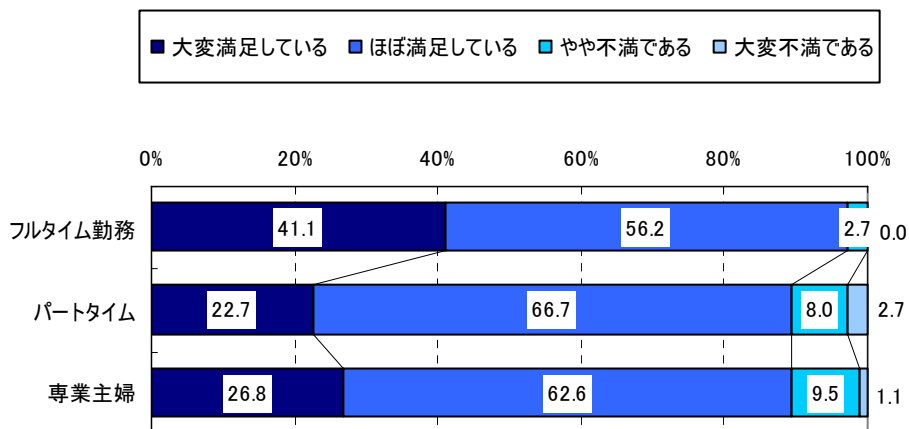
□世帯交流の頻度

<子世帯-職業形態別>



□世帯交流の頻度：交流満足度

<子世帯-職業形態別>



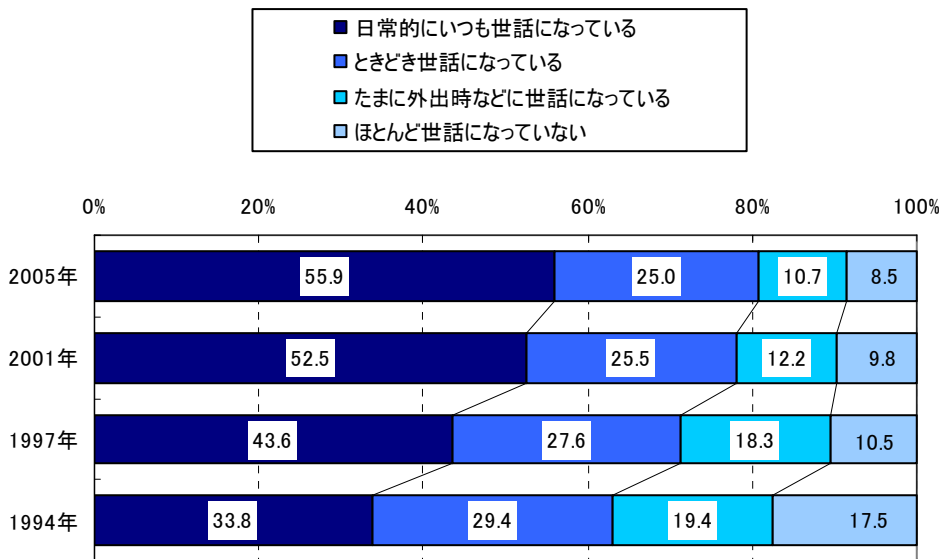
育児の協力

16. 活発な孫の行き来が子世帯をサポート

お子さんが親世帯の世話になっているか、という設問で「日常的にいつも」が55.9%あり、「ほとんどなっていない」が8.5%しかありません。10年間の変化を見ると、「日常的にいつも」が増え、「ほとんどなっていない」が減っていく傾向がはっきり見て取れます。この10年で親世帯と孫世代の交流が進んだ、とっては構わないでしょう。

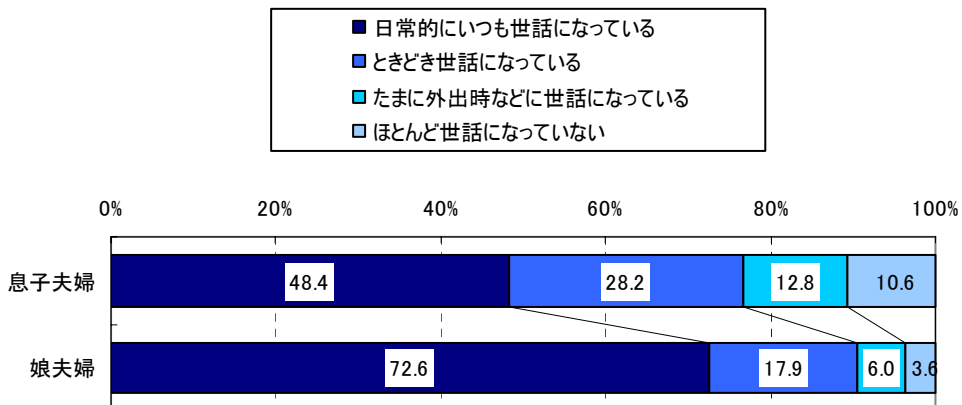
□育児の協力

<子世帯>



息子夫婦同居、娘夫婦同居の違いを見ると、娘夫婦同居には「日常的にいつも」が72.6%あり、「ほとんどなっていない」が3.6%しかありません。娘夫婦同居の方が子の世話を頻繁に親世帯に頼る傾向があると言えそうです。

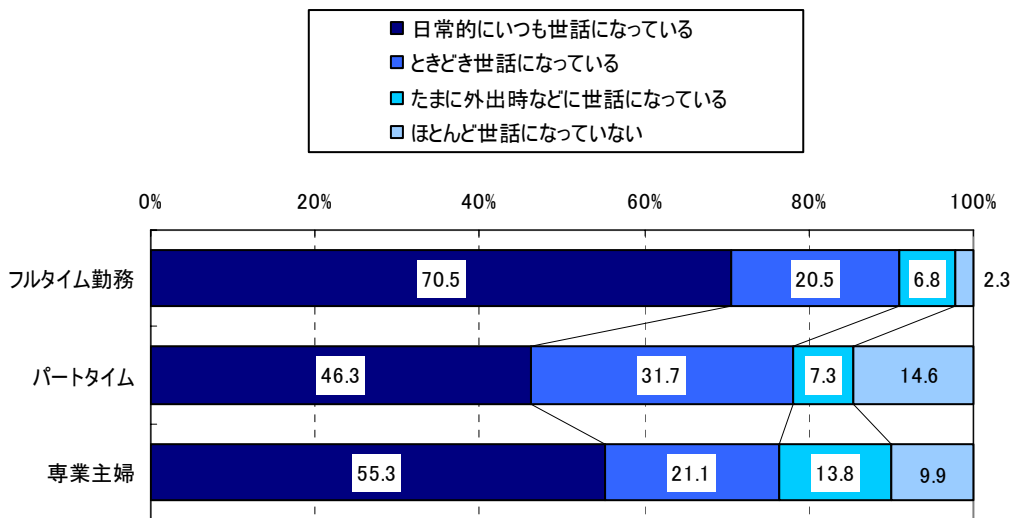
<子世帯-同居形態別>



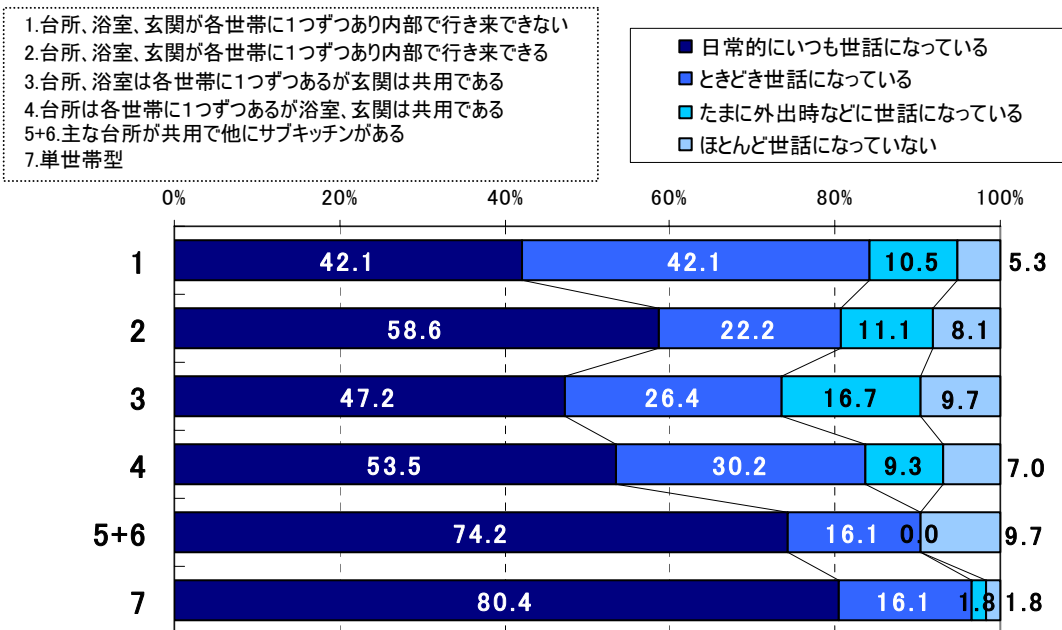
子世帯妻の就業形態による差を見ると、フルタイムの場合「日常的にいつも」が70.5%あり、「ほとんどなっていない」が2.3%しかありません。親世帯の存在が共働きと子育ての両立を支えていると言えるでしょう。

また、分離度による差を見ると、主な台所が各世帯にある1～4のタイプ内では余り差が無く、2.の完全分離型で行き来が出来るタイプで「日常的にいつも」が58.6%と高くなっています。孫の行き来は建物分離度による影響を余り受けていないと言えそうです。

<子世帯-職業形態別>



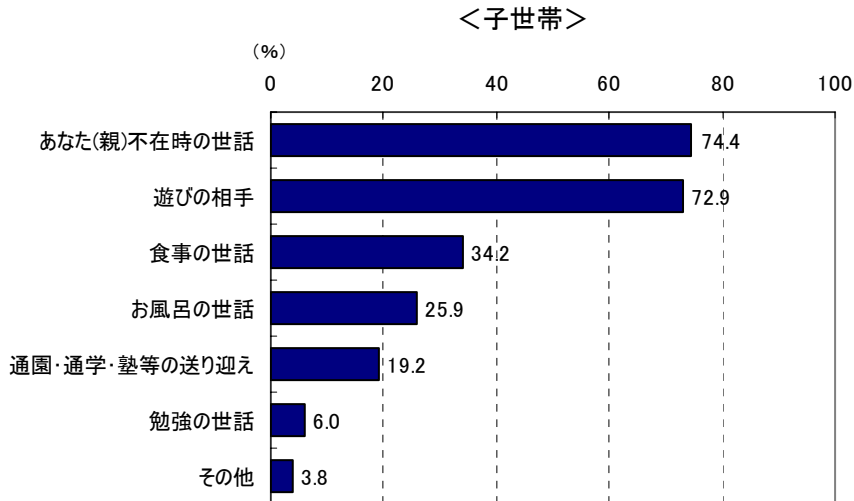
<子世帯-分離度別>



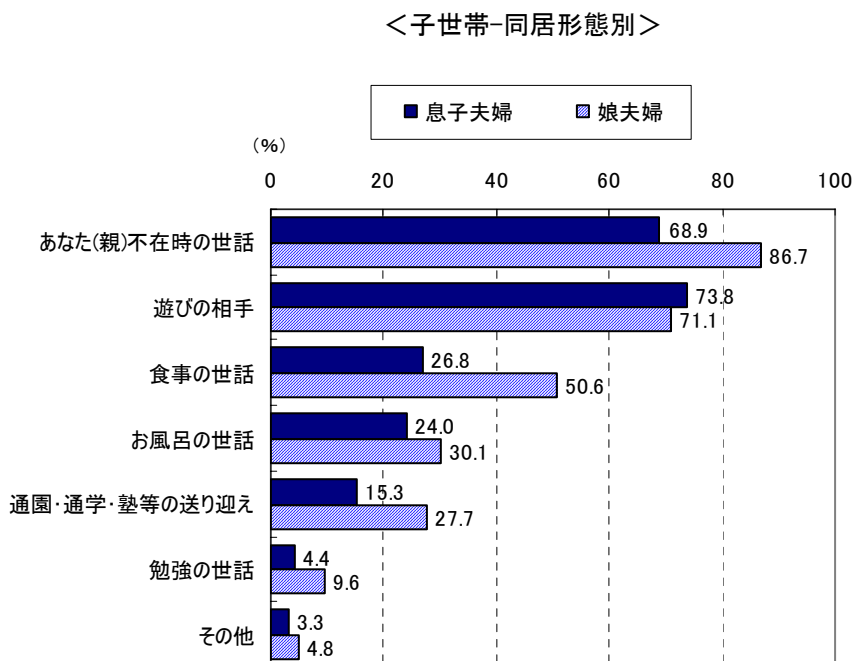
17. 娘夫婦同居、フルタイム共働き世帯の孫は親世帯が頼り

お子さんが親世帯に世話になっている内容を聞く設問では、「不在時の世話」が74.4%、「遊びの相手」が71.4%とこの2つが圧倒的に多くなっています。

□育児の協力：子供が親世帯にどんな世話になっているか

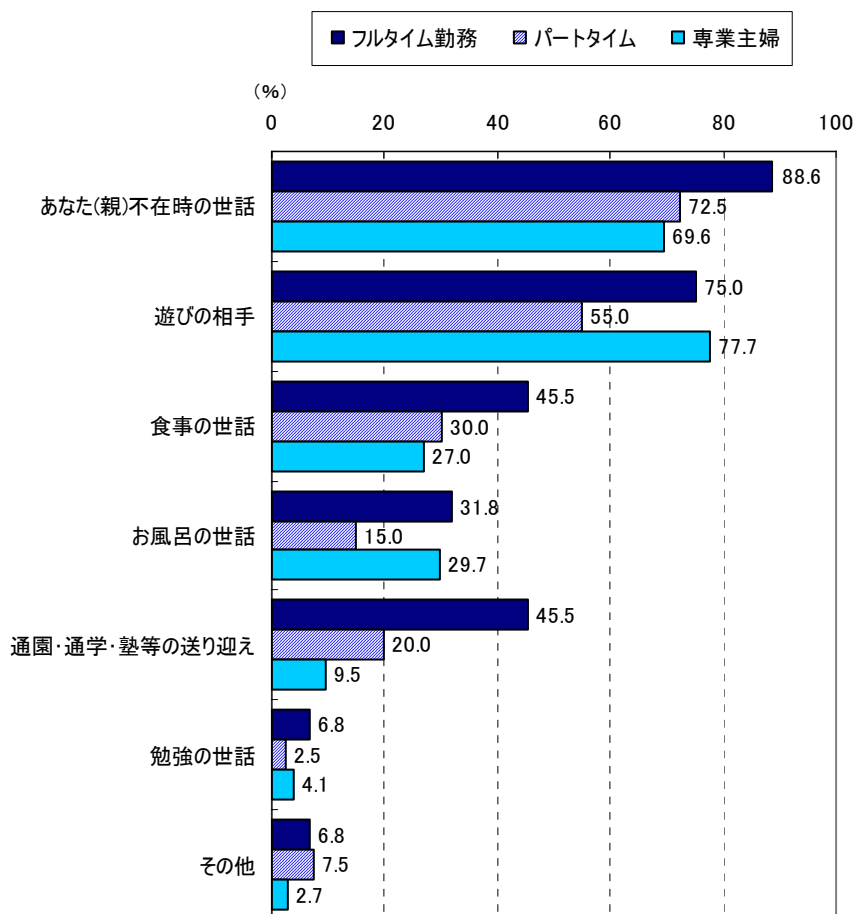


息子夫婦同居、娘夫婦同居の違いを見ると、娘夫婦同居の「不在時の世話」と「食事の世話」の比率が息子夫婦同居に比べ高くなっています。



子世帯妻の就業形態による差を見ると、フルタイムの場合「遊び相手」「不在時の世話」に加え「食事の世話」、「送り迎え」の比率が高い傾向があります。ここでも親世帯が育児の多くの分野で共働きと子育ての両立を支えている実態がわかります。

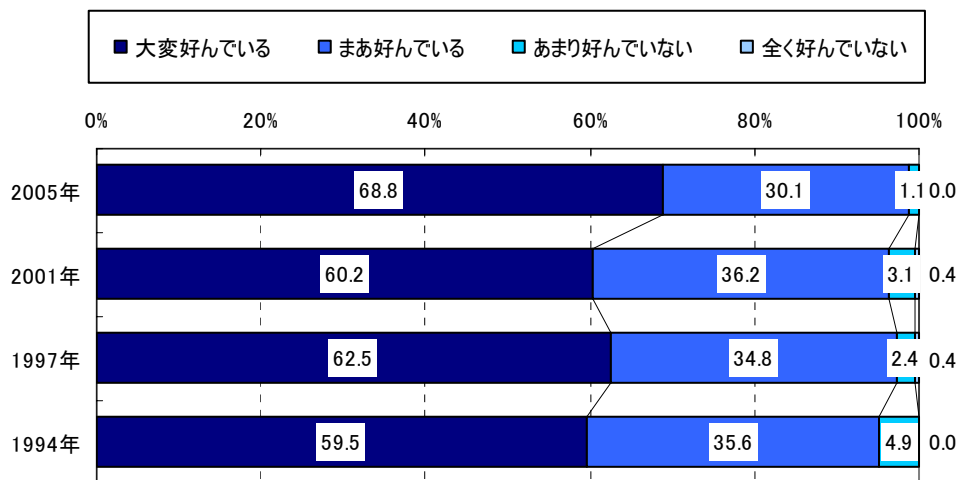
<子世帯-職業形態別>



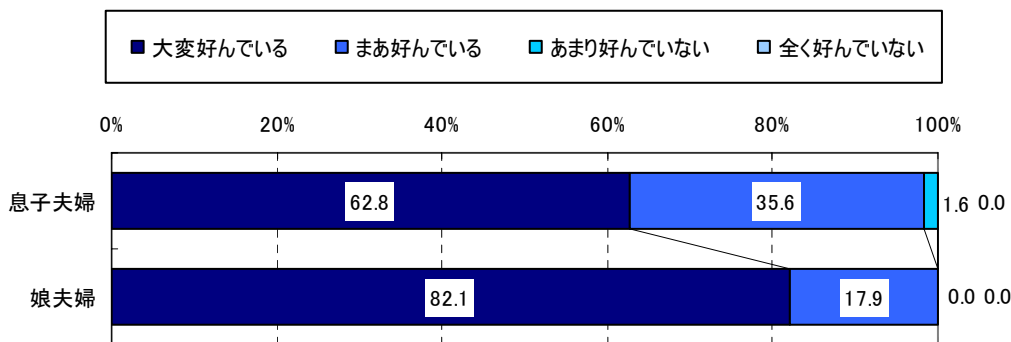
お子さんが親世帯と交流を望んでいるか子世帯妻に尋ねた設問では、「大変好んでいる」が68.8%に達し、10年間の調査を通じて増加してきています。特に娘夫婦同居では82.1%、フルタイムでは77.3%が「大変好んでいる」としています。

□育児の協力：子供の親世帯との交流

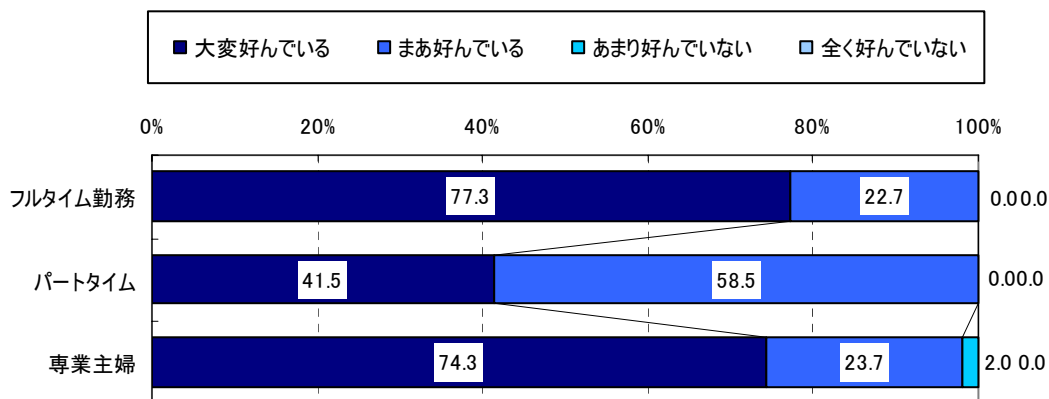
<子世帯>



<子世帯-同居形態別>

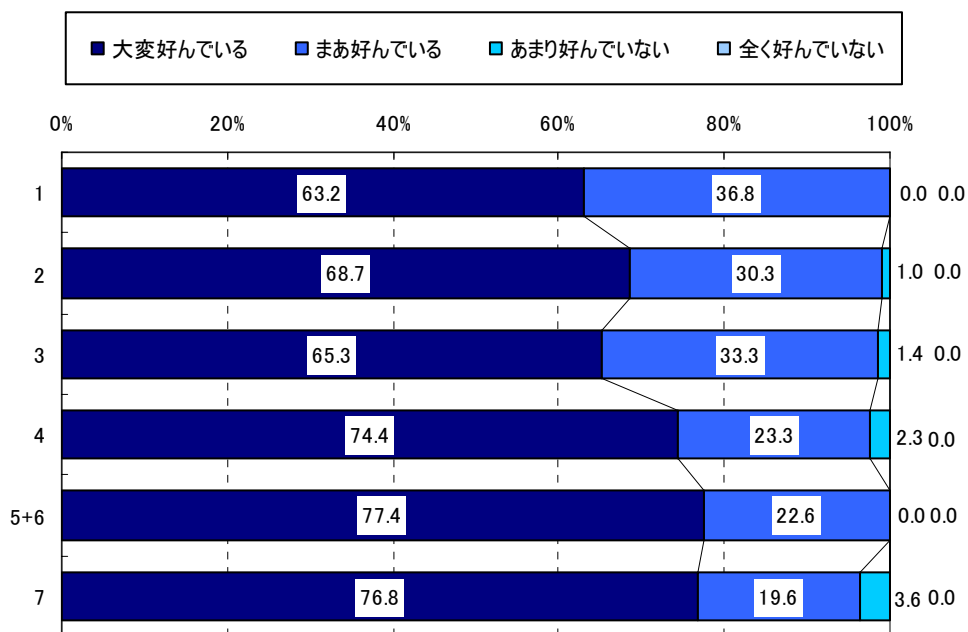


<子世帯-職業形態別>



また、建物分離度が高くなっても「大変好んでいる」の値に大きな差がなく、孫の交流に建物分離度があまり影響していないことがわかります。

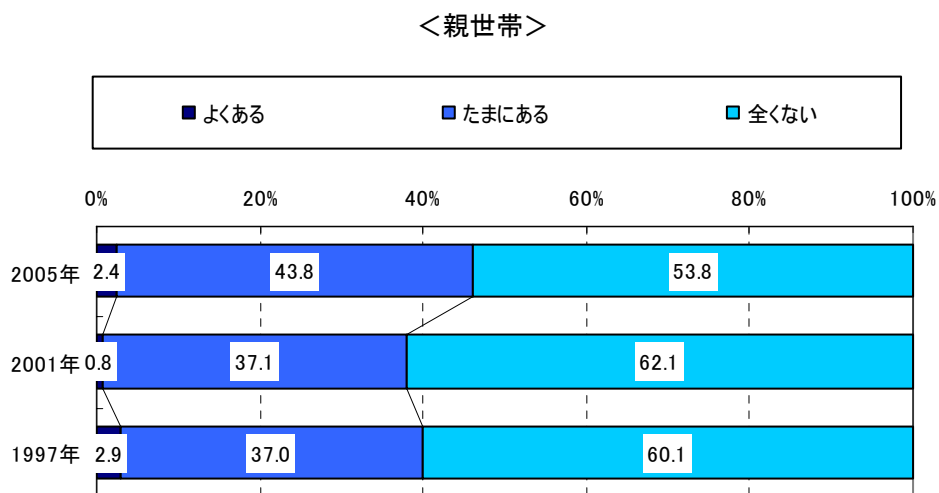
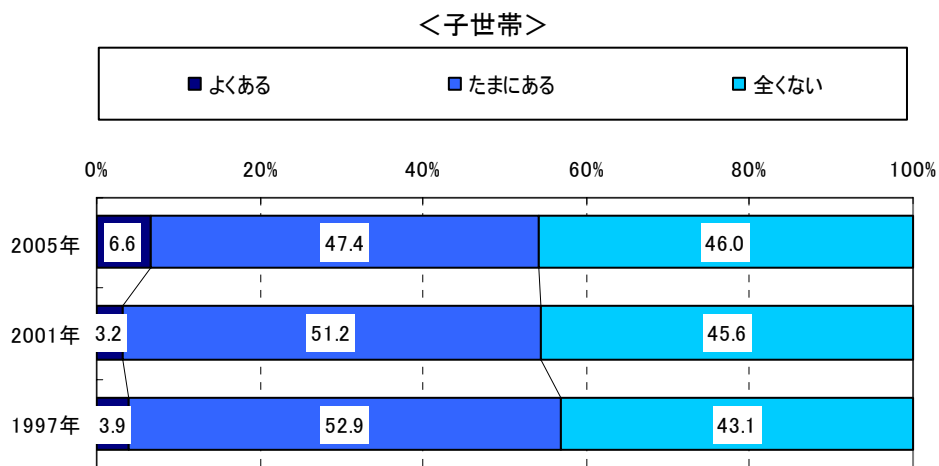
<子世帯-分離度別>



- 1. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できない
- 2. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できる
- 3. 台所、浴室は各世帯に1つずつあるが玄関は共用である
- 4. 台所は各世帯に1つずつあるが浴室、玄関は共用である
- 5+6. 主な台所が共用で他にサブキッチンがある
- 7. 単世帯型

このような頻繁な交流はしつけや教育面での両世帯の対立を生んでいないでしょうか。親子両世帯に1997年から質問していますが、子世帯側にはあまり大きな変化はありません。親世帯側から見て、「たまにある」がわずかに増加し、「全くない」が減少しています。

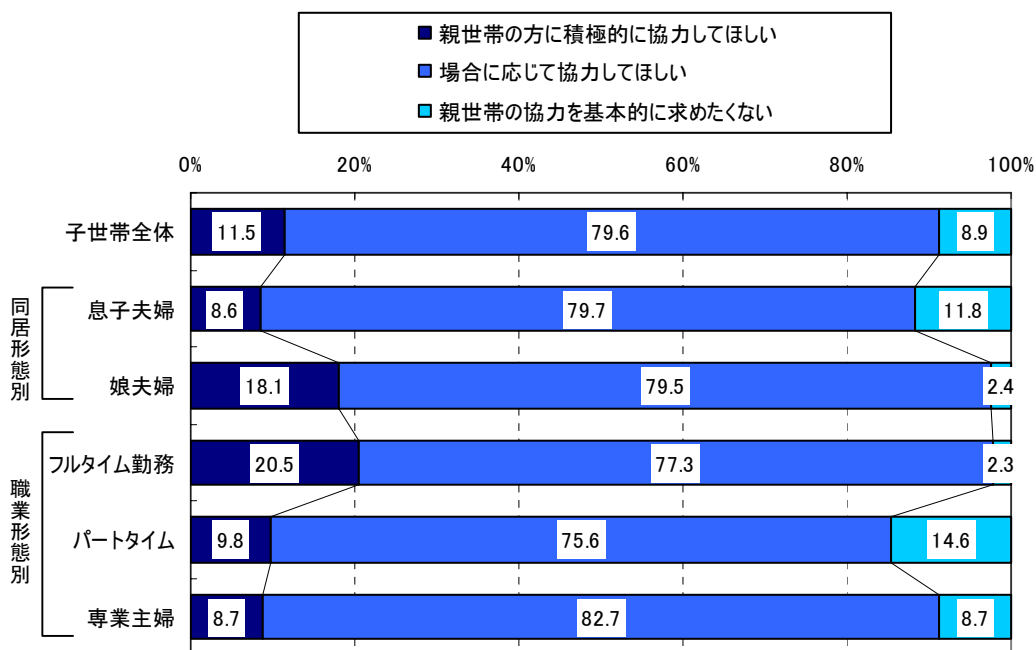
□育児の協力：教育やしつけでの親子世帯の対立



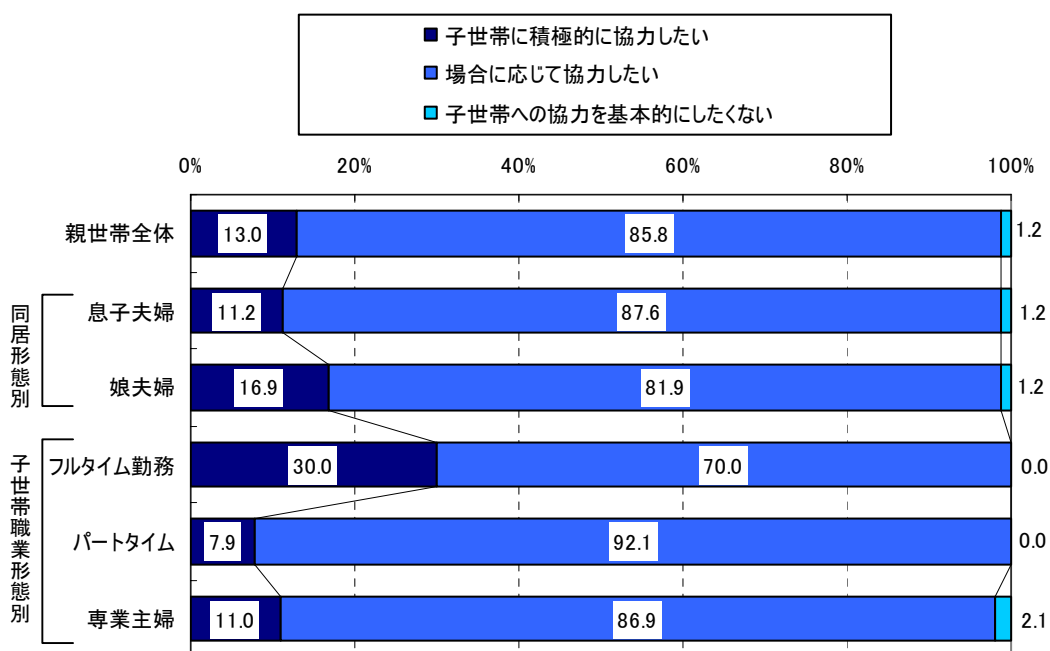
孫の成長や教育、日常の世話について親世帯の協力については、子世帯、親世帯とも「場合に応じて」に集中しています。「積極的に」という回答は娘夫婦同居、フルタイムに多く見られます。

□育児の協力：教育やしつけの協力

<子世帯>



<親世帯>



家事の協力

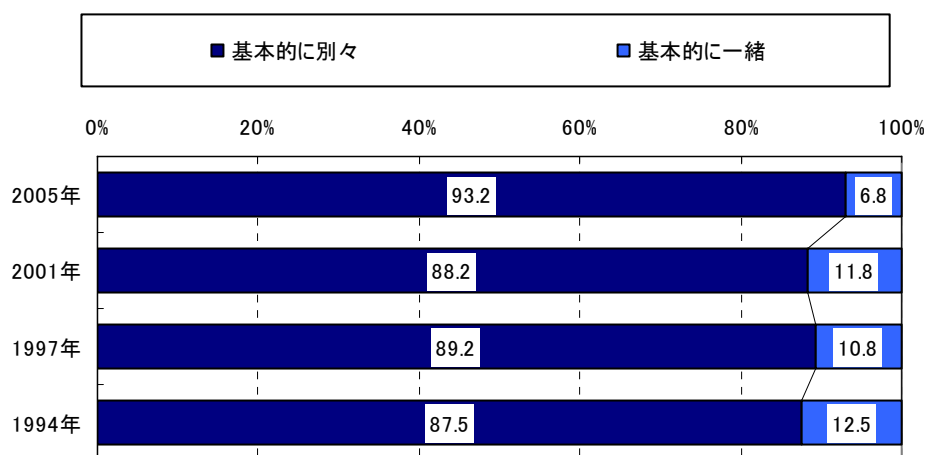
18. 娘夫婦同居は日常分離の裏で家事協力

食事、買い物、掃除、洗濯などの家事についての世帯間協力の実態を息子夫婦、娘夫婦同居による違いや、建物分離度による違いを見ながら分析します。

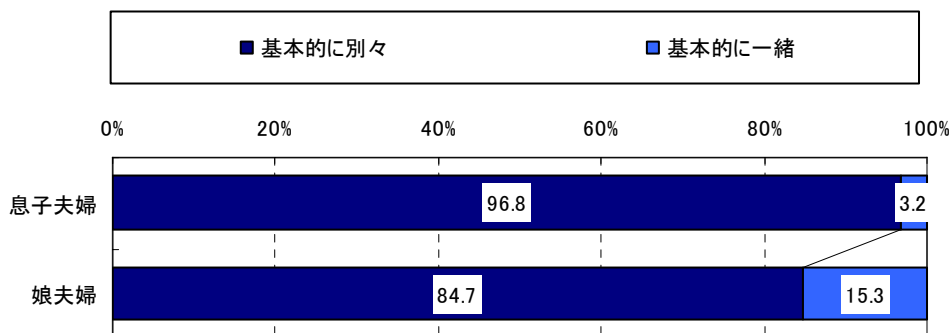
朝食は独立キッチンのタイプでは「基本的に別々」が93.2%に達しています。10年間の変化を見るとわずかながらこの率は高くなっています。分離度別に見ると共用+サブキッチンタイプで」あっても71.7%、共用キッチンタイプの40.4%が朝食を別々にしています。世帯間、世帯内での生活時間の違いがかなりあるためと思われます。またサブキッチンタイプで朝食を別々にとるケースが7割以上に達していることはサブキッチンが朝食に使われていることを示唆しています。

□家事の協力：普段の朝食

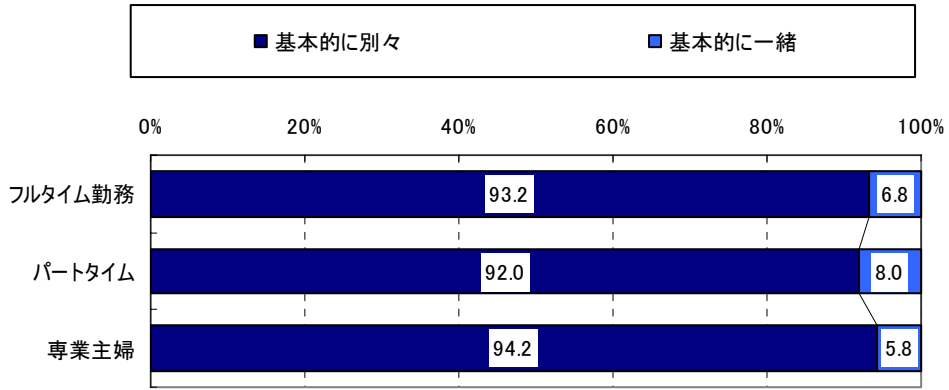
<子世帯>



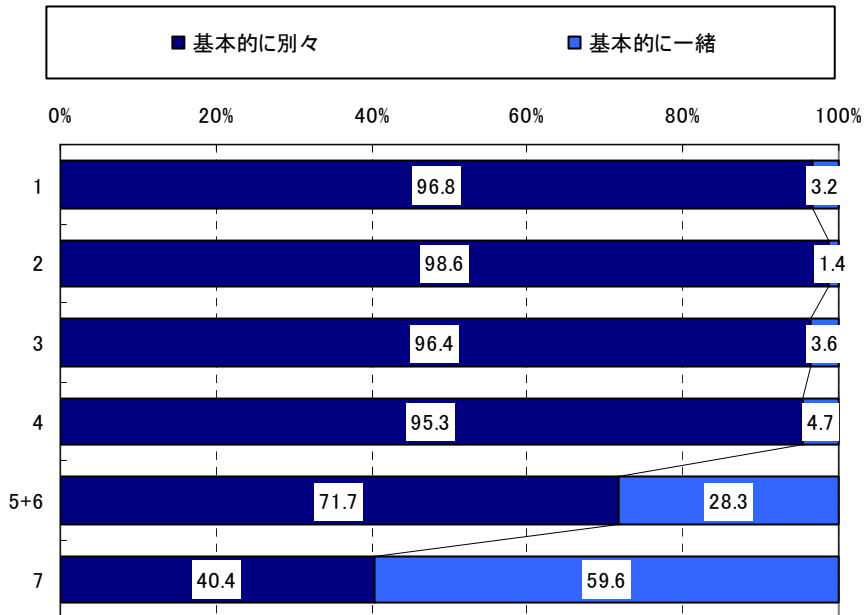
<子世帯-同居形態別>



<子世帯-職業形態別>



<子世帯-分離度別>



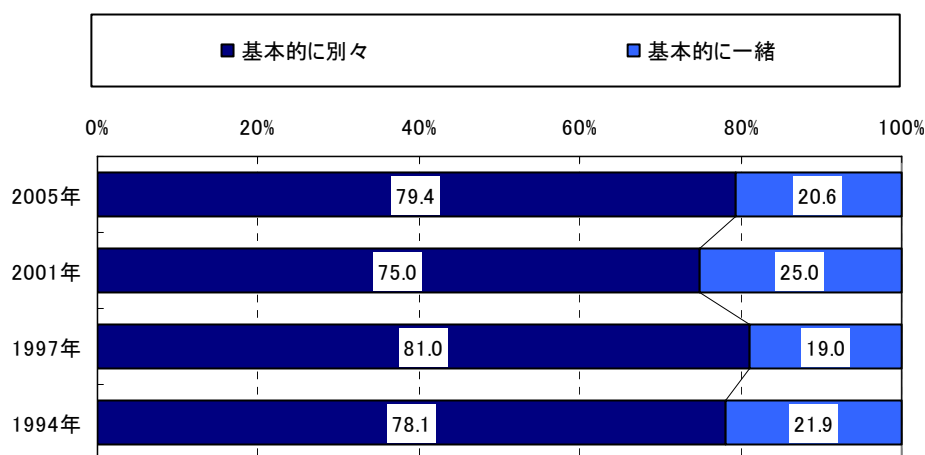
- 1. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できない
- 2. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できる
- 3. 台所、浴室は各世帯に1つずつあるが玄関は共用である
- 4. 台所は各世帯に1つずつあるが浴室、玄関は共用である
- 5+6. 主な台所が共用で他にサブキッチンがある
- 7. 単世帯型

夕食は独立キッチンを持つ場合は多くの場合別々に夕食をしています。分離度が高いほどこの傾向は強まり、完全分離型では9割を超え、浴室・玄関が共用のタイプにおいても76.6%が夕食を別々にしています。一方、共用+サブキッチンの場合は84.4%が夕食を一緒にとり、単世帯型では一緒にとる世帯が94.2%となっています。夕食を別々にとるのかどうかで独立キッチンとすべきかが決まる、という関係がありそうです。

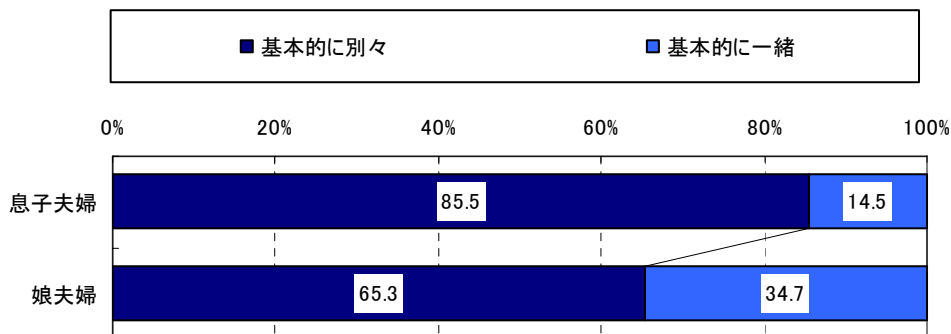
また、息子夫婦同居と娘夫婦同居を比較すると、朝食、夕食共に「基本的と一緒に」のケースが息子夫婦同居が朝食で3.2%、夕食で14.5%に過ぎないのに対し、娘夫婦同居は朝食で15.3%、夕食で34.7%存在しています。また、子世帯妻の就業形態による食事の分離度の差はほとんどありません。

□家事の協力：普段の夕食

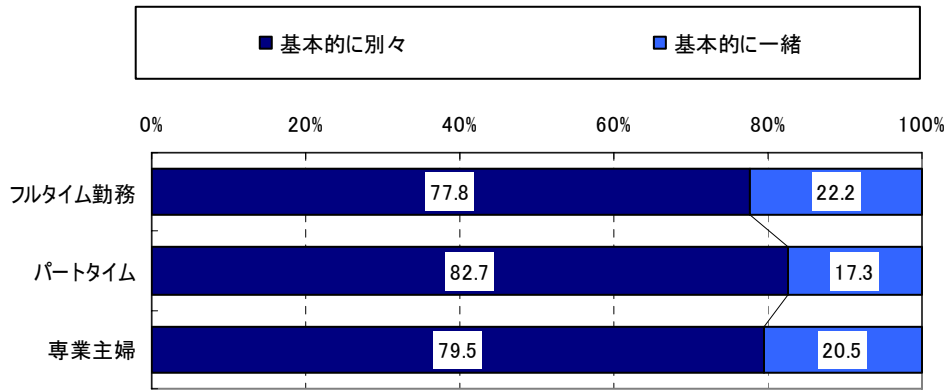
<子世帯>



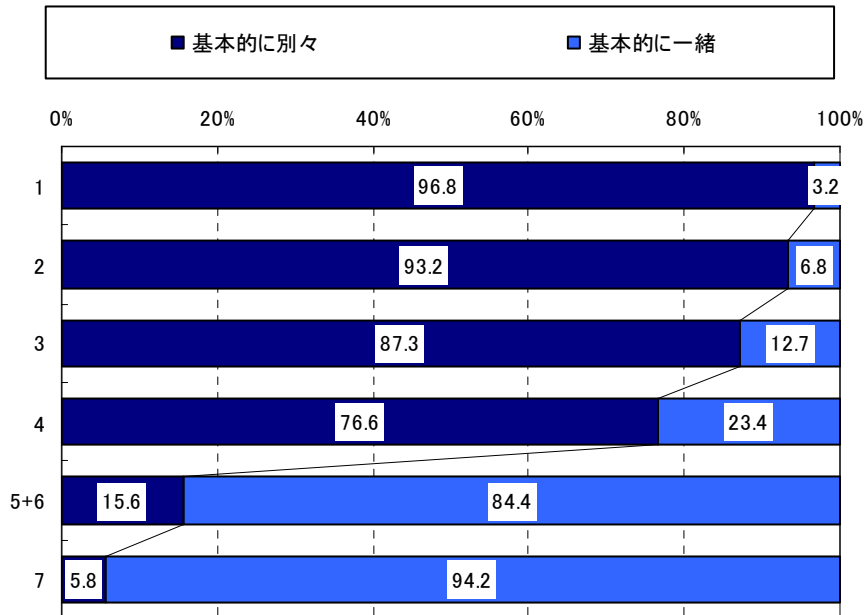
<子世帯-同居形態別>



<子世帯-職業形態別>



<子世帯-分離度別>

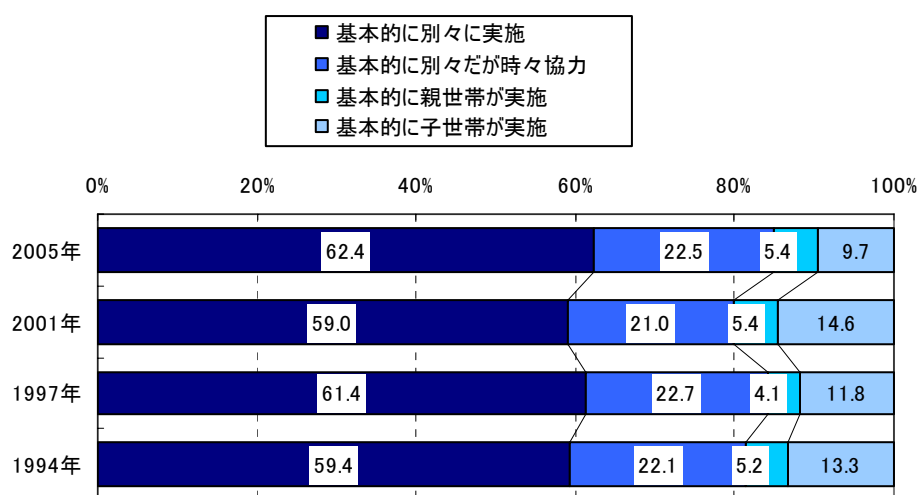


- 1. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できない
- 2. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できる
- 3. 台所、浴室は各世帯に1つずつあるが玄関は共用である
- 4. 台所は各世帯に1つずつあるが浴室、玄関は共用である
- 5+6. 主な台所が共用で他にサブキッチンがある
- 7. 単世帯型

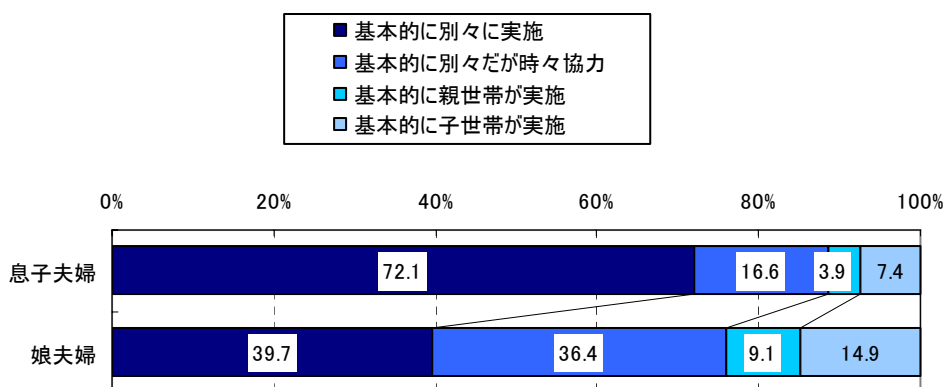
普段の買い物は二世帯型全体では「基本的に別々」が62.4%、「時々協力」が22.5%となっており、10年間を通じてあまり変わっていません。息子夫婦同居と娘夫婦同居を比較すると、娘夫婦同居の方が「基本的に別々」が大幅に少なく39.7%であり、その分「時々協力」や、どちらかの世帯が行う場合が増えています。建物分離度別に比較すると、内部行き来が不可のものは「時々協力」が9.7%と少なく、共用キッチンのタイプはどちらかの世帯が実施するものがサブキッチンありで計68.2%、なしで計88.2%と圧倒的多数となります。また、子世帯がフルタイムの共働きであるかどうかは食事同様ほとんど買い物分離度に影響していません。

□家事の協力：普段の買い物

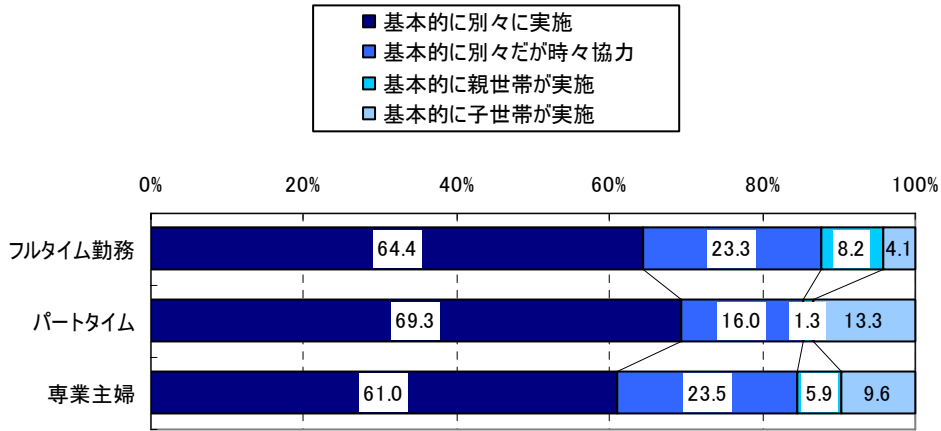
<子世帯>



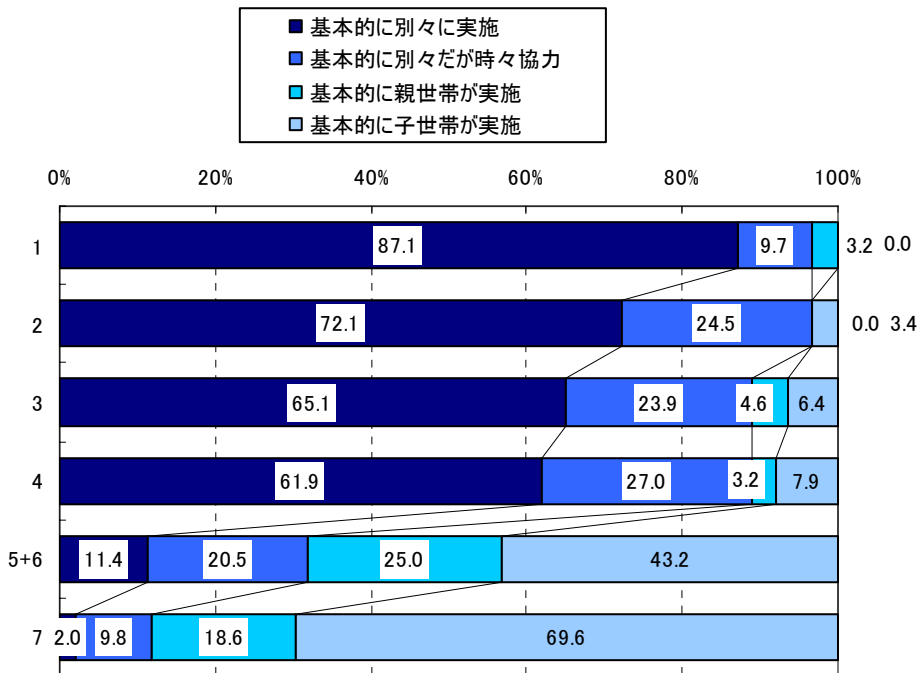
<子世帯-同居形態別>



<子世帯-職業形態別>



<子世帯-分離度別>

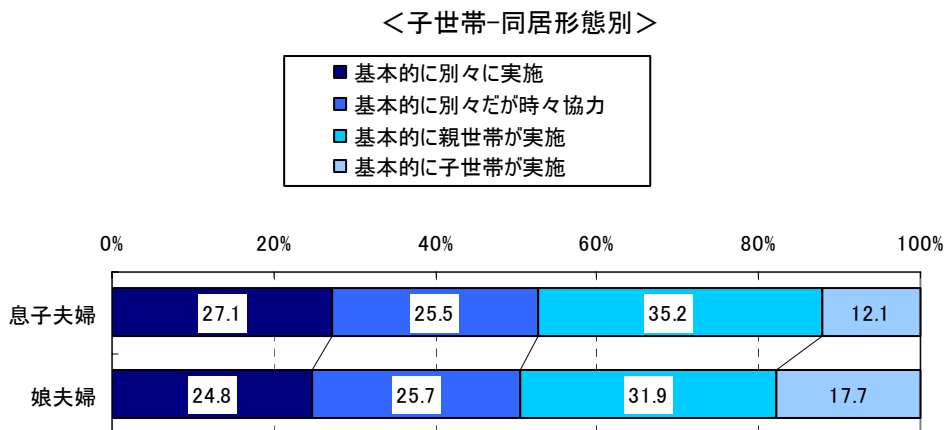
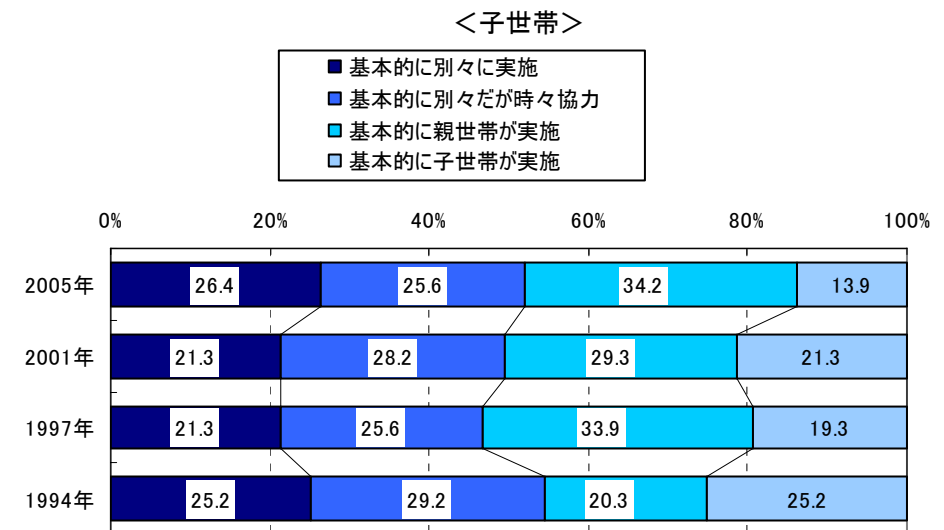


- 1. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できない
- 2. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できる
- 3. 台所、浴室は各世帯に1つずつあるが玄関は共用である
- 4. 台所は各世帯に1つずつあるが浴室、玄関は共用である
- 5+6. 主な台所が共用で他にサブキッチンがある
- 7. 単世帯型

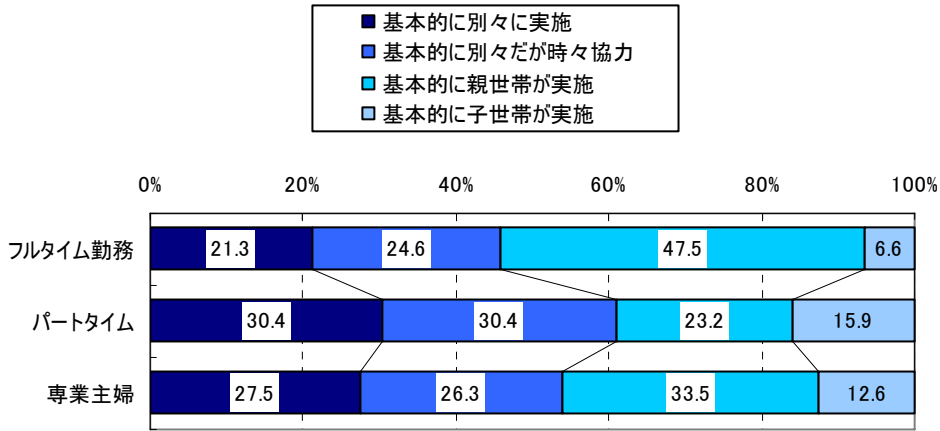
19. 共用部の掃除は親世帯を頼り、洗濯、ゴミ出しは独立に

共有スペースの掃除については、「基本的に親世帯」が34.2%を占め、「基本的に子世帯」は13.9%となっています。10年間を通じ、次第に親世帯に分担がシフトしてきている傾向があります。建物分離度別では玄関の専用/共用の影響が大きく、独立玄関のタイプでは別々、共用二世帯タイプでは親世帯、単世帯タイプでは子世帯が行うケースが多くなります。子世帯が共働きの場合は、親世帯が行う場合が増えますが、それでも約半数が基本的に別々に掃除を行っています。

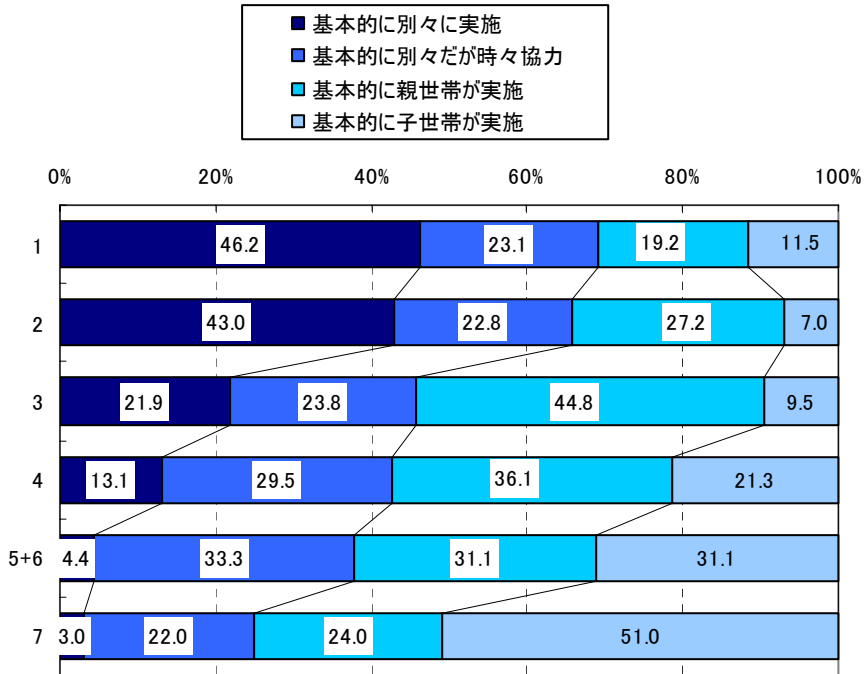
□家事の協力：共用スペースの掃除



<子世帯-職業形態別>



<子世帯-分離度別>

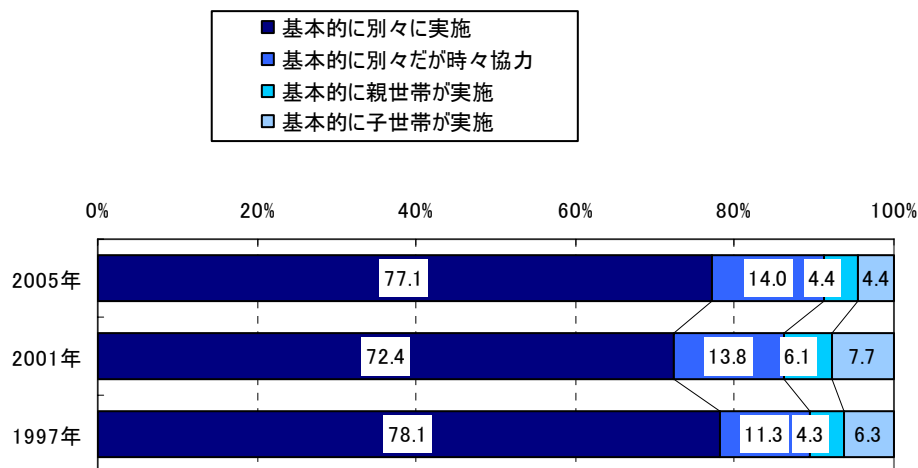


- 1. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できない
- 2. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できる
- 3. 台所、浴室は各世帯に1つずつあるが玄関は共用である
- 4. 台所は各世帯に1つずつあるが浴室、玄関は共用である
- 5+6. 主な台所が共用で他にサブキッチンがある
- 7. 単世帯型

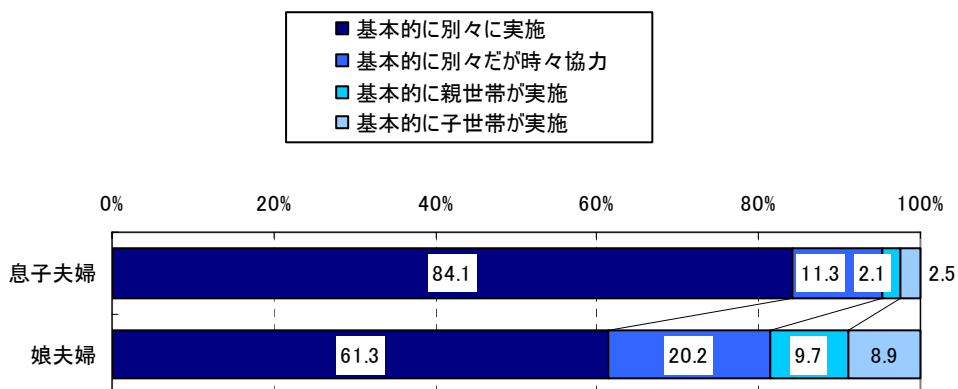
洗濯は 分離度別に見ると、完全分離型では基本的に別々な場合が合わせて9割を超えています。単世帯型が7割以上がどちらかの世帯が主に行うのと比べ対照的な結果となっています。「時々協力」とした回答は娘夫婦同居に多く（20.2%）息子夫婦（11.3%）の倍近い比率となっています。建物分離度別ではキッチンと浴室の分離度の影響が大きく、子世帯が共働きの場合でも、あまり協力度合いに変化は見られません。

□家事の協力：洗濯

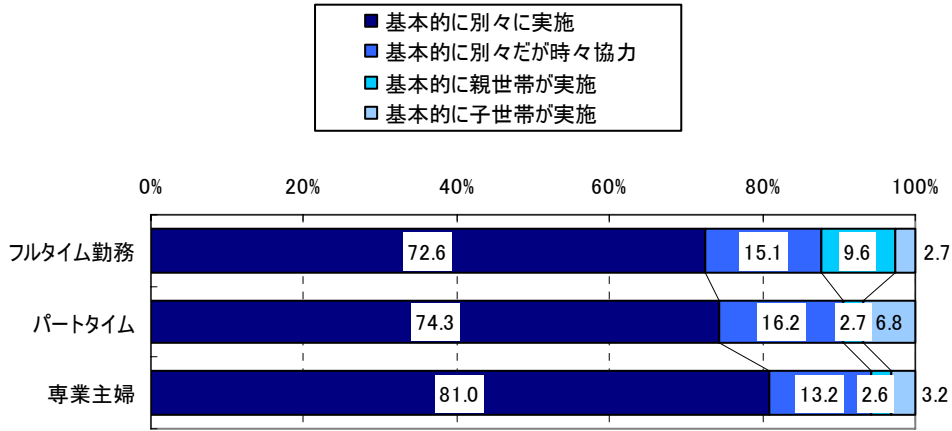
<子世帯>



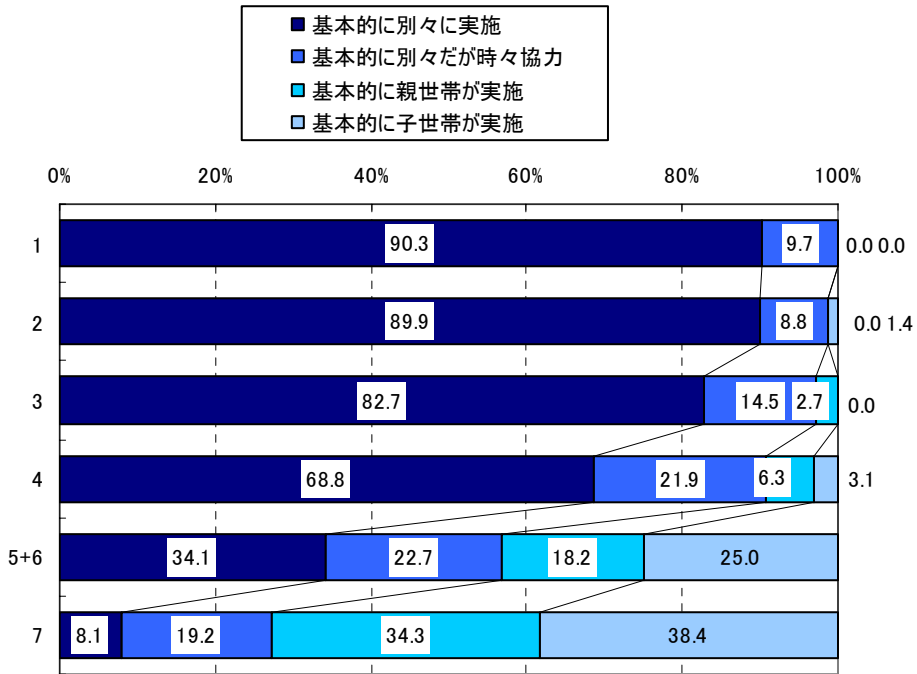
<子世帯-同居形態別>



<子世帯-職業形態別>



<子世帯-分離度別>



- 1. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できない
- 2. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できる
- 3. 台所、浴室は各世帯に1つずつあるが玄関は共用である
- 4. 台所は各世帯に1つずつあるが浴室、玄関は共用である
- 5+6. 主な台所が共用で他にサブキッチンがある
- 7. 単世帯型

ゴミ出しは基本的に別々な場合が合わせて8割を超え、単世帯型の9割以上がどちらかの世帯が主に行うのと比べ対照的な結果となっています。

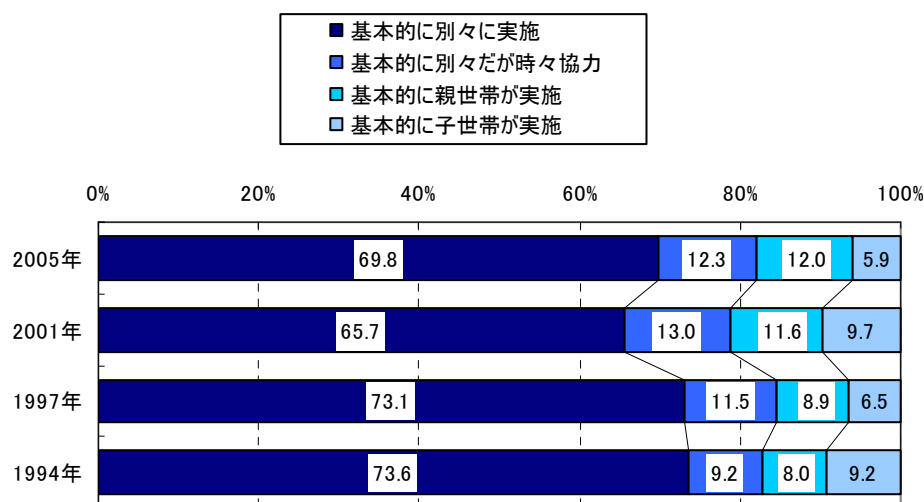
時々協力する、とした回答は娘夫婦同居に多く、息子夫婦の倍あります。

分離度別では、独立キッチンの場合には基本的に別々であることが多く、分離度が下がるほど「時々協力」が増える傾向にあります。共用キッチンの場合にはどちらかの世帯が行うのが過半数を占めます。

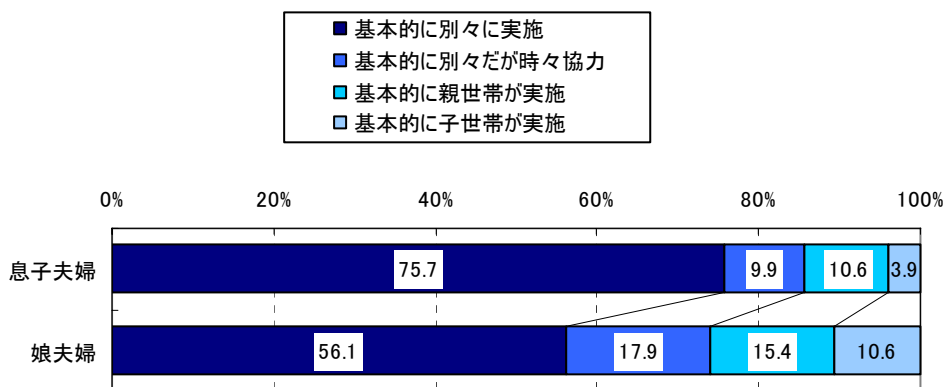
子世帯が共働きの場合でも、あまり協力度に差は見られません。

□家事の協力：ゴミ出し

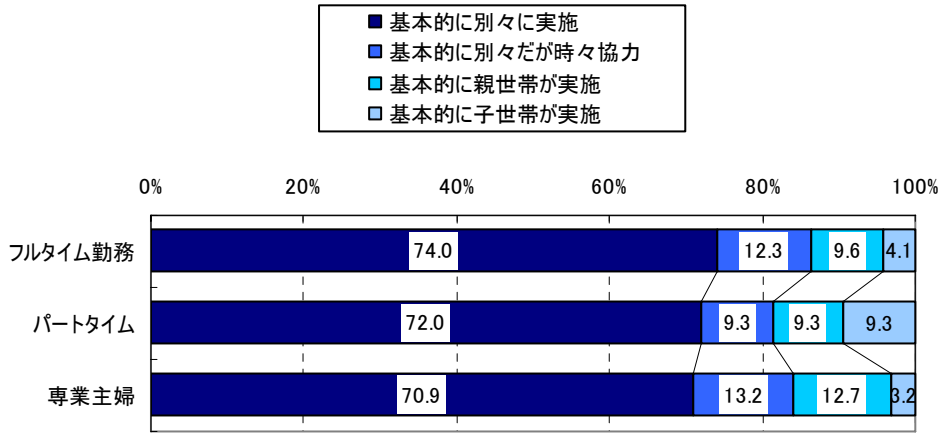
<子世帯>



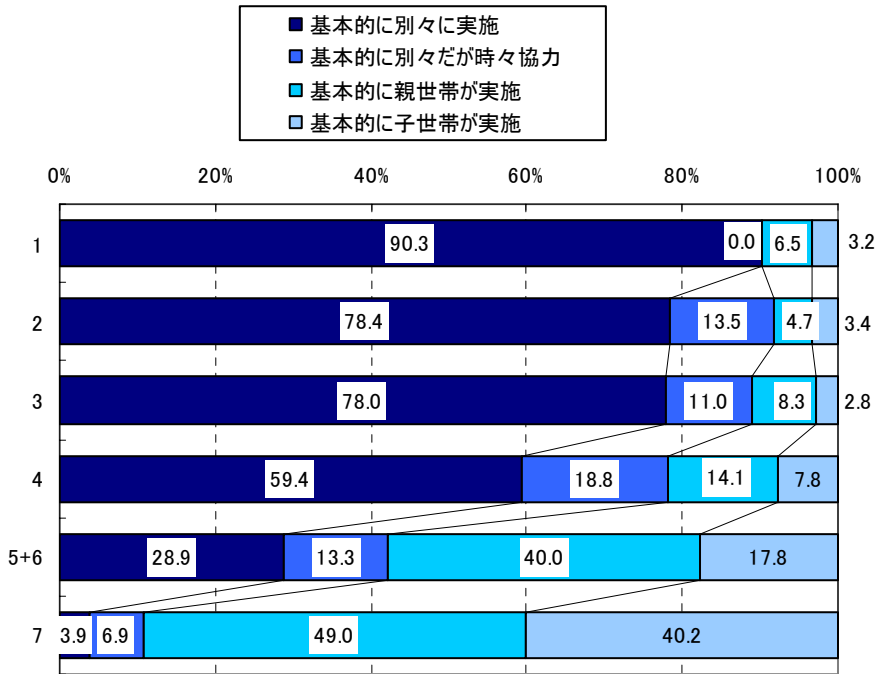
<子世帯-同居形態別>



<子世帯-職業形態別>



<子世帯-分離度別>



- 1. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できない
- 2. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できる
- 3. 台所、浴室は各世帯に1つずつあるが玄関は共用である
- 4. 台所は各世帯に1つずつあるが浴室、玄関は共用である
- 5+6. 主な台所が共用で他にサブキッチンがある
- 7. 単世帯型

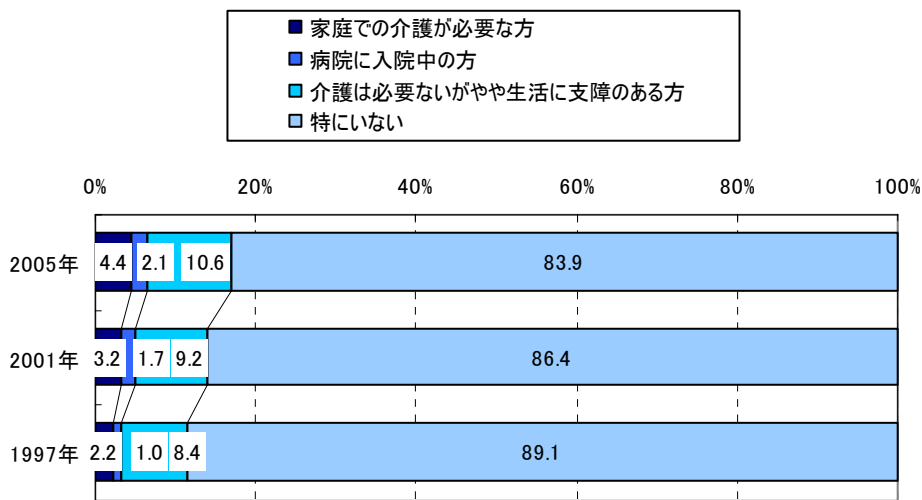
介護の協力

20. 子世帯の役割は世話・介護から精神的なサポートへ移行

要介護または入院中の家族がいる家庭は6.5%、生活に支障のある健康状態の家族がいる家庭が10.6%あります。また、親世帯ご主人の健康状態で、「良好である」は67.1%、「良好ではないが生活に支障はない」としたものが28.8%ありました。10年間の間に特に顕著な変化は見られず、比較的健康的な状態が多いものの、将来の健康不安も現実と感じられる状況と考えられます。

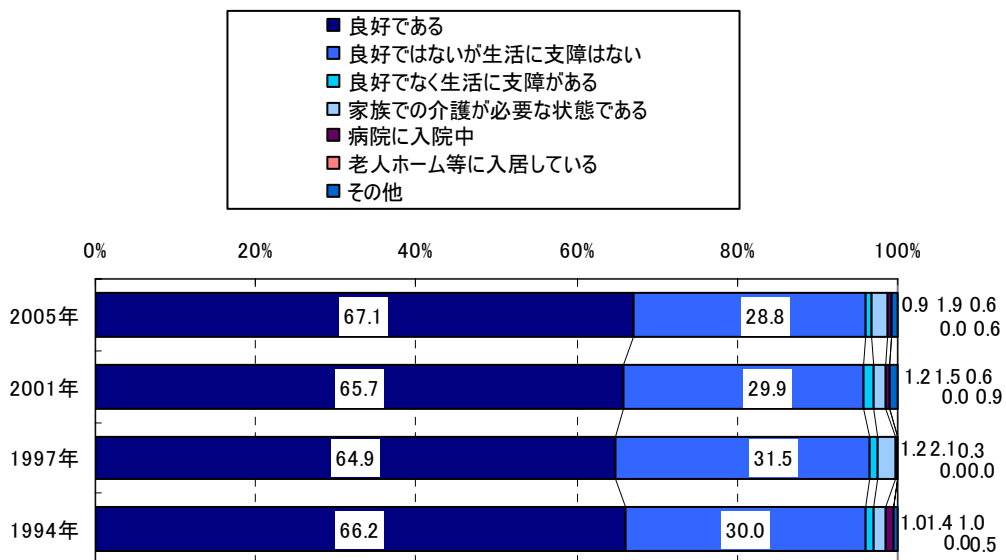
□介護の協力：家族の健康状態

<子世帯>



<親世帯>

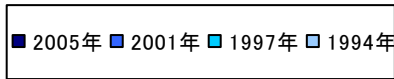
□介護の協力：親世帯ご主人の健康状態



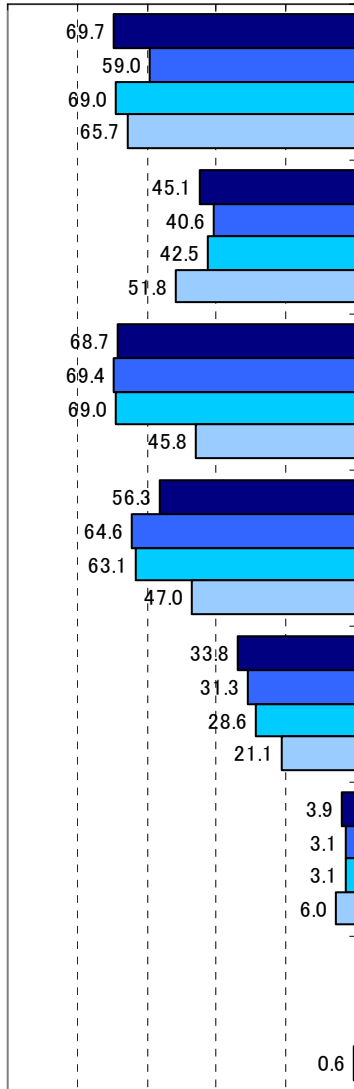
親世帯の老後について子世帯に訊ねた質問では、息子夫婦同居、娘夫婦同居共に、話し相手、身の回りの世話（55.1%）、看病や介護（47.1%）といった生活面のサポートが高くなっています。10年間の変化ではいずれも横ばい傾向にあります。

□介護の協力：同居している親世帯の老後

<夫の親-息子夫婦同居>



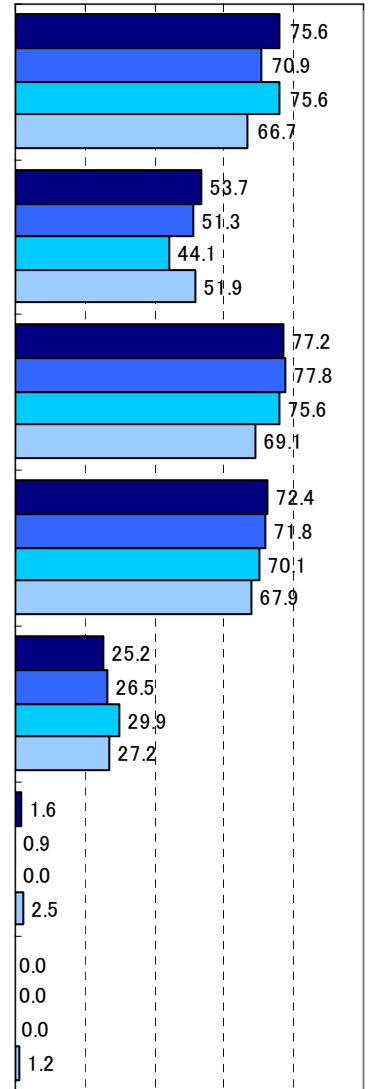
(%)
100 80 60 40 20 0



<妻の親-娘夫婦同居>



(%)
0 20 40 60 80 100



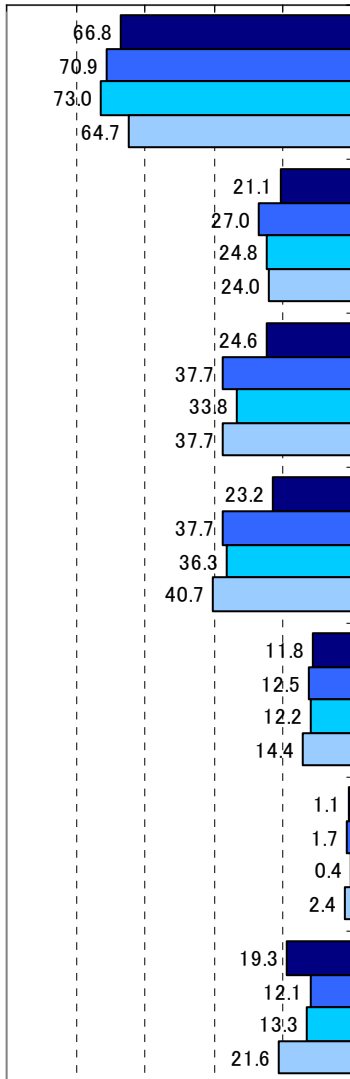
親世帯側から、実の子、実の子の配偶者に期待することをそれぞれ質問すると、全体的に「話し相手、相談相手」が安定して多く、世話、介護を期待するのは減ってきており、特に息子夫婦同居の場合の配偶者（＝子世帯妻）への期待ははっきりとした減少傾向を示しています。

□介護の協力：同居している実の子への期待

<息子-息子夫婦同居>



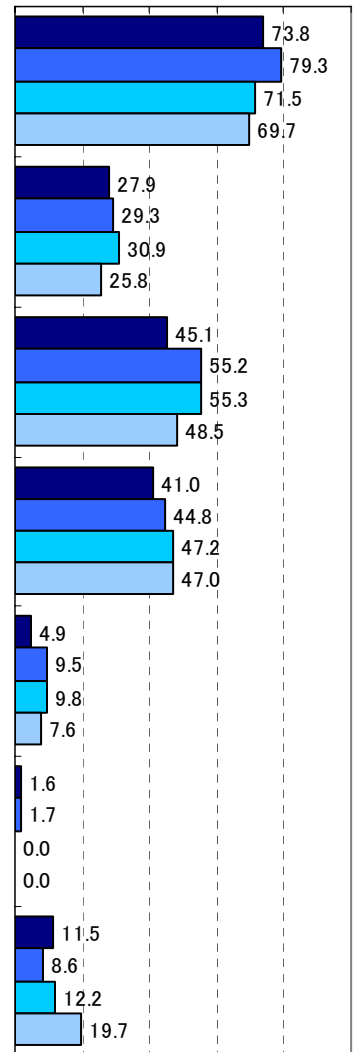
(%)
100 80 60 40 20 0



<娘-娘夫婦同居>



(%)
0 20 40 60 80 100

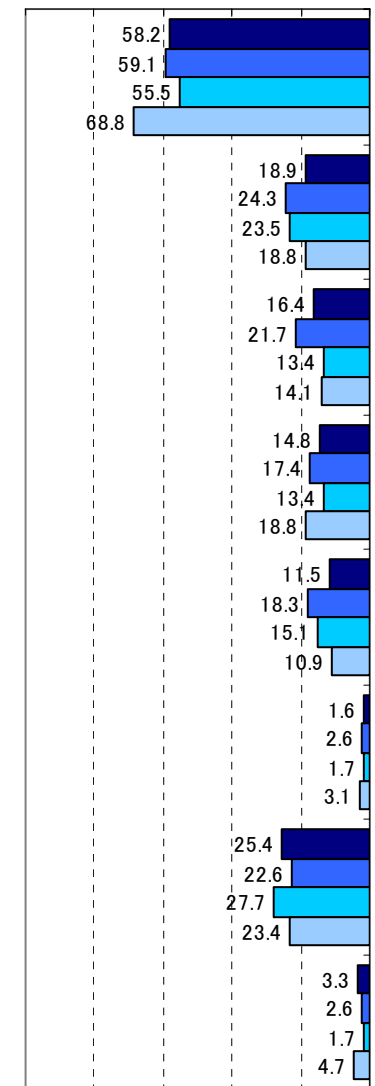


□介護の協力：同居している実の子の配偶者への期待

<娘の配偶者-娘夫婦同居>



(%)

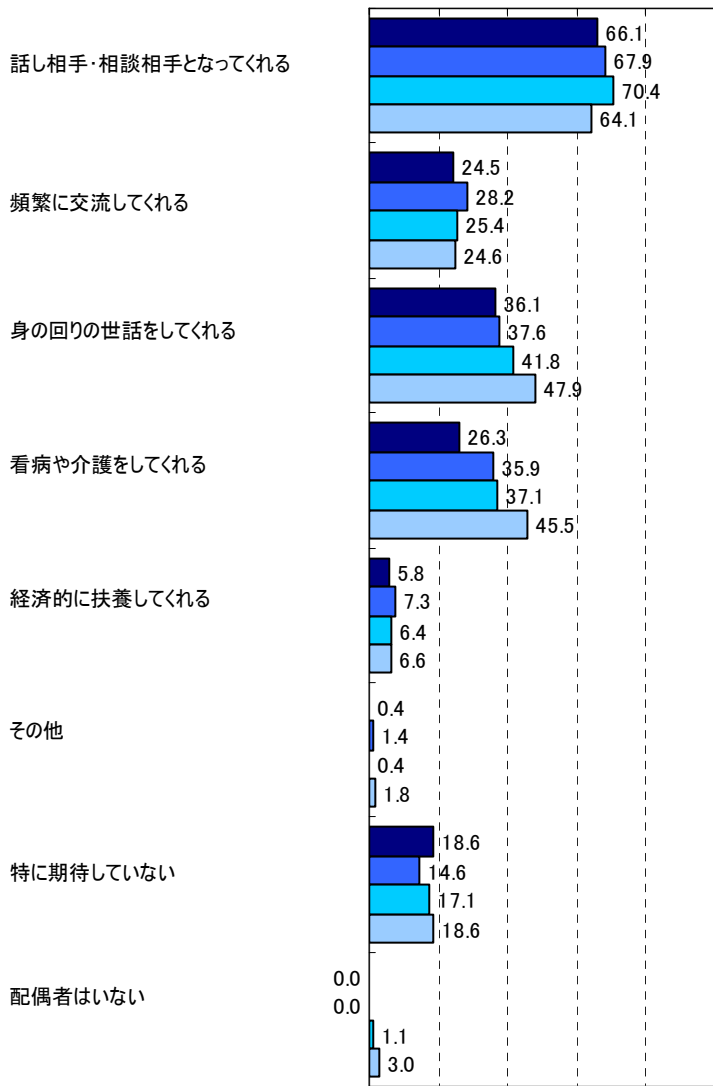


<息子の配偶者-息子夫婦同居>



(%)

0 20 40 60 80 100

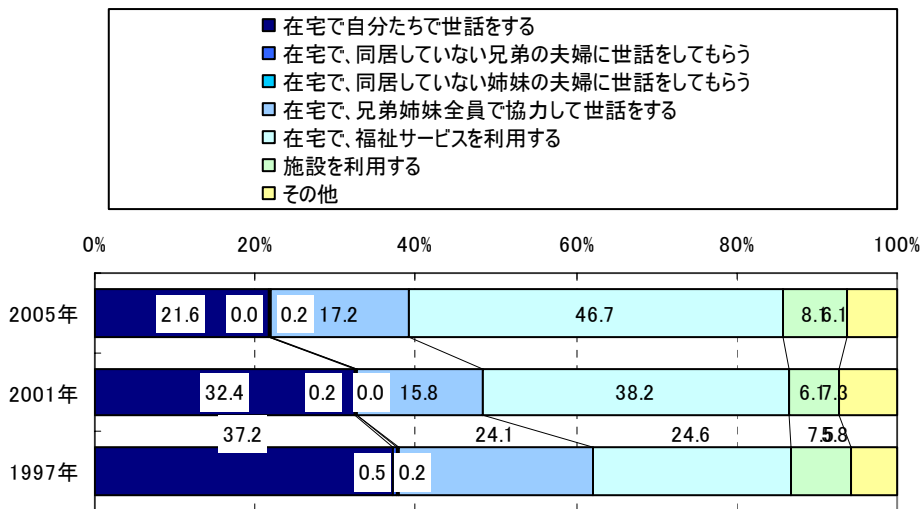


2 1. 介護はサービス利用で、相続は均等という考え方が親子共浸透

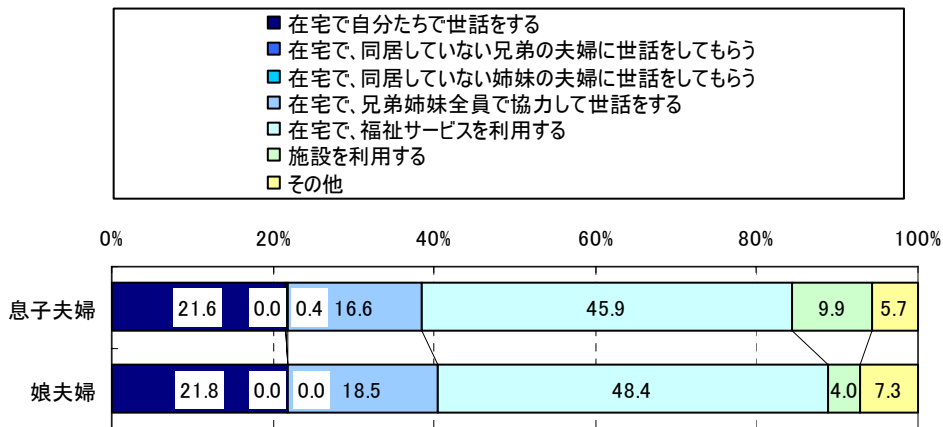
介護を必要とした場合も同居の子世帯がする、という回答が急減し、在宅で福祉サービスを利用する、という回答が子世帯、親世帯とも急激に増加しており、介護はプロにサービスを利用、という意識が定着してきています。職業形態ではフルタイム勤務者の方がよりこの傾向が強いです。建物分離度による差はあまりありません。

□介護の協力：同居親世帯の介護

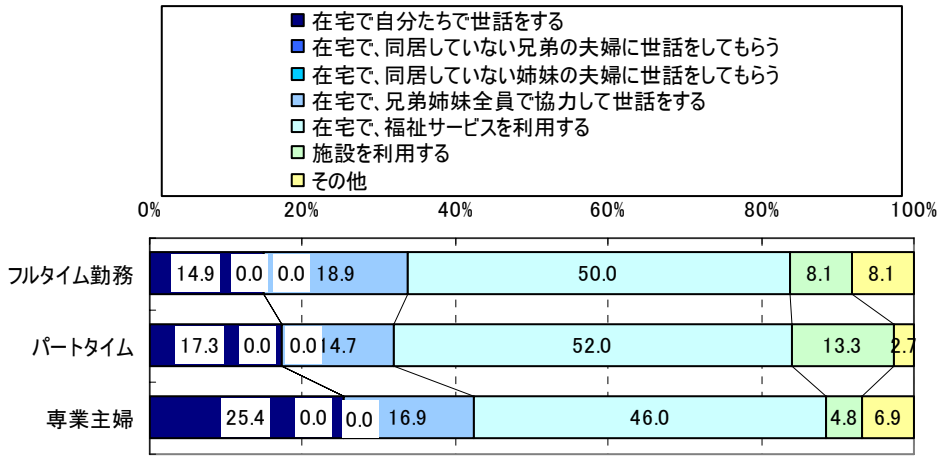
<子世帯>



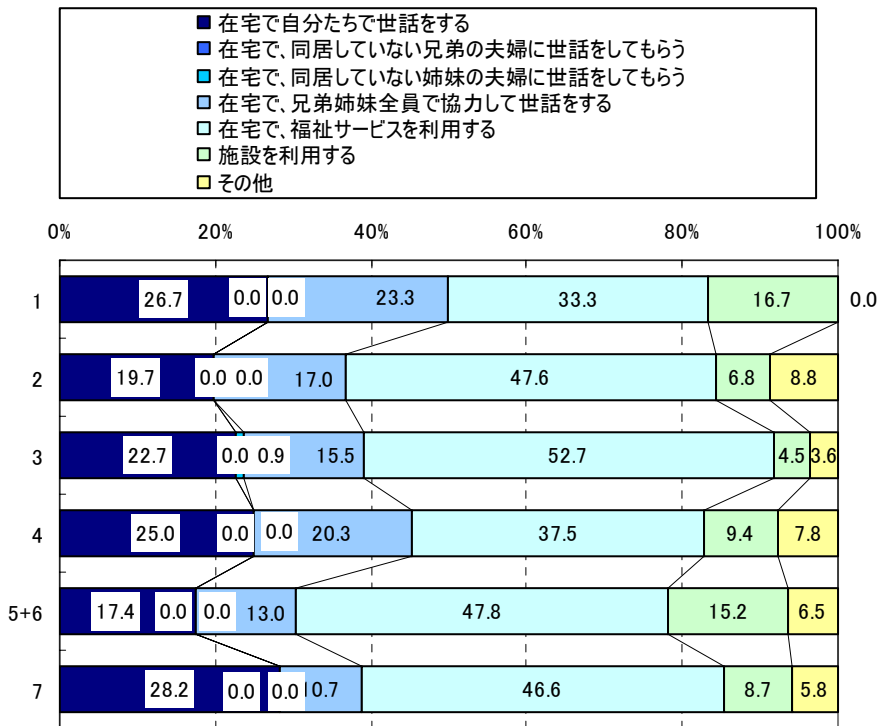
<子世帯-同居形態別>



<子世帯-職業形態別>



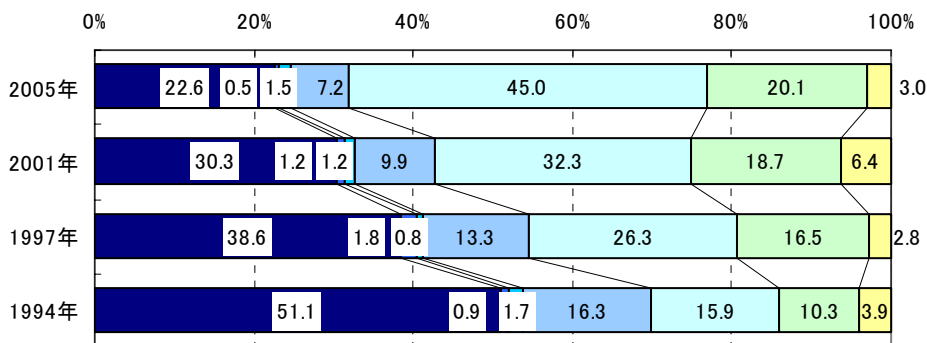
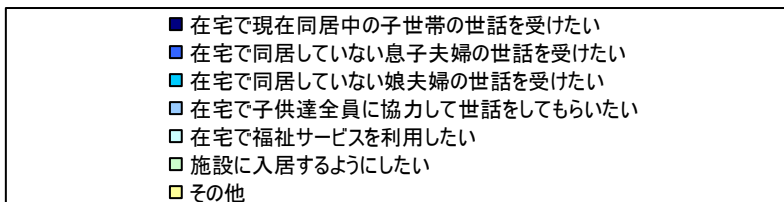
<子世帯-分離度別>



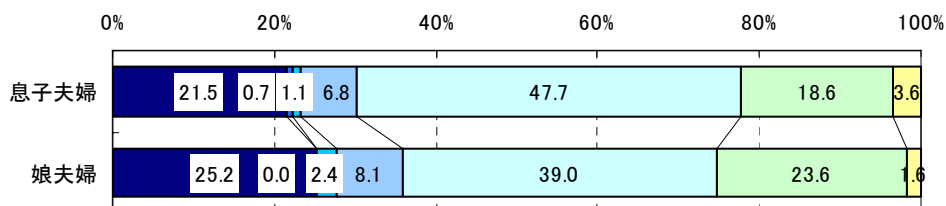
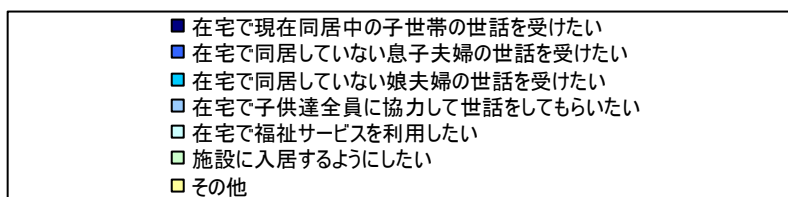
- 1. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できない
- 2. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できる
- 3. 台所、浴室は各世帯に1つずつあるが玄関は共用である
- 4. 台所は各世帯に1つずつあるが浴室、玄関は共用である
- 5+6. 主な台所が共用で他にサブキッチンがある
- 7. 単世帯型

□介護の協力：自分達が介護が必要になったら

<親世帯>



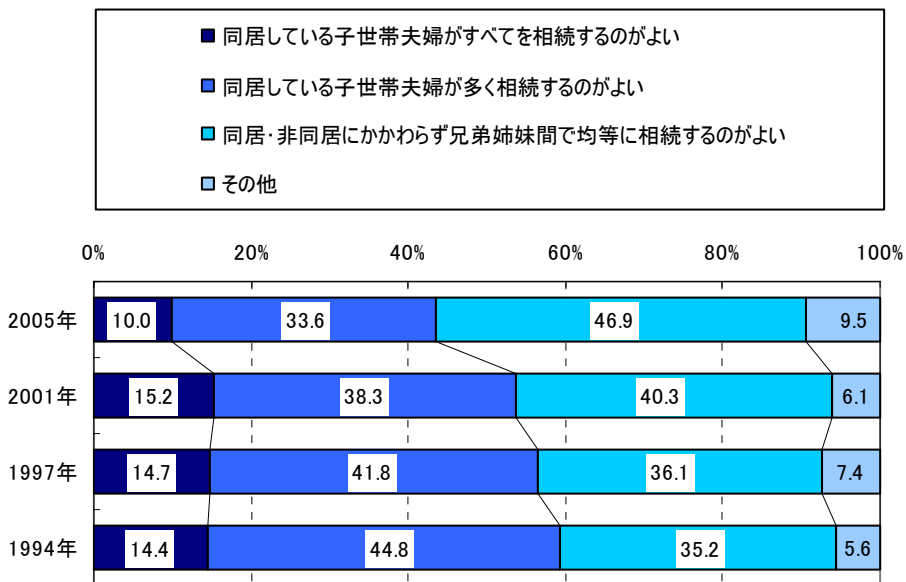
<親世帯-同居形態別>



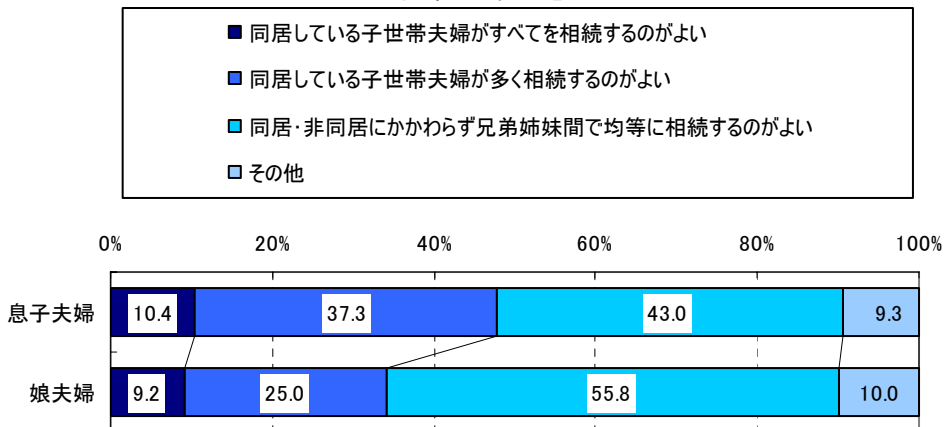
相続に関しても同居の家族が多くを相続するべき、という考え方は減少し、均等に分ける、という回答が増えています。同居することで親の世話介護を負担し、その代償として相続を厚く、という考え方は減ってきており、世話介護はサービスを利用し、相続は均等に、という考え方に移行してきています。職業形態による差は小さく、分離度が高いほど相続は均等に、という考え方が強くなる傾向があります。

□介護の協力：親世帯の資産の相続

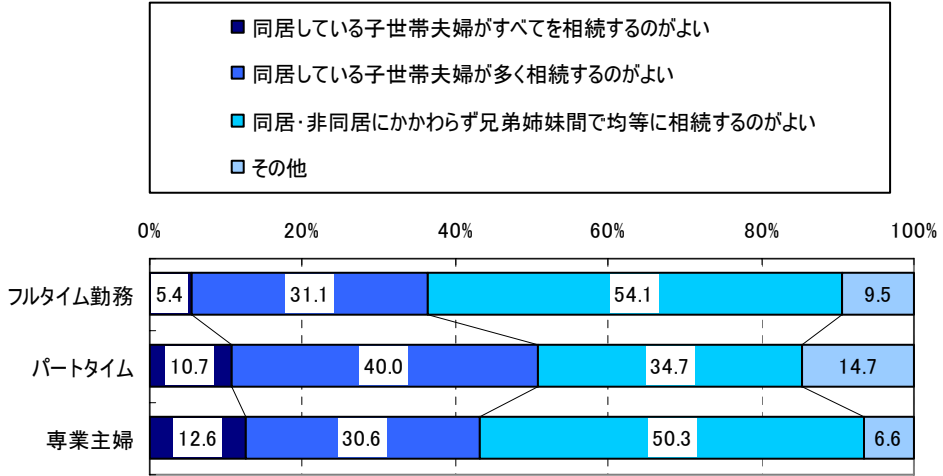
<子世帯>



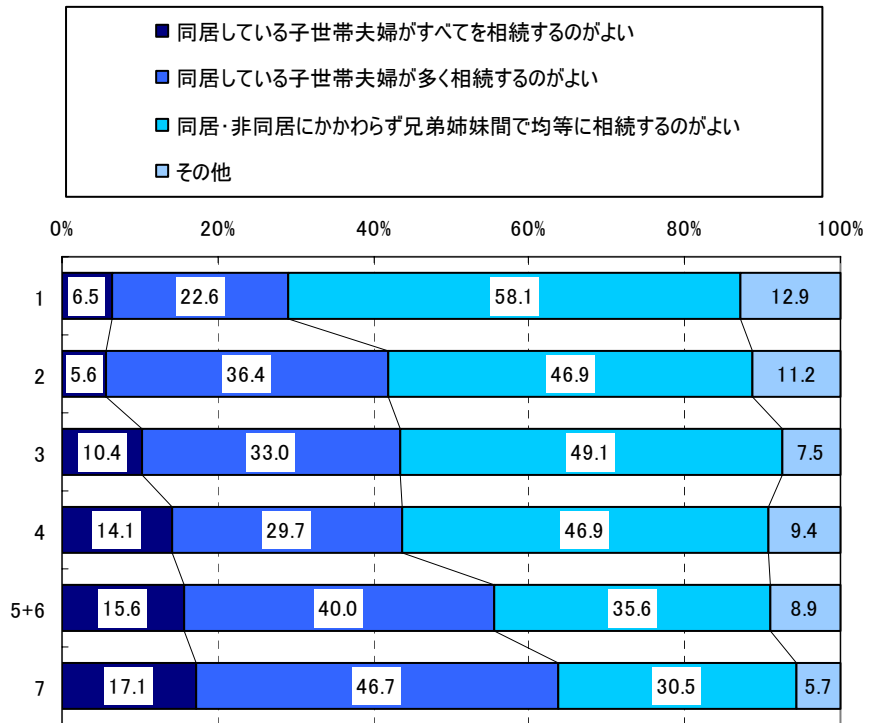
<子世帯-同居形態別>



<子世帯-職業形態別>



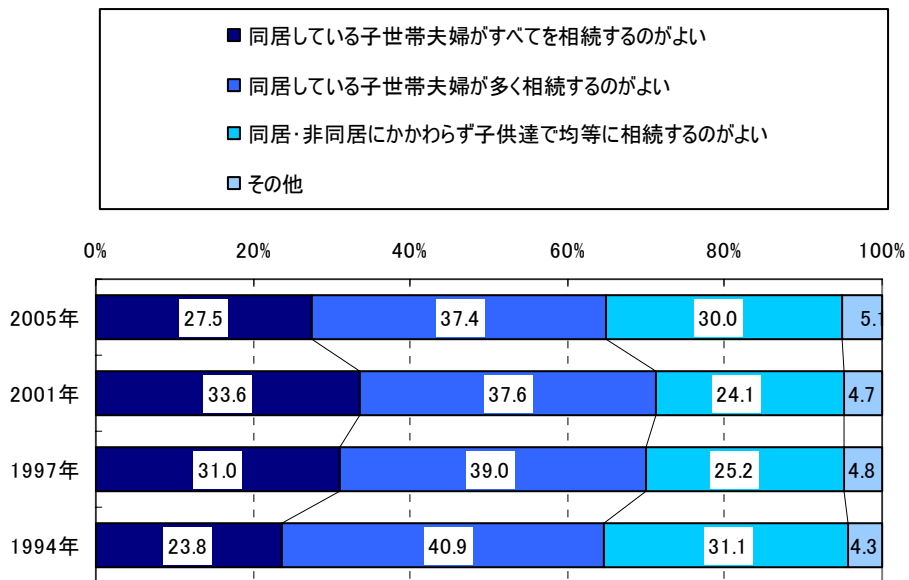
<子世帯-分離度別>



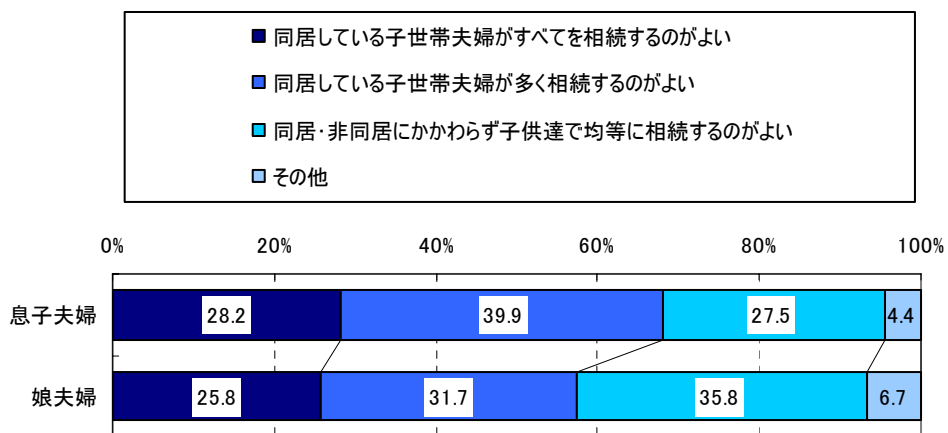
- 1. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できない
- 2. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できる
- 3. 台所、浴室は各世帯に1つずつあるが玄関は共用である
- 4. 台所は各世帯に1つずつあるが浴室、玄関は共用である
- 5+6. 主な台所が共用で他にサブキッチンがある
- 7. 単世帯型

□介護の協力：子世帯への資産の相続

<親世帯>



<親世帯-同居形態別>



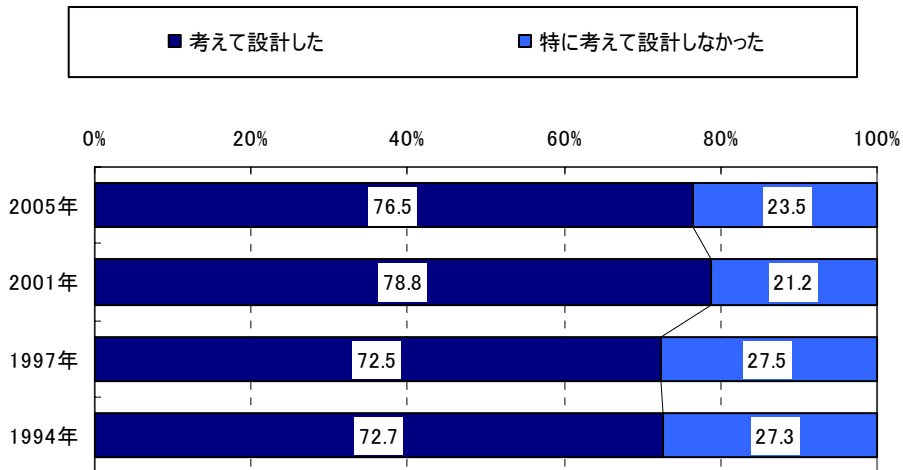
家族の変化への対応

2.2. 家族の変化への対応を考え、高齢化にも備えている

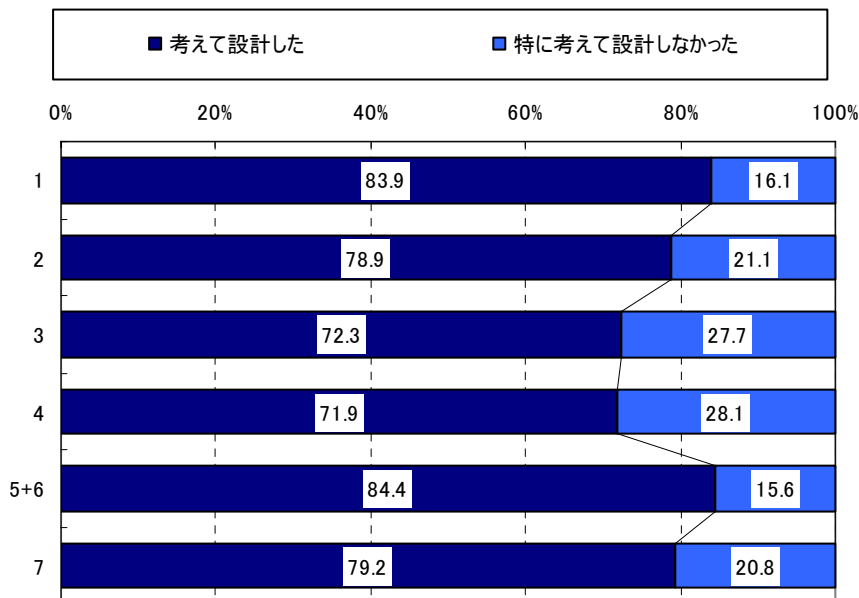
将来の変化を見越して設計、は76.5%が意識しており、親世帯の手摺などの高齢化配慮を「考えて設計した」も83.4%に上ります。10年間を通じて親世帯のスペースについては常に8割以上が高齢化対応を意識しており、大きな変化はありません。親世帯と共に、「子世帯まで含めて全体的に」高齢化配慮をした人は31.1%と、前回2001年に比べ約7ポイント下がっています。

□家族変化への対応：将来の変化への対応

<子世帯>



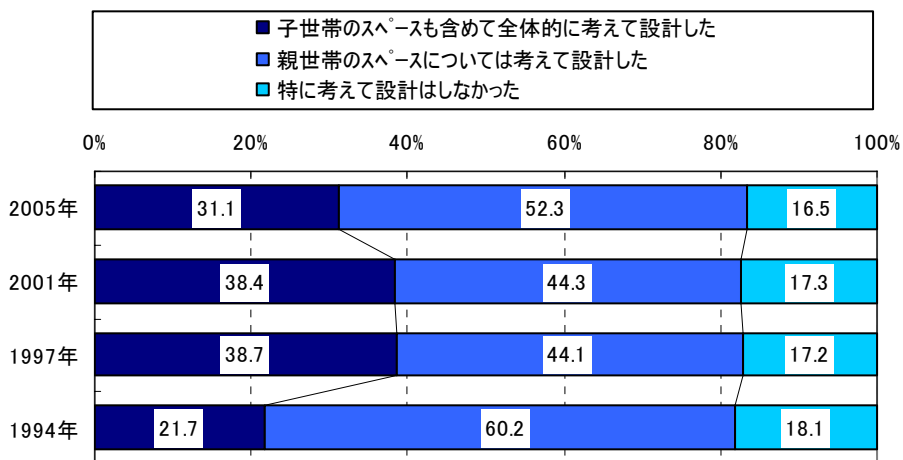
<子世帯-分離度別>



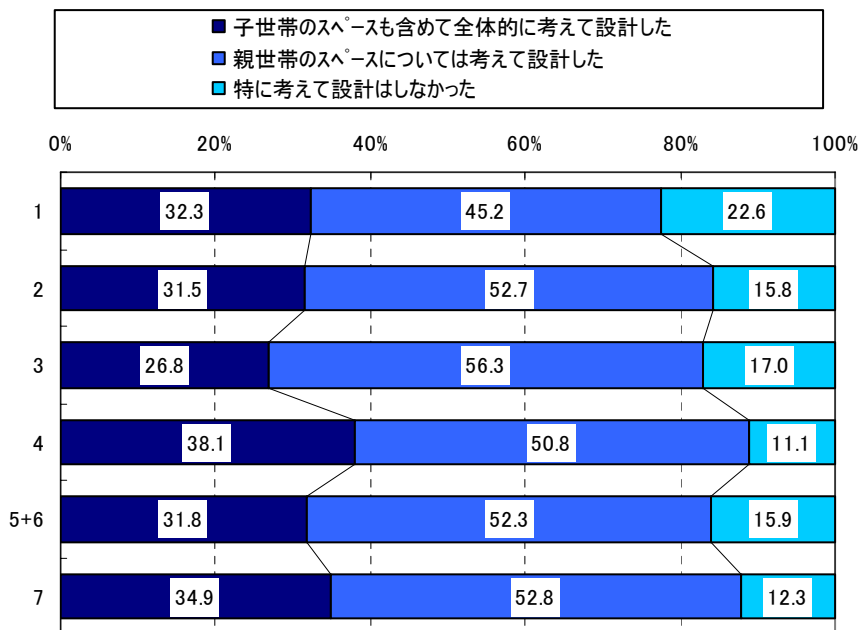
1. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できない
2. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できる
3. 台所、浴室は各世帯に1つずつあるが玄関は共用である
4. 台所は各世帯に1つずつあるが浴室、玄関は共用である
- 5+6. 主な台所が共用で他にサブキッチンがある
7. 単世帯型

□家族変化への対応：高齢化への対応

<子世帯>



<子世帯-分離度別>

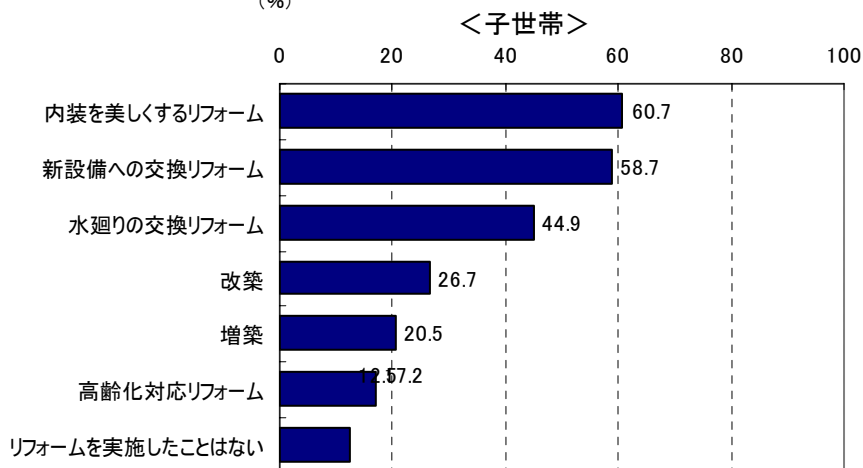


- 1. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できない
- 2. 台所、浴室、玄関が各世帯に1つずつあり内部で行き来できる
- 3. 台所、浴室は各世帯に1つずつあるが玄関は共用である
- 4. 台所は各世帯に1つずつあるが浴室、玄関は共用である
- 5+6. 主な台所が共用で他にサブキッチンがある
- 7. 単世帯型

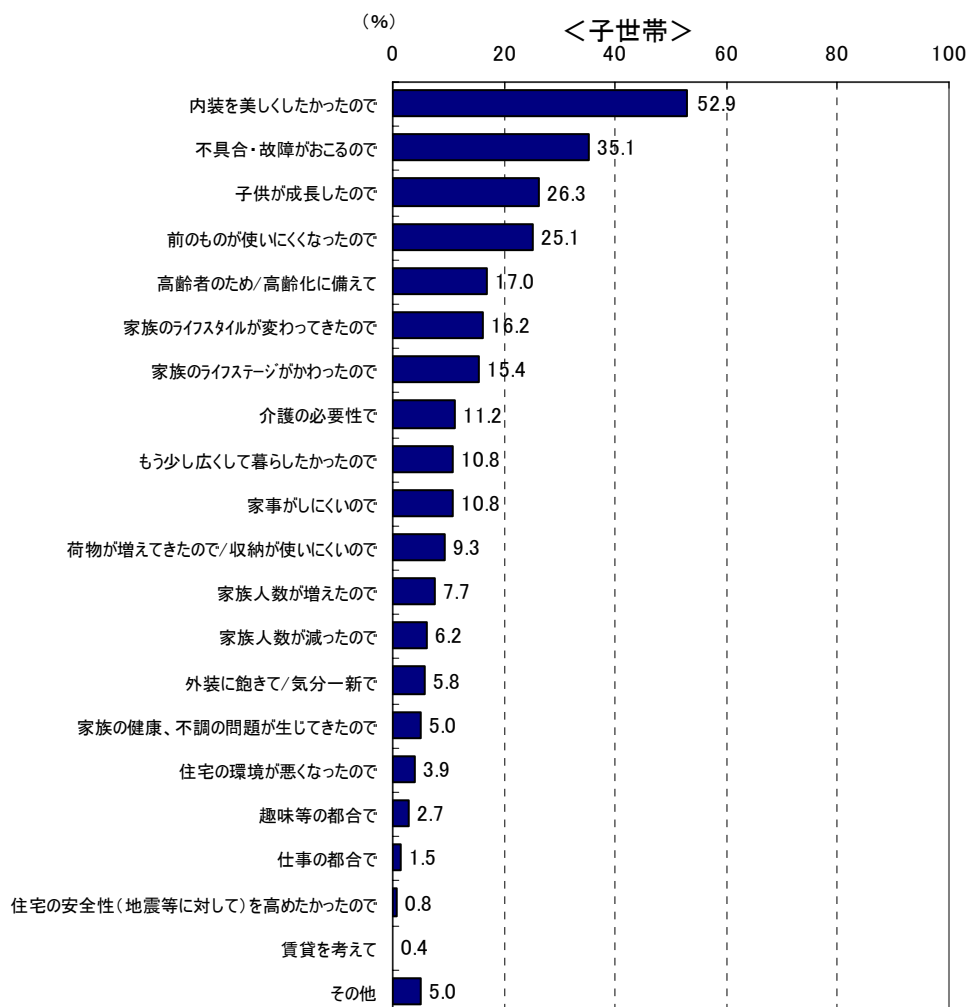
〈参考：20年を超えた二世帯住宅調査結果より〉

20年超の二世帯調査に拠れば、高齢化対応リフォームを17.2%が行っており、実施理由でも17.0%が高齢化対応を挙げています。更に介護の必要性で、とした回答は11.2%あります。

□家族変化への対応：20年間のリフォーム状況（※参考data 20年を超えた二世帯調査結果より）



□家族変化への対応：リフォーム実施理由（※参考data 20年を超えた二世帯調査結果より）

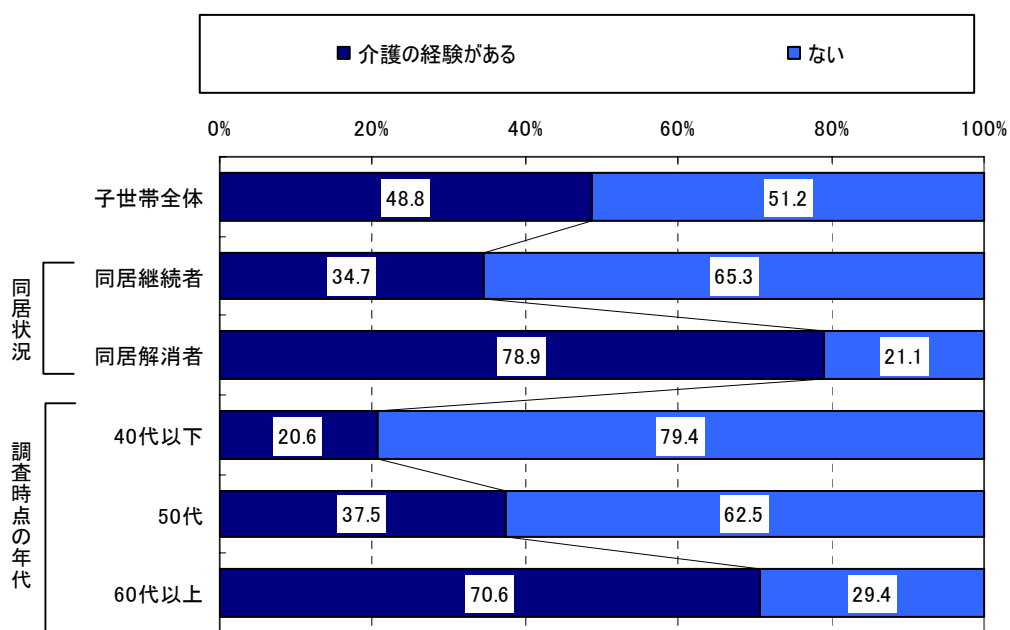


〈参考：20年を超えた二世帯住宅調査結果より〉

20年超の二世帯調査に拠れば、同居期間中に介護を経験した率は平均48.8%に上っています。現時点での子世帯の年齢が高いほど介護経験が増え、親との同居解消者（多くは死別と考えられる）の78.9%が介護を経験したと答えている事から見て、二世帯同居では最終的に8割近くが介護を経験するものと考えた方が良いでしょう。

□家族変化への対応：介護の経験（※参考data 20年を超えた二世帯調査結果より）

〈子世帯〉



2.3. 貸しやすい完全分離型（内部行き来不可）の3割が賃貸を意識

片方の世帯を賃貸にすることは、「考えて設計」「考えたが設計には反映せず」を合すると全体で17.9%が意識しています。建物分離度による違いが大きく、完全分離型で行き来不可の場合では「考えて設計」が29.0%、「考えたが設計には反映せず」を合すると35.5%が将来の賃貸化を意識しており、建物の分離度が上がるほど賃貸化を意識していることがわかります。

□家族変化への対応：将来の賃貸への対応

<子世帯>

